

川池西古窯

-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

2017

大府市教育委員会
株式会社二友組

川池西古窯

-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

2017

大府市教育委員会
株式会社二友組



1.調査区遠景 北東から



2.調査区全景 俯瞰

卷頭図版2



1.SY01前庭部完掘 北から



2.SY01前庭部断面 南東から



1.SY01焚口完掘 東から



2.SY01焚口断ち割り断面 東から



3.SY01前庭部焼台出土状況 南東から



4.SK01・02完掘 東から

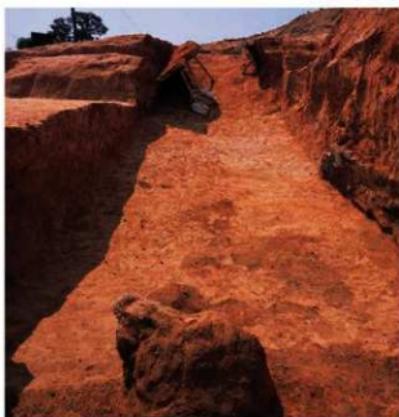


5.SK05断面・遺物出土状況 北から

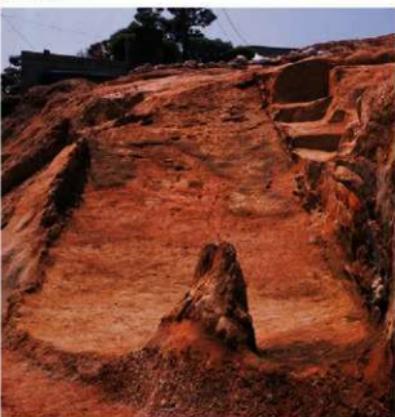
卷頭図版4



1.SY02・03完掘 南西から



2.SY02完掘 北東から



3.SY03完掘 北東から



1.SY02(Cライン)断面 北から



2.SY02(Aライン東半)断ち割り断面 北から



3.SY02分炎柱出土状況 南から



4.SY02分炎柱断面 南から



5.SY02(Aライン西半)断ち割り断面 東から



6.SP01(ロクロピット)粘土出土状況 南西から

卷頭図版6



1.SY03断面 西から



2.SY03(△ライン)断ち割り断面 南から



3.SY03分炎柱断面 南西から



4.灰原4遺物出土状況 南東から



5.出土遺物

例言

1. 本書は、愛知県大府市桃山町地内に所在する、川池西古窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は、集合住宅建設に伴う事前調査として、三輪碭子の委託を受けた株式会社二友組が行い、経費は三輪碭子の負担による。調査面積は 333 m²である。
3. 調査は、平成 29 年 2 月 1 日～平成 29 年 4 月 21 日にかけて行った。
4. 調査は、大府市教育委員会監督の下、以下の体制で行った。

監督員：田中城久（大府市歴史民俗資料館埋蔵文化財専門員）

施工管理技士：岡嶋宏明・後藤英樹

調査員：杉山敬亮

調査補助員：高木祐志・高橋理恵・湯川善一

測量技術員：白木宏幸・舟橋哲郎

調査作業員：鶴飼京子・寺沢なつ江・仲川信子・中西雅夫・山田 順

整理補助員：田北 碧 （五十音順・敬称略）

5. 本書の執筆者は、下記の通り。本書の編集は、高橋が行った。

杉山：第 1 章第 2 節、第 3 章第 1 節、第 5 章第 3 節

高橋：第 2 章、第 3 章第 3 節、第 5 章第 1・2 節

湯川：第 3 章第 2 節

田中：第 1 章第 1 節

小林克也（株式会社パレオ・ラボ）：第 4 章

6. 遺物の写真撮影は、杉山が行った。

7. 本書掲載の図版作成・遺物実測・遺物トレースは、高橋が行った。

8. 本書で使用した座標は、世界測地系に準拠した公共座標成果（VII 系）、方位は公共座標方位に基づき、標高は東京湾平均海面（T.P.）を使用した。

9. 土色および遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著 2014『新版標準土色帖』36 版 日本色研事業株式会社を参考とし、粒径は Wentworth の粒径区分法を用いた。

10. 出土遺物の注記は、略称である「KWIN' 16」 4 枝の取上げ番号・遺構名・層位名とした。

11. 出土遺物ならびに図面・写真・台帳類は大府市歴史民俗資料館が保管している。

12. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々の御指導御協力を賜った。記して感謝いたします。

赤塚次郎・安津由香里・大和ハウス工業株式会社・大府市文化保護委員・岡本直久・藤澤良祐・宮澤浩司（五十音順・敬称略）

凡例

1. 本書に掲載する遺構・遺物図は、以下の縮尺を基本とした。

遺構図：窯体・土坑 1/40、ピット 1/20、全体図 1/150・1/300・1/500、遺物出土状況図 1/20

遺物図：1/3

2. 遺構・遺物図にみえる記号等は次のとおり。

■ 横化物範囲 ■ 焼土範囲 ——ケズリとナデの境界

3. 本書では、次に示した地図を調整・使用している。

国土地理院発行 1:25,000 地形図「鳴海」(平成 10 年)、「刈谷」(平成 21 年)

国土地理院発行 1:50,000 地形図「名古屋南」(平成 13 年)、「半田」(平成 19 年)
「豊田」(平成 11 年)

地理調査所発行 1:200,000 地勢図「名古屋」「豊橋」「岐阜」「飯田」(昭和 29 年)

地質調査所発行 1:50,000 地質図「名古屋南」「半田」(昭和 61 年)

4. 遺物の年代観および器種分類については、以下の参考文献を基本とした。

斎藤孝正 1988 「中世猿投窓の研究－編年に関する一考察－」『研究論集 C I 史学 34』

名古屋大学文学部

中野晴久 2012 「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業 3 中世・近世 常滑系 愛知県史編さん委員会

藤澤良祐 2007 「総論」『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系 愛知県史編さん委員会

5. 参考文献は以下のとおり。本書の記述は、特に断らない限りこれらの文献を引用・参照している。

池本正明ほか 2013 『別幅古窯群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 187 集

財團法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

大杉規之ほか 2015 『鶴池東古窯一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

ナカシャクリエイティブ株式会社

大府市 1991 『大府市誌 資料編 考古』愛知県大府市

大府市 1996 『海陸庵古窯址群・神明古窯址群 大府半月地区土地区画整理地内埋蔵文化財発掘報告書』大府市文化財調査報告書第 2 集 大府市教育委員会

大府市 2000 『ガンジ山 A 古窯跡群 大府市桃山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第 4 集 大府市教育委員会

大府市 2005 『深廻間 A 古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第 5 集 大府市教育委員会

大府市 2006 『深廻間 B 古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第 7 集 大府市教育委員会

大府市 2007 『砂原古窯跡 大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第 8 集 大府市教育委員会

大府市 2008 『深廻間 C 古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第 9 集 大府市教育委員会

- 大府市 2009 『瀬戸B古窯跡群・奥谷古窯跡 大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査
報告書1』 大府市文化財調査報告書第10集 大府市教育委員会
- 大府市 2010 『羽根山古窯跡群 大府羽根山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第6集 大府市教育委員会
- 大府市 2011 『立会池西A古窯跡群・立会池B古窯跡群 大府共和西土地区画整理地内埋蔵文化財
発掘調査報告書』 大府市文化財調査報告書第13集 大府市教育委員会
- 大府市 2014 『瀬戸C古窯跡・久分古窯群 大府市共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査
報告書』 大府市文化財調査報告書第11集 大府市教育委員会
- 大府市 2016 『市内遺跡調査報告書 平成7~22年度の試掘調査・立会調査報告』
大府市文化財調査報告書 第12集 大府市教育委員会
- 川合剛ほか 1992 『NN 302号窯・NN 304号窯発掘調査報告書』
名古屋市教育委員会
- 柴垣勇夫 1969 『吉田第一号窯発掘調査報告書』 大府市教育委員会
- 柴垣勇夫 1975 『吉田第二号窯発掘調査報告書』 大府市教育委員会
- 中野良法ほか 1999 『森岡第1号窯跡群』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第85集
財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

表1 編年対応表

推定 歴年代	和 暦	時 代	山茶碗			古瀬戸 (藤澤編年)	主要事項	参考事項
			瀬戸窯 (藤澤編年)	猿投窯 (斎藤編年)	常滑窯 (中野編年他)			
1000—寛弘五			第1型式					
1050—承暦五		平安時代 山茶碗	第2型式					
1100—康和二			第3型式	第1型式 古窯跡 新段階		1 a型式		
1150—久安七			第4型式	第2型式 古窯跡 新段階	第1段階	1 b型式		
1200—正治二			第5型式	第3型式 古窯跡 新段階	第2段階	2型式		
1250—宝治四		鎌倉時代 山茶碗	第6型式	第1型式		3型式	草創期 I a期 I b期	
1300—正安二			第7型式	第2型式		4型式	I c期 II a期 II b期 II c期	
1350—南北朝			第8型式	第3型式	第2段階	5型式	III期	
1400—応永四		室町	第9型式		第3段階	6 a型式	IV期	
1450—			第10型式			6 b型式	I期	
			第11型式			7型式	II期 III期 IV期	
						8型式	I期 II期	
						9型式	後期様式 III期 IV期古	
						10型式	IV期新 IV期新	
								1467(応仁元) 応仁の乱発生。
								1333(元弘三) 鎌倉幕府滅亡。 1338(應安元) 足利尊氏、征夷大将军となる。
								1221(承久三) 承久の乱。 1274(文永十一) 文永の役。 1281(弘安四) 弘安の役。
								1156(保元元) 保元の乱。 1160(平治元) 平治の乱。
								1185(寿永四) 鎌倉幕府成立。
								1281(弘安四) 弘安の役。

参考文献

大府市誌編さん刊行委員会 1991『大府市誌 資料編 近代現代』附年表 愛知県大府市

斎藤孝正 1988 「中世猿投窯の研究—編年に関する一考察—」『研究論集C I 史学34』

名古屋大学文学部

中野晴久 2012 「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系 愛知県史編さん委員会

藤澤良祐 2007 「総論」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 濱戸系 愛知県史編さん委員会

目次

卷頭図版	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 基本層序	13
第3節 遺構と出土遺物	15
第4章 川池西古窯出土炭化材の樹種同定	42
第5章 総括	46
第1節 遺物分類	46
第2節 編年の位置付け	56
第3節 遺構	58
遺物観察表	62
遺構観察表	64
図版	

挿図目次

図 1 調査前地形	2	図 24 SK 06	35
図 2 遺跡の位置	4	図 25 灰原(1)	36
図 3 大府市表層地質図	5	図 26 灰原(2)	37
図 4 周辺の遺跡	7	図 27 灰原・築窯排水範囲	38
図 5 地区割り	11	図 28 灰原出土遺物(1)	39
図 6 部位名称・窯体内グリッド・計測位置	12	図 29 灰原出土遺物(2)	40
		図 30 灰原出土遺物(3)	41
図 7 基本土層模式図	13	図 31 遺構外出土遺物	41
図 8 基本土層	14	図 32 川池西古窯出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	45
図 9 初回操業	16	図 33 分類(1)	47
図 10 最終操業	17	図 34 分類(2)	48
図 11 SY 01 焚口・前庭部(1)	18	図 35 分類別比率	49
図 12 SY 01 焚口・前庭部(2)	19	図 36 径高指指数グラフ(1)	50
図 13 SK 01・02・03	20	図 37 径高指指数グラフ(2)	51
図 14 SK 05(1)	21	図 38 遺構別径高指指数グラフ(1)	52
図 15 SK 05(2)	22	図 39 遺構別径高指指数グラフ(2)	53
図 16 SY 02(1)	24	図 40 遺構別径高指指数グラフ(3)	54
図 17 SY 02(2)	25	図 41 遺構別器形分類	55
図 18 SY 02(3)	26	図 42 編年対応図	57
図 19 SY 02(4)	27・28	図 43 遺構別古段階・新段階比率	58
図 20 SK 04・SP 01	29	図 44 ロクロピット模式図	58
図 21 SY 03(1)	30	図 45 時期別遺構変遷	59
図 22 SY 03(2)	32		
図 23 SY 03(3)	33・34		

表目次

表 1 編年対応表	46
表 2 周辺の遺跡	8
表 3 土層観察表	37
表 4 川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果(1)	42
表 5 川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果(2)	43
表 6 遺構別遺物集計表	46
表 7 分類別平均法量と形状(碗・小皿)	47
表 8 分類別平均法量と形状(片口鉢)	48
表 9 工房と窯体類例	60
表 10 遺物観察表(1)	62
表 11 遺物観察表(2)	63
表 12 遺物観察表(3)	64
表 13 遺構観察表	64

図版目次

卷頭図版 1	3
1. 調査区遠景 北東から	
2. 調査区全景 傾歎	
卷頭図版 2	3
1. SY 01 前庭部完掘 北から	
2. SY 01 前庭部断面 南東から	
卷頭図版 3	3
1. SY 01 焚口完掘 東から	
2. SY 01 焚口断ち割り断面 東から	
3. SY 01 前庭部焼台出土状況 南東から	
4. SK 01・02 完掘 東から	
5. SK 05 断面・遺物出土状況 北から	

卷頭図版4

- SY 02・03 完掘 南西から
- SY 02 完掘 北東から
- SY 03 完掘 北東から

卷頭図版5

- SY 02 (Cライン) 断面 北から
- SY 02 (Aライン東半) 断ち割り断面 北から
- SY 02 分炎柱出土状況 南から
- SY 02 分炎柱断面 南から
- SY 02 (Aライン西半) 断ち割り断面 東から
- SP 01 (クロロピット) 粘土出土状況
南西から

卷頭図版6

- SY 03 断面 西から
- SY 03 (Aライン) 断ち割り断面 南から
- SY 03 分炎柱断面 南西から
- 灰原4 遺物出土状況 南東から
- 出土遺物

図版1 調査前・検出・調査区壁面

- 調査前 南西から
- 調査前灰原露出状況 (F 4) 東から
- 調査前SY 03露出状況 (F 7・8) 北東から
- 調査区北半検出状況 南西から
- 調査区北壁 南東から
- 調査区西壁北半 南東から
- 調査区西壁南半 南東から
- 調査区南壁 北西から

図版2 遺構

- 調査区北半完掘 南西から
- 調査区南半完掘 西から

図版3 遺構

- SY 01 前庭部完掘 東から
- SY 01 前庭部断面 南東から
- SY 01 焚口完掘 東から
- SK 01 完掘 北東から
- SK 01 断面 北東から

図版4 遺構

- SK 02 完掘 北東から
- SK 02 断面 東から
- SK 03 断面 東から
- SK 05 断面 北東から
- SK 05 遺物出土状況 北東から

図版5 遺構

- SY 02 (左)・SY 03 (右) 完掘 南西から
- SY 02 完掘 南西から
- SY 02 (窓体グリッドI) 天井検出 北から
- SY 02 (窓体グリッドII) 天井検出 北東から

図版6 遺構

- SY 02 分炎柱周辺遺物出土状況 東から
- SY 02 (Aライン東半・Eライン) 断面 南から
- SY 02 (Aライン西半) 断面 北東から
- SY 02 分炎柱出土状況 南から
- SY 02 挖削痕検出 北西から

図版7 遺構

- SK 04・SP 01 完掘 南東から
- SK 04 遺物出土状況 北西から

図版8 遺構

- SP 01 完掘 南西から
- SP 01 断面 南から
- SP 01 段下げ状況 南西から
- SP 01 粘土出土状況 南西から
- SP 01 断ち割り断面 南から

図版9 遺構

- SY 03 完掘 南西から
- SY 03 (Aライン西半・Bライン東半) 断面
北東から
- SY 03 (Bライン西半) 断面 南から
- SY 03 (Cライン西半・Dライン) 断面 北から
- SY 03 (窓体グリッドIII・V) 壁検出 北から
- SY 03 (窓体グリッドII・IV) 壁検出 東から

図版10 遺構

- SY 03 分炎柱出土状況 南西から
- SY 03 断ち割り断面 東から
- SY 03 (Cライン東半) 断ち割り断面 北から
- SK 06 完掘 北から
- SK 06 断面 北から

図版11 遺構

- 灰原 (C・Dライン) 断面 南東から
- 灰原 (Aライン北半) 断面 北東から
- 灰原 (Aライン南半) 断面 東から
- 灰原 (Bライン西半) 断面 南西から
- 灰原 (Bライン東半) 断面 南東から

図版 12 遺構

1. 灰原 (C ライン北半) 断面 北東から
2. 灰原 (C ライン南半) 断面 北東から
3. 灰原 (D ライン東半) 断面 南から
4. 灰原 4 遺物出土状況 南東から
5. 灰原 4 遺物出土状況 西から
6. 灰原 4 遺物出土状況 南東から
7. コンクリート基礎試掘断面 北東から

図版 13 遺物 S Y 01 前庭部、S K 01・02・05

図版 14 遺物 S K 05

図版 15 遺物 S K 05、S Y 02

図版 16 遺物 S K 04、S Y 03、S K 06、
灰原 1・2

図版 17 遺物 灰原 2~4

図版 18 遺物 灰原 4

図版 19 遺物 灰原 4・5、遺構外

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

川池西古窯は、愛知県大府市桃山町四丁目に所在し、川池を臨む丘陵に位置している。現在は住宅地になっているが、かつては大正から昭和初期にかけて3万本の桃の木が植えられ、春の開花時期になると名古屋・半田あたりからの花見客で賑わった。しかし桃畠は連作障害から生産が落ち、昭和9年に土地区画整理を実施し、昭和10年に分譲住宅の区画として売りに出された。その時の土地区画整理に伴う整地によって窯体の一部が削平されたと考えられる。その後、平成21年8月5日・13日に調査地の隣接地で範囲確認調査を実施し、山茶碗窯の灰原を確認している。

平成28年に、約1,000m²を対象に集合住宅建設が計画され、4月5日に埋蔵文化財の有無に関する照会文書が提出された。4月13日付で試掘の必要性があると回答をし、試掘（確認）調査の依頼書と試掘調査承諾書の提出があった。4月20日に試掘調査を実施し、長さ16m、幅0.6mのトレンチを設定して掘削した。その時点では遺構・遺物は確認されなかったが、南側の建設範囲は樹木撤去がされていなかったため、後は工事立会で対応することになった。平成28年10月19日、21日、22日に工事立会を実施し、22日に山茶碗窯の窯体と灰原を確認した。この結果を受け、平成28年11月10日に事業者と施工業者の大和ハウス工業株式会社と片岡事務所および市教委の四者で協議をした。集合住宅建設の計画変更是できないため、記録保存のために発掘調査を実施する旨を確認した。また、事業者・施工業者から早期の建設要望があり、県の「記録保存のための発掘調査における民間調査の導入について」に則り、事業者から委託を受けた民間調査会社が調査主体として文化財保護法92条に基づく調査体制となり、市教委は助言・指導する立場として携ることとなった。

平成28年11月25日から29日にかけて発掘範囲確認調査を実施し（図1、T1～T5）、集合住宅建設部分の333m²を調査対象とした。事業者はこの調査を株式会社二友組に委託し、翌年の1月10日付で文化財保護法93条の発掘届が提出された。1月19日付で事業者三輪頴子と株式会社二友組が発掘調査に関する委託契約を締結し、市が指導・助言する旨の協定書を三者で締結した。1月24日付で株式会社二友組が調査主体として文化財保護法第92条に基づく調査のための発掘届の提出があり、92条・93条の書類を県に進呈した。

本発掘調査は平成29年2月1日から4月21日まで実施した。出土遺物の整理と報告書執筆は、平成29年3月1日から11月31日で行い、平成29年12月25日に報告書が刊行された。

第2節 調査の経過

調査は、平成29年1月17日から測量、フェンス仮囲い等の準備作業を行い、2月13日から建設機械による階段解体、コンクリートガラの撤去を始め、15日から表土掘削を始めた。調査区外の排土置き場の確保が困難だったため、調査区を南北で2分割し、調査を進めることとした。調査区の北側を先行して行ったが、調査区北西端にコンクリート基礎が埋設されていることが確認された。この部分は、大府市教育委員会との協議の上、機械によるトレンチ掘削を行い、断面の記録作業のみで調査を終えた。21日か

ら人力による遺構検出を開始し、調査区北西端を除くほぼ全面に灰原が広がることが確認された。24日からグリッド軸に沿って5m間隔でセクションベルトを設定し、灰原の掘削を開始した。層位確認のため調査区西壁面際のトレント掘削を行なった際、被熱により赤化し硬化した層を確認した。調査区範囲外に広がるSY 01の焚口と判断した。この周辺には平坦面も確認でき、作業場と推定したSK 04、セクションベルト掘削時にはロクロピット（SP 01）が検出された。3月1日から発掘作業と並行して、遺物洗浄など一次整理作業を開始した。3月10日に遺構掘削が完了し、11日に全景撮影を行い、調査区の北側

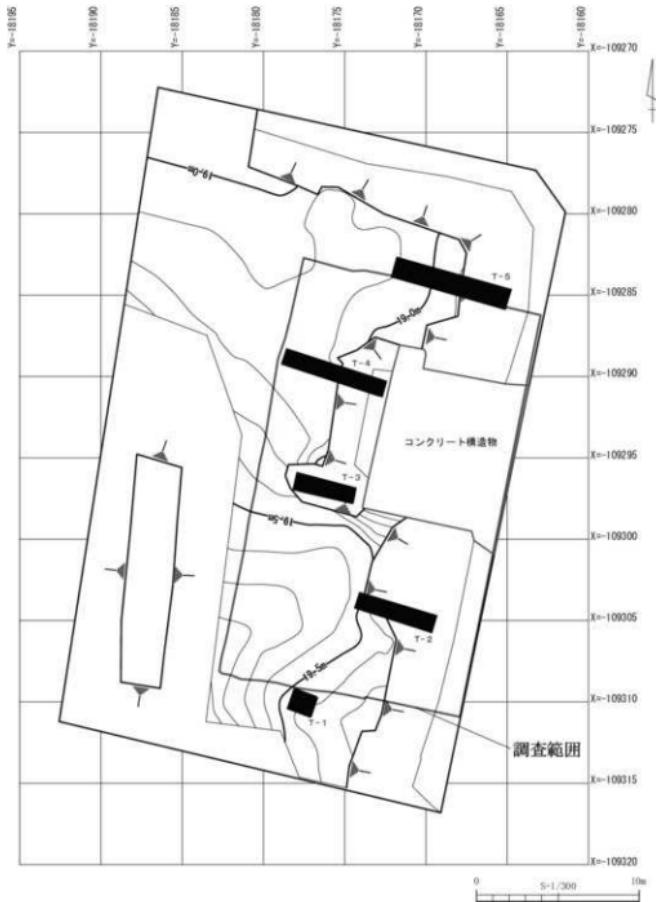


図1 調査前地形

の調査が完了した。10日、ロクロピットについて愛知学院大学の藤澤良祐氏に調査指導を依頼し、ロクロピットであり、猿投窓における貴重な発見例である、との回答を得た。

3月14日から調査区の南側の表土掘削を開始し、17日から遺構検出を行った。当初の設計では、中世山茶碗古窯1基、灰原1基の調査予定であったが、調査を進めていく過程で、中世山茶碗古窯が更に2基検出されたため、平成29年3月29日、大府市教育委員会は、三輪氏、二友組との間で、平成29年1月29日付の「協定書」の調査期間を平成29年4月30日に変更した。4月14日、ラジコンヘリによる空中写真撮影、21日、補足調査が完了し、現地調査が全て完了した。

整理作業は、発掘作業と並行して3月1日から4月28日まで遺物洗浄などの一次整理作業を行った。終了後、5月1日から6月23日まで遺物の分類、遺物実測など二次整理作業を進め、12月25日に『川池西古窯－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』としてまとめた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

今回の調査地である川池西古窯は、大府市役所から北東へ約0.7kmの大府市桃山町四丁目に所在する。旧国郡では、尾張国知多郡大符村に属する。

大府市は、知多半島北端の基部に位置し、北は名古屋市緑区・豊明市、西は東海市、南は知多郡東浦町、東を尾張と三河の境界とされる境川を挟んで刈谷市と隣接する。

市域の地形は、丘陵地と沖積低地から成る。知多半島北部は、尾張丘陵、大府丘陵、知多丘陵の三つの丘陵地に分けられ、そのうちの尾張丘陵南端と大府丘陵が大府市域に属する。市域では、ほぼ中央に鞍流瀬川が流れている。鞍流瀬川は境川水系の河川で、名古屋市緑区にある大池を源に南流し、石ヶ瀬川、境川の順で合流して、三河湾に流入する。これらの河川が丘陵地の境となり、東側を尾張丘陵、西側を大府丘陵と二分している。また、これら河川により、沖積低地が形成されている。本遺跡は、尾張丘陵の南端、南西側斜面に立地する。

本遺跡の立地する尾張丘陵は、新生代第三紀鮮新世以降



図2 遺跡の位置

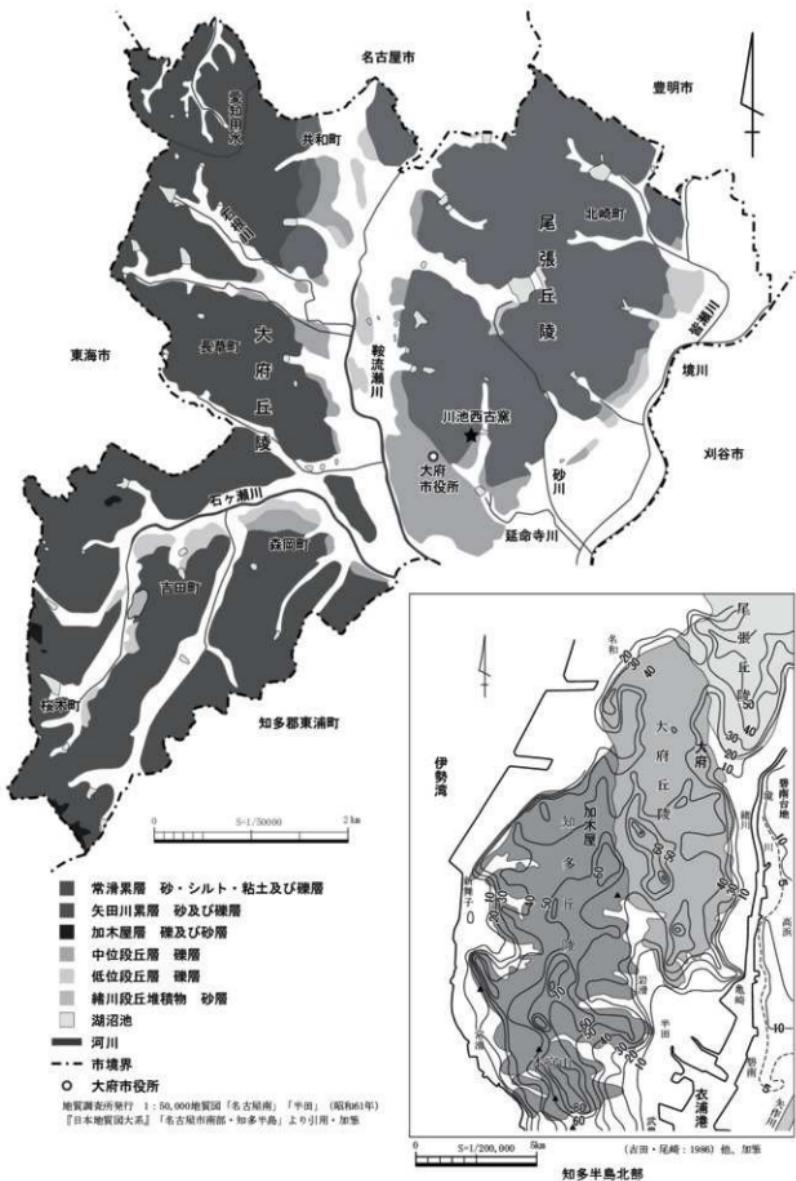


図3 大府市表層地質図

に形成された丘陵で、地質は瀬戸層群と呼ばれる。上部層の矢田川累系層（砂礫・砂・シルト主体）と、下部層の瀬戸陶土層（粘土主体）に分けられ、本遺跡は矢田川累系層に含まれる。

本遺跡周辺では、丘陵地より粘土の採掘が可能であることから、古代から中世の窯業生産地として利用されてきた。これを証明するように、市域では多くの窯跡が分布している。

第2節 歴史的環境

川池西古窯（75）を中心に周辺を概観すると、数多くの遺跡が分布している。それらの時期は、後期旧石器時代から近世までと幅広い。ここでは、周辺および主要な遺跡を説明する（表2）。

旧石器時代 共栄町に、後期旧石器時代とされる共栄遺跡（2）がある。本調査は行われていないが、採集遺物により石器の散布地であることが判明している。遺物は、ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代 縄文時代後半の石鐵が採集されている共栄遺跡や桟敷貝塚（6）がある。桟敷貝塚は、共栄遺跡と同様本調査は行われていないが、採集遺物より縄文晩期の遺跡であることが判明している。遺物は、条痕文を外面全体に横位に施した深鉢や無文の壺、石鐵・貝類が採集されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡には、子安神社遺跡（1）、惣作遺跡（5）がある。子安神社遺跡は、子安神社境内と周辺に広がる後期の遺跡である。主な出土遺物には、欠山式の高杯や台付甕、土師器・山茶碗等が出土している。惣作遺跡は、トレンチによる部分的な調査で、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・製塙土器・中世陶器等出土し、中でも製塙土器が最も多く出土している。これら2つの遺跡は、弥生から中世までの複合遺跡と考えられている。

古墳時代 本調査は行われていないが源吾遺跡（11）があり、遺物は建物建設の際に土師器高杯が採集されている。高山古墳（7）は古墳後期から奈良時代末とされている。中央町には、建物建設によって滅失してしまったが、雨兼池西古墳（79）がある。

平安時代 惣作遺跡は前述したとおり、弥生から中世の複合遺跡と認識されている。ただし、大府市教育委員会が行った第1・2次調査では、出土した遺物の大半は、9・10世紀の製塙土器が占めていることから、衣ヶ浦沿岸一帯で塙の生産が行われたことが明らかになった。

市域では、丘陵地と窯業の原料となる粘土が採掘できるという好条件から、窯が築造されるようになる。野々宮古窯（12）は、11世紀初頭頃に築窯されたと考えられている灰釉陶器窯で、碗・皿・段皿・壺などが出土している。灰釉陶器は、平安時代に猿投山西南麓の低丘陵地を中心として、尾張東部や三河西部で生産された施釉陶器である。猿投山西南麓に群在することから猿投山西南麓古窯址群、略して猿投窯とよばれている。野々宮古窯のほか、北崎大池北古窯（88）、高根山B・C古窯群（133・134）、西定保根B古窯群（141）、子安古窯（168）がある。現時点で確認された灰釉陶器窯は、宮内町に位置する野々宮古窯が市域中最南端に位置する。

12世紀に入ると、丘陵地一帯で多くの山茶碗の窯が築窯される。12世紀前半の窯には吉田第1・2号窯（20・21）があり、遺物は、碗・小皿・瓦が出土している。瓦は、三巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦・鬼瓦等が焼かれ、鳥羽離宮へ供給されていたことが明らかになっている。12世紀末から13世紀中頃に築窯された瀬戸B古窯跡群（101）からは、碗・皿・片口鉢・壺・壺系の取手や陶硯が出土している。同時期の窯には、山茶碗の碗・小皿・片口鉢が出土した瀬戸C古窯群（170）、碗・小碗・小皿・片口鉢・片口碗・壺・

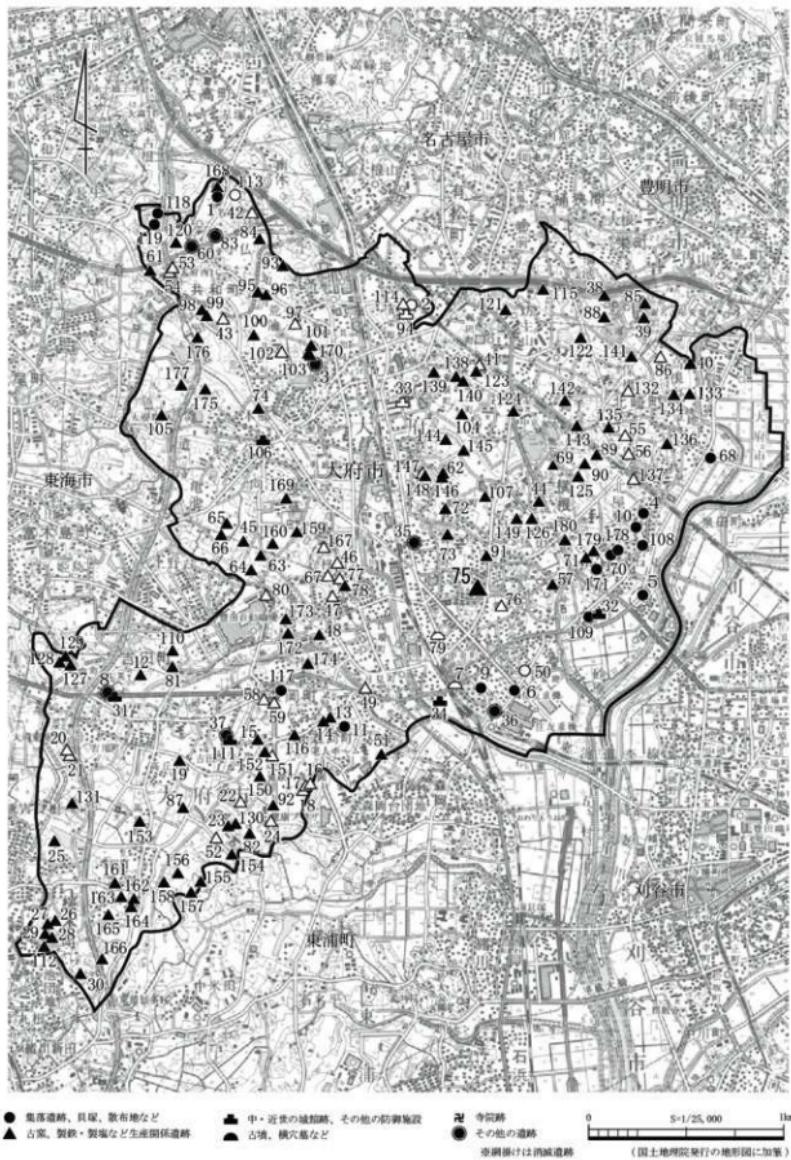


表2 周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	時代	主な出土遺物	遺跡番号	遺跡名	時代	主な出土遺物
1	子安神社遺跡	弥生～中世		1	ガシロ山A古窯群	中世	山系鏡・小豆
2	鬼塚遺跡	旧石器・商周		2	伊勢神社遺跡	中世	
3	東寺寺頭塚	江戸		3	上原古窯群	中世	山系鏡・小鏡
4	賀茂院貝塚	中世		4	丸形古窯	不明	
5	御所山遺跡	弥生～縄文		5	大瀬戸古窯	中世	
6	猿田貝塚	縄文～奈良		6	鬼鹿古窯	中世	山系鏡・小鏡・小豆
7	高須古墳	古墳時代		7	高須古窯	中世	山系鏡・小鏡
8	高須	古墳		8	木曾川古窯群	中世	山系鏡・小鏡
9	高須貝塚	古墳		9	高須古窯	中世	正方形・小鏡
10	石丸貝塚	中世		10	久分山古窯群	中世	山系鏡・小鏡・小豆・ 貝口鏡・月口鏡・土器
11	南河遺跡	古墳		11	鶴原山古窯群	中世	山系鏡・小鏡・小豆・ 貝口鏡・剪刀鏡
12	野々古窯	古代	灰陶器類	12	第六谷窯	中世	山系鏡・小豆
13	森田第1号古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦・ 月口鏡・小豆・鐵	13	森田第2号古窯	中世	山系鏡・小豆
14	森田第3号古窯	中世	月口鏡・小豆	14	北山古窯	中世	
15	北山古窯	中世		15	石原古窯	中世	
16	伊豆山浜病院附1号古窯	中世		16	赤堀古窯	不明	
17	伊豆山浜病院附2号古窯	中世		17	杉原B古窯	中世	
18	伊豆山浜病院附3号古窯	中世		18	伊豆山浜病院附4号古窯	中世	
19	伊豆山浜古窯	中世		19	伊豆山浜古窯	中世	
20	吉田第1号古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦・ 貝口鏡・瓦	20	吉田第2号古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦
21	吉田第3号古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡・瓦	21	吉田第4号古窯	中世	山系鏡・小鏡
22	神明古窯	中世	山系鏡・小鏡	22	神明古窯	中世	
23	神明第1号古窯	中世		23	神明第2号古窯	不明	
24	國領第2号古窯	不明		24	國領第3号古窯	不明	
25	大井古窯	不明		25	大井古窯	不明	
26	大井第1号古窯	不明		26	大井第2号古窯	不明	
27	外輪山古窯	不明		27	外輪山古窯	不明	
28	外輪山第3号古窯	不明		28	外輪山第4号古窯	不明	
29	外輪山第5号古窯	不明		29	外輪山第6号古窯	不明	
30	青木末古窯	中世		30	青木末古窯	中世	
31	吉方城跡	中世		31	吉方城跡	中世	
32	種崎城跡	中世		32	種崎城跡	中世	
33	種崎城跡	中世		33	種崎城跡	中世	
34	石井川古戰跡	中世		34	石井川古戰跡	中世	
35	大瀬戸舟戸跡	中世		35	大瀬戸舟戸跡	中世	
36	糸井川舟戸跡	中世		36	糸井川舟戸跡	中世	
37	西ノ郷戸跡	中世		37	西ノ郷戸跡	中世	
38	船越古窯	中世		38	船越古窯	中世	
39	大井古窯	中世		39	大井古窯	中世	
40	大井第1号古窯	中世		40	大井第2号古窯	中世	
41	横山古窯	中世		41	横山古窯	中世	
42	横山古窯群	中世	山系鏡・小鏡・小豆	42	横山古窯群	中世	山系鏡・小鏡
43	横山古窯	中世	山系鏡・小鏡	43	横山古窯	中世	山系鏡・小鏡
44	名張山古窯群	中世	山系鏡・小鏡	44	名張山古窯群	中世	山系鏡・小鏡
45	立石A古窯群	中世	山系鏡・小鏡	45	立石A古窯群	中世	山系鏡・小鏡
46	深澤圓岡A古窯群	中世	山系鏡・小鏡・小豆	46	深澤圓岡A古窯群	中世	山系鏡・小鏡・小豆
47	神明A古窯群	中世	山系鏡・小鏡・小豆	47	神明A古窯群	中世	山系鏡・小鏡・小豆
48	神明B古窯	中世	山系鏡・小鏡	48	神明B古窯	中世	山系鏡・小鏡
49	神明C古窯	中世	山系鏡・小鏡	49	神明C古窯	中世	山系鏡・小鏡
50	通天橋貝塚	不明		50	通天橋貝塚	不明	
51	利根A古窯群	中世		51	利根A古窯群	中世	
52	東寺古窯	中世		52	東寺古窯	中世	
53	利根B古窯	中世		53	利根B古窯	中世	
54	利根C古窯	中世		54	利根C古窯	中世	
55	利根D古窯	中世		55	利根D古窯	中世	
56	立石F古窯	中世		56	立石F古窯	中世	
57	利根圓岡古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡・瓦	57	利根圓岡古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡・瓦
58	神明古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡・瓦	58	神明古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡・瓦
59	海老塚古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡・瓦	59	海老塚古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡・瓦
60	海老塚古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦	60	海老塚古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦
61	上人古窯	中世	山系鏡・小鏡	61	上人古窯	中世	山系鏡・小鏡
62	長野山A古窯群	中世	山系鏡・小鏡	62	長野山A古窯群	中世	山系鏡・小鏡
63	豊多田B古窯群	中世	山系鏡・小鏡	63	豊多田B古窯群	中世	山系鏡・小鏡
64	豊多田C古窯群	中世	山系鏡・小鏡	64	豊多田C古窯群	中世	山系鏡・小鏡
65	豊多田D古窯群	中世	山系鏡・小鏡	65	豊多田D古窯群	中世	山系鏡・小鏡
66	立石E古窯	中世		66	立石E古窯	中世	
67	立石F古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦	67	立石F古窯群	中世	山系鏡・小鏡・瓦
68	立石G古窯群	中世	山系鏡・小鏡	68	立石G古窯群	中世	山系鏡・小鏡
69	立石H古窯	中世	山系鏡・小鏡	69	立石H古窯	中世	山系鏡・小鏡
70	勝沼銅酒瓶	中世		70	勝沼銅酒瓶	中世	
71	平井古窯	中世		71	平井古窯	中世	
72	鶴原山古窯群	中世		72	鶴原山古窯群	中世	
73	鶴原山古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡	73	鶴原山古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡
74	下北山古窯群	中世	山系鏡・小鏡	74	下北山古窯群	中世	山系鏡・小鏡
75	田浦古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡	75	田浦古窯	中世	山系鏡・小鏡・瓦・貝口鏡
76	鳥居古窯	不明		76	鳥居古窯	不明	
77	鶴原B古窯	不明		77	鶴原B古窯	不明	
78	鶴原C古窯	中世		78	鶴原C古窯	中世	
79	鶴原池西古窯	古墳		79	鶴原池西古窯	古墳	
80	鶴原山古窯群	中世	山系鏡・小鏡	80	鶴原山古窯群	中世	山系鏡・小鏡
81	鶴原山古窯	中世	瓦	81	鶴原山古窯	中世	瓦
82	鶴原山第3号古窯	中世		82	鶴原山第3号古窯	中世	
83	門脇山古窯	江戸期		83	門脇山古窯	江戸期	
84	大瀬戸古窯	中世		84	大瀬戸古窯	中世	
85	みどり公園古窯	中世		85	みどり公園古窯	中世	
86	高須山西古窯	中世		86	高須山西古窯	中世	
87	仁科郡西古窯	中世		87	仁科郡西古窯	中世	
88	仁科郡北古窯	古代～中世	山系鏡・小鏡・(灰釉陶器を含む)	88	仁科郡北古窯	古代～中世	山系鏡・小鏡
89	茅ヶ崎古窯	中世		89	茅ヶ崎古窯	中世	
90	茅ヶ崎B古窯	中世		90	茅ヶ崎B古窯	中世	

子持ち器台、土師質土器の伊勢型鍋が出土している久分古窯群（100）がある。森岡第1号窯群（13）は、市域南の丘陵地に立地する12世紀中頃の山茶碗窯である。遺物の大半が碗・皿で占められ、希少ではあるが広口壺・三筋壺・片口鉢が出土し、中には碗の内面底部や広口壺肩部に、工具による線刻が施されたものも出土している。12世紀中から13世紀前半の窯には、別唄古窯群（42）、深廻間B古窯群（67）等がある。遺物は、碗・小皿が出土し、「天」・「×」とヘラ記号が施されたものも含まれていた。12世紀後半から13世紀初頭では、砂原古窯（97）、立合池西A・B古窯跡群（147・148）等がある。12世紀末から13世紀初頭には、鶴池東古窯（73）、ガンジA古窯群（91）、神明古窯群（58）がある。羽根山古窯群（57）は、12世紀後半から13世紀半ばの窯で、窯体5基、溝1条、ピット、灰原が確認されている。12世紀後半から13世紀前半では、今回調査をした川池西古窯と深廻間C古窯群（167）があり、碗・小皿・片口鉢が出土している。13世紀初頭には、ハンヤ古窯（19）、13世紀半ばには、海陸庵古窯群（59）や律粉東古窯（92）、13世紀の窯は立根A古窯群（45）がある。窯跡以外の遺跡は、散布地だが中村遺跡（171）、名高遺跡（178）がある。

室町時代から戦国時代 15世紀に入ると山茶碗窯は廃絶し、11世紀から14世紀にかけて続いた窯業生産は途絶えてしまう。現地点では、市域における14世紀以降の窯業遺跡は確認されていない。

その他の遺跡には、13世紀末に築城され15世紀末に廃城となった吉川城址（31）、16世紀中頃に築城されたと考えられる追分城址（33）、横根城跡（32）がある。また多くのシジミが出土した、戦国時代末期の遺跡とされる賢聖院貝塚（4）がある。

近世以降 円通寺経塚（83）や江戸中期とされる東光寺経塚（3）がある。東光寺経塚では、法華経を書いた一字一石経が約38,000個と瀬戸美濃陶器が出土している。その他、江戸後期とされる円通寺古墓（60）がある。

参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2010 「愛知の大地」『愛知県史』別編 自然 愛知県
- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史』別編 窯業 3 中世・近世 常滑系 愛知県
- 池本正明ほか 2013 『別唄古窯群』愛知県埋蔵文化センター調査報告書第187集
- 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化センター
- 猪木幸男 1991 『日本地質図大系 中部地方』朝倉書店
- 大杉規之ほか 2015 『鶴池東古窯－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
ナカシャクリエイティブ株式会社
- 大府市誌編さん刊行委員会 1988 『大府市誌 資料編自然』大府市
- 大府市誌編さん刊行委員会 1991 『大府市誌 資料編考古』大府市
- 大府市 1996 『海陸庵古窯址群・神明古窯址群 大府半月地区土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大府市文化財調査報告書第2集 大府市教育委員会
- 大府市 1997 『円通寺経塚 第二東海自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財立会調査報告』
大府市文化財調査報告書第3集 大府市教育委員会

- 大府市 2000 『ガンジ山A古窯跡群 大府市桃山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第4集 大府市教育委員会
- 大府市 2005 『深廻間A古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第5集 大府市教育委員会
- 大府市 2006 『深廻間B古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第7集 大府市教育委員会
- 大府市 2007 『砂原古窯跡 大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財発掘調査報告書第8集 大府市教育委員会
- 大府市 2008 『深廻間C古窯跡群 大府深廻間特定土地区画整理埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第9集 大府市教育委員会
- 大府市 2009 『瀬戸B古窯跡群・奥谷古窯跡 大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』
大府市文化財調査報告書第10集 大府市教育委員会
- 大府市 2010 『羽根山古窯跡群 大府羽根山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第6集 大府市教育委員会
- 大府市 2011 『立会池西A古窯跡群・立会池B古窯跡群 大府共和西土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第13集 大府市教育委員会
- 大府市 2014 『瀬戸C古窯跡・久分古窯跡 大府市共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大府市文化財調査報告書第11集 大府市教育委員会
- 加藤岩藏 1972 『惣作遺跡』 大府市教育委員会
- 加藤岩藏ほか 1975 『野々宮古窯発掘報告書』 大府市教育委員会
- 加藤岩藏ほか 1984 『子安神社遺跡発掘調査報告書』 大府市教育委員会
- 柴垣勇夫 1969 『吉田第一号窯発掘調査報告書』 大府市教育委員会
- 柴垣勇夫 1975 『吉田第二号窯発掘調査報告書』 大府市教育委員会
- 庄子士郎編 1978 『愛知県 地学のガイド』 コロナ社
- 下中邦彦 1981 『愛知県の地名』 平凡社
- 中野良法ほか 1999 『森岡第1号窯跡群』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第85集
財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 日本福祉大学知多半島総合研究所 1995 『知多半島の歴史と現在No.6』 校倉書房

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

今回の調査は、大府市発掘調査業務委託共通仕様書、および大府市教育委員会との事前打ち合わせに基づき、下記の方法で行った。

グリッド 國土座標第VII系に基づき、調査区北東のX=109,270・Y=18,160を座標軸の基点とし、南北をX軸、東西をY軸として各軸の5m毎にラインを引いた。X軸には北からアラビア数字1から10、Y軸には西からアルファベットAからGを振り、北西交点名をこれらのラインによってできた5×5mグリッドの名前とした。

調査区 集合住宅建設工事に伴う発掘調査であり、390 m²の建物建設範囲から既設のコンクリート擁壁57 m²を抜き、333 m²の「コ」の字型の発掘調査範囲とした。

掘削 包含層の直上まで表土掘削として、重機で掘削を行った。遺構検出・造構仕上げ掘削は人力で行った。また、灰原掘削時には、グリッドラインに沿ってセクションベルトを設定し、土層断面を確認しながら掘削を進めた。

遺物取り上げ 遺構・層位・グリッド・日付等を単位に取り上げた。重要遺物は、1点を単位に出土地点の座標値と標高を測量して取り上げた。

(dot 遺物)。一括取り上げ遺物は0001から始まる4桁の連番、dot 遺物を1001から始まる4桁の連番で表記した。

遺構名 着手順に「SY 01」や「SK 01」のように01から始まる遺構種別ごとの連番を付けた。本書で使用した遺構記号は以下のとおり。

SY：窓体、SK：土坑、SP：柱穴（柱痕跡や抜取り痕跡等、柱を立てるための穴と推定できるもの。ロクロビットは検出時柱穴と見分けが困難なため、便宜上SPを使用した。）

測量 遺構の図化にはトータルステーションを用いた。土層断面と遺物出土状況は、デジタルカメラとトータルステーションを用いオルソ画像を作成し、これを基に図化を行った。

写真 遺構写真と遺物写真是、杉山・湯川が撮影した。遺構写真是、報告書に使用す

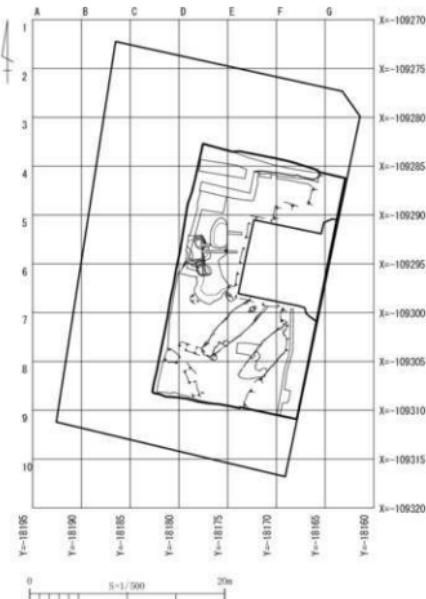


図5 地区割り

るカットはプロニー版、報告書に使用しないカットは35mm サイズのフィルムカメラを用いて撮影した。どちらもカラーリバーサル、モノクロフィルムで撮影を行った。補助として、2230万画素の35mmフルササイズデジタルカメラも使用している。遺物写真も同じデジタルカメラを用いて撮影した。

注記 洗浄後の遺物への注記は、一部にジェットマーカーを用い、重要な遺物やジェットマーカーを使いにくい遺物は、面相筆を用いた。注記内容は、「KWIN' 16 取り上げ番号 遺構名」とした。

トレース 遺物実測図は、デジタルトレースを行ってから編集した。

土層注記 土層の土粒子および土器の胎土粒子については、Wentworth法の粒径区分を用いた。色調と含有物については、『新版標準土色帖』に準拠した。

遺物の抽出 基本的に遺構の機能あるいは、廃絶時期を表す遺物を抽出し掲載している。ただし、遺構が機能していた時期を表さない遺物を掲載する場合がある。

収納 報告書掲載遺物は掲載順に、dot 遺物は dot 番号順、非掲載遺物は取上げ番号順に並べ、ビニール袋にラベルを入れ、コンテナに収納している。

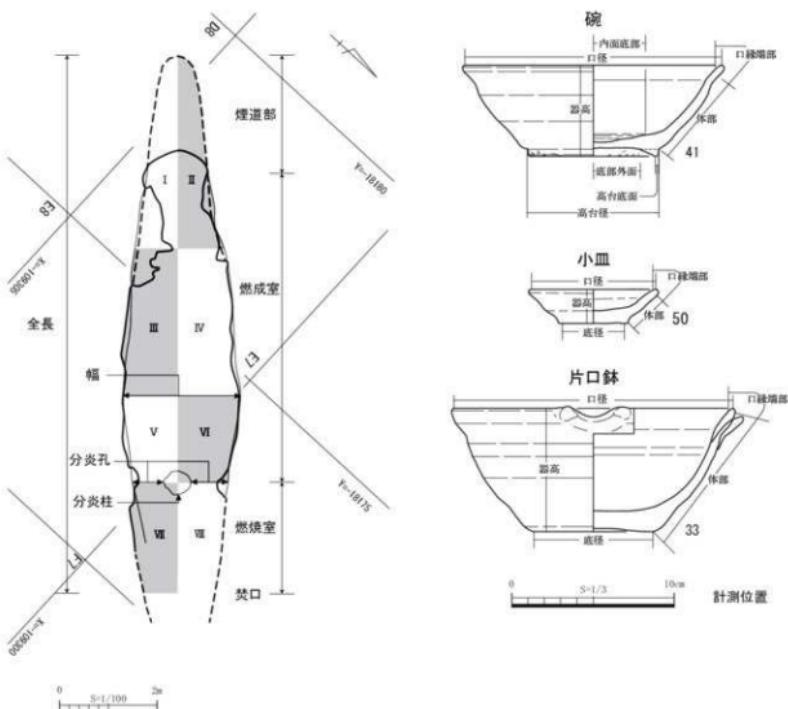


図 6 部位名称・窯体内グリッド・計測位置

第2節 基本層序 図7～8、図版1

地理的環境でも述べたとおり、本遺跡は丘陵部の斜面地に立地する。このため、造成を行い宅地化などの土地利用される場合が多く、本遺跡周辺も、近代以降の造成により、旧地形の多くが改変を受けている。今回の調査区内も同様に、近代以降の改変が激しい。ただし、その改変を受けながらも、近代以前の層位を複数確認することができた。これらは、粒径や堆積原因が異なり、調査を進める上で重要な手掛かりとなっている。これらの中から広く堆積するものを以下のように大別し、基本層序とした。

表土・盛土層（図8 A-A' 1層、B-B' 2層、C-C' 1層） 現代の盛土層及び表土層である。調査区全域で確認した。斜面地であるため山側を削り、谷側を埋めて平坦部を造成したため、山側に薄く、谷側に厚く堆積している。下面は、流入土・灰原・基盤層と接していた。融着資料を含む山茶碗・焼台・炭化物・焼土・窯体と、近代以降の遺物を含む。

流入土層（図8 A-A' 2～6層、B-B' 3～7層） 窯操業後の自然堆積である。北半部、SY 01前庭部付近にのみ堆積していた。上面は表土・盛土層に接し、下面是灰原と基盤層に接していた。堆積物は基盤層由来であり、周辺で確認した基盤層とは層位が上下逆転している。また、層位の境界は級化構造を呈しており、自然堆積の特徴を示す。灰原とは間層を挟まず、灰原が土壤化した状況も確認できなかったことから、窯操業終了直後の堆積と判断した。以上から、燃料材の伐採により、保水力の失われた上位の山肌から流入したものと推定した。

灰原・築窯排土層（図8 A-A' 7～9層） 窯操業時の堆積である。SY 01焚口より斜面下側にのみ堆積していた。上面は流入土と表土・盛土層に接し、下面是基盤層と接している。SY 02・03に関連するこれらの層位は、後世の改変により今回の調査範囲内では確認できなかった。

築窯排土層は、焚口より斜面下部に堆積している（図9）。基盤層由来のブロック土（図13 2層）で構成され、その上面は前庭部とした平坦面であることから、築窯排土と判断した。遺物は出土していない。

灰原は、前庭部より斜面下部に堆積している。融着資料を含む山茶碗・焼台・炭化物・焼土・窯壁を多く含む。炭化物と山茶碗の含有量を目安に5層に大別した（第3章第3節3項）。

基盤層（図8 A-A' 13・14層、B-B' 22～24層、C-C' 2・3層） 基盤となる地山は、河口部付近の河川堆積である。上から砂礫・粘土・砂の順で堆積し、層理は北東に低く傾斜している。砂層にはラミナが認められた。

SY 02・03はいずれも、床面の大部分が砂層、壁と天井が粘土層を掘削して構築されている。窯の構造上、堅牢さを求められる壁と天井は粘土層・保温と再掘削のしやすさが求められる床面は砂層となっているのは、偶然ではないだろう。特に砂層において、壁と天井を構築することは困難であることから、当時の窯工人は、窯としての機能を考慮し、基盤層を見極めた上で構築地点を選定した可能性が高い。

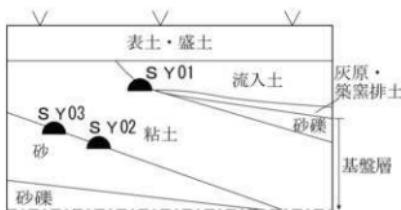
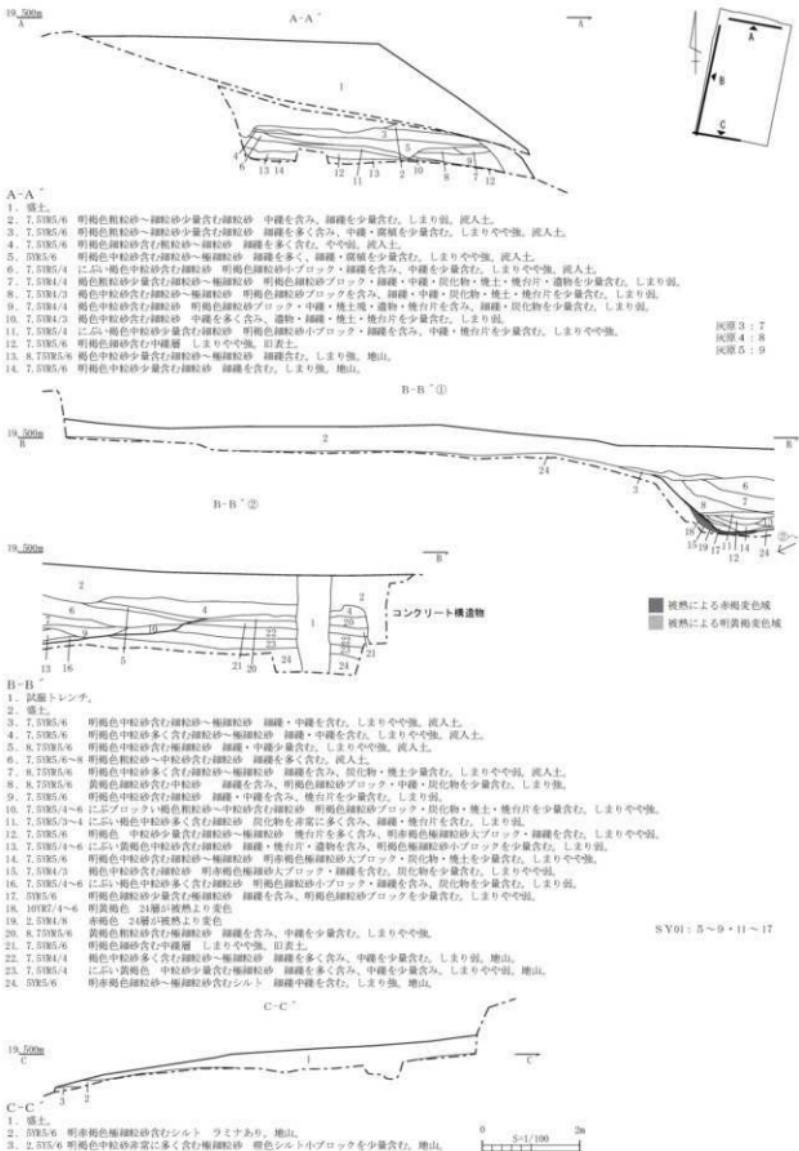


図7 基本土層模式図



第3節 遺構と出土遺物

1. 概要

川池西古窯は、丘陵地の南側斜面の標高約18.5mに立地する。窯体の構造は、地山をトンネル状に掘りぬいて構築された、分炎柱を有する地下式の窯窯である。

今回の調査で、窯体3基（SY01前庭部・SY02・03）、ロクロピット（SP01）、土坑6（SK01～06）、SY01の灰原を検出した。窯体については、いずれも後世の擾乱や調査範囲の制約上、部分的な検出にとどまるなど窯全体を調査したわけではない。

遺物は、碗・小皿、極少量の片口鉢、細片ではあるが常滑陶器が出土した。

2. 遺構

SY01 図11・12 卷頭図版2、3-1～3 図版3-1～3、13

D5グリッドに位置する。調査区西壁際にトレーナーを掘削した際、明黄褐色・赤褐色に変色し、硬化した地山を確認した（B-B'14・15層）。この地山の変色と硬化は被熱による現象であり、また、斜面下側に隣接して前庭部となる平坦面を確認したことから焚口と判断した。焚口の北東側には、方形状の掘り込みがあり、その形状から焚口へ繋がる階段状の通路と想定した。焚口と相対しているであろう、北西から南東方向の一辺を基準とし、これに対して直交方向を窯体の想定中心軸とした。想定主軸方位は、N-38°-Eである。窯体の大部分が調査区外のため、規模・様相は不明である。

前庭部 前庭部は、焚口からより標高の高い部分を掘削して構築されている。平面は不定形で、範囲は東西2.5m、南北4.56mを測る。検出面からの深さは0.17mで、底面標高は平均17.5mを測る。傾斜角は東に7°と緩やかに下がる。前庭部の南端は広くなっている、この部分をSK05とした（後述）。また、焚口の下方には、前述した階段状の通路と想定した落ち込みがある。北西側は調査区外のため不明である。焚口の北東側ではSK01、南東側ではSK02・03を検出した。前庭部の平坦面において焼台の広がりを検出した（断面A-A'2層、B-B'7～9層、C-C'2層、D-D'2層）。焼台の大半は破片で、完形は極少量出土したのみである。埋土中の最下層（断面D-D'8・9層）は、遺物・炭化物・焼土を含まない地山ブロック土で構成されている。この層位は、その特徴と焚口直下に位置することから、窯窯排土と判断した。前庭部の一部は、窯窯排土を利用して平坦な面を形成した可能性が高い。また、B-B'7層・D-D'6層では、炭化物を非常に多く含んだ堆積を確認した。A-A'・D-D'2層、B-B'7～9層、C-C'2層の焼台集積層と、B-B'7層・D-D'6層の炭化物を非常に多く含む層との間に堆積しているB-B'10・11層、C-C'3層、D-D'3～5層は、明赤褐色・明赤褐色細粒砂主体で遺物を含まない地山再堆積層である。この堆積はその特徴と炭化物層に挟まれることから、窯の改築・修理に起因し排出された排土である可能性がある。したがって、この層を挟み、少なくとも最低2回の操業が想定できる。

遺物は、碗（1～3）、小皿（4・5）、焼台（6）が出土した。焼台には、焼成時に高台が癒着しないよう糊袋が敷かれた痕跡が明瞭に残っていた。

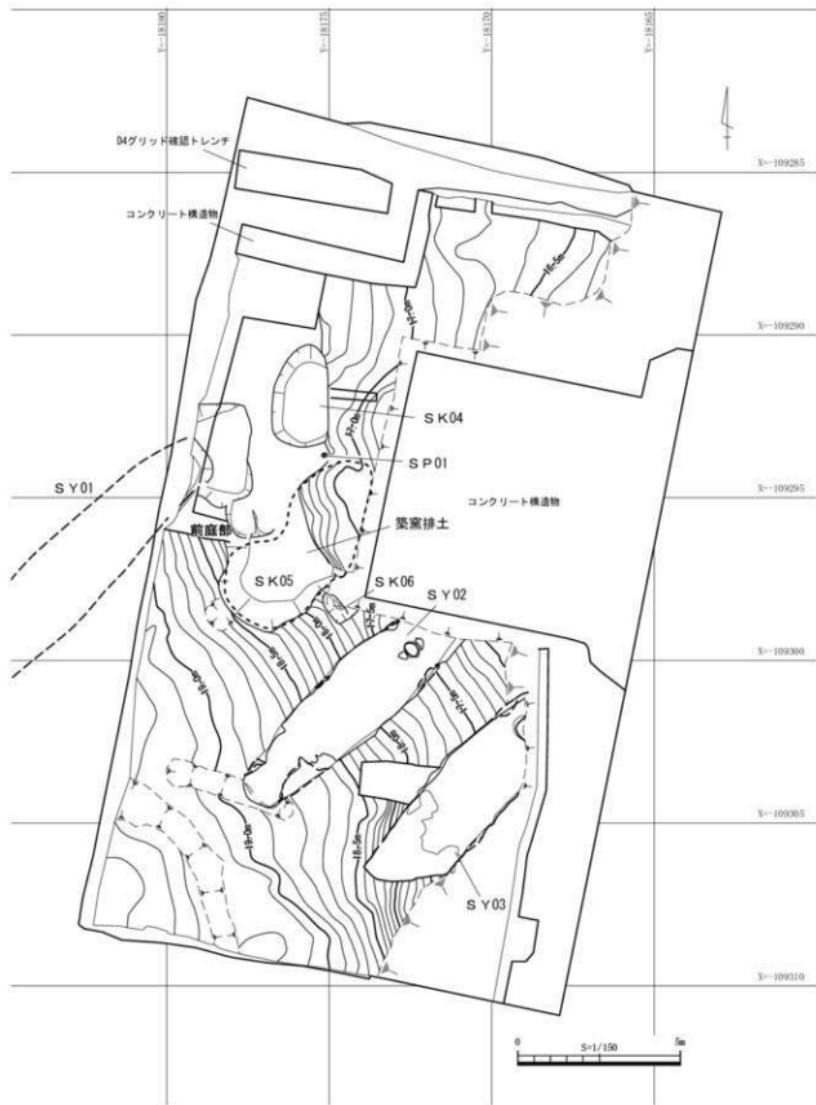


図 9 初回採集

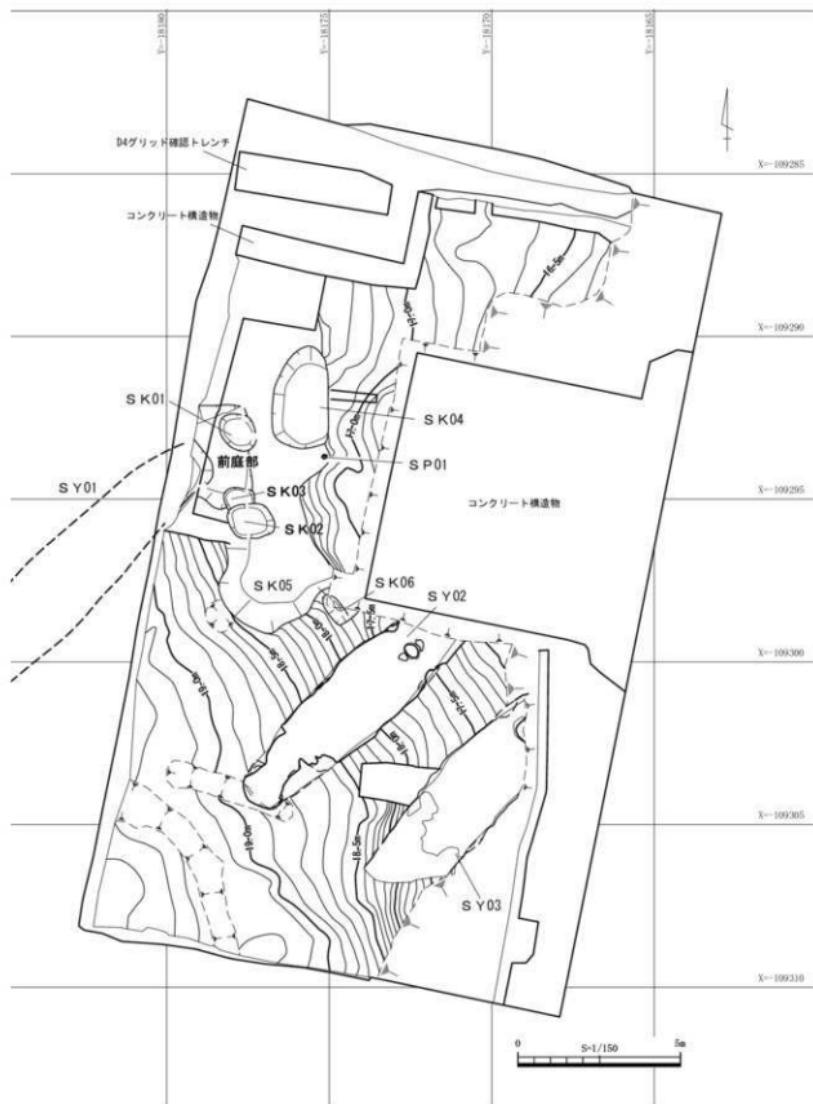


図 10 最終採業

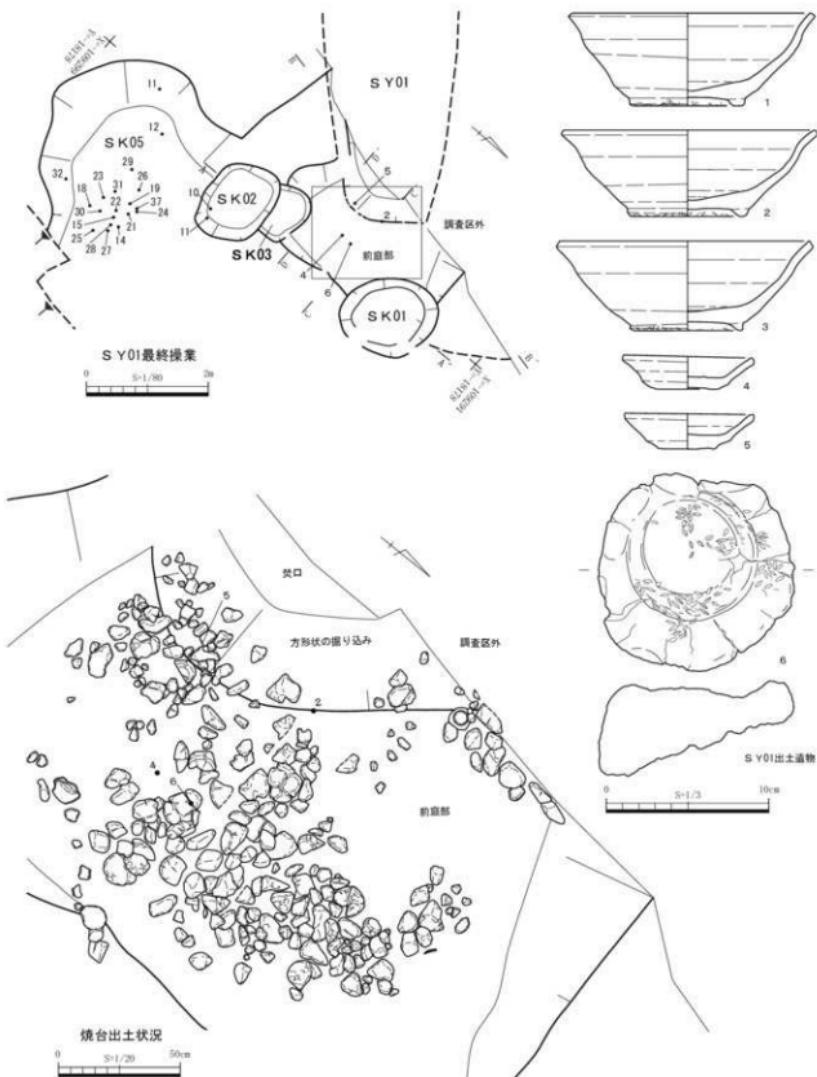
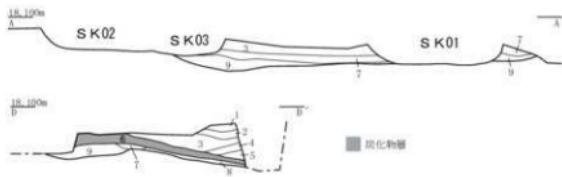


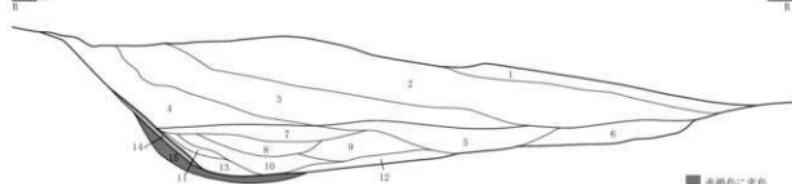
図 11 SY 01 焚口・前庭部 (1)



SY01 A・D

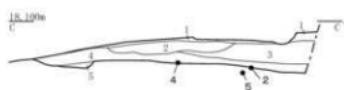
1. 黄褐色中粒砂多く含む細粒砂 細縫・炭化物を含み、明褐色細粒砂・堆土を少量含む。しまりやや強。
2. T. SY05.6～8 明褐色細粒砂～極細粒砂含む中粒砂 細縫を多く、にじみ褐色細粒砂小ブロック・細縫・炭化物を含み、堆土・遺物を少量含む。しまりやや強。
3. SY05.6～8 明赤褐色細粒砂少々含む中粒砂 細縫・堆土を含み、明褐色細粒砂小ブロック・中縫・細縫・炭化物を含む。やや弱。
4. T. SY05.6～8 明褐色中粒砂含む細粒砂 細縫を含む。明褐色細粒砂小ブロック・中縫・細縫・炭化物を含む。やや弱。
5. T. SY05.6～8 明褐色細粒砂少々含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロック・中縫・細縫・炭化物を含む。しまりやや強。
6. T. SY05.6～8 明褐色細粒砂少々含む細粒砂 細縫を含む。明褐色細粒砂小ブロック・中縫・細縫・炭化物を含む。しまりやや強。
7. SY05.6 黄褐色中粒砂多く含む細粒砂 細縫を含み、明褐色細粒砂小ブロック・中縫・細縫・炭化物を含む。しまりやや強。
8. T. SY05.6 明褐色細粒砂～中粒砂含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロック・細縫・中縫を少量含む。しまりやや強。
9. T. SY05.5～6 明褐色細粒砂～中粒砂含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロック・細縫・中縫を少量含む。しまりやや強。

19.50m



SY01 B

1. 8. 7SY05.5/6 明褐色中粒砂含む細粒砂 細縫・中縫を少量含む。しまりやや強。灰土。
2. T. SY05.6～8 明褐色粗粒砂～中粒砂含む細粒砂 細縫を多く含む。灰土。
3. 8. 7SY05.6 明褐色中粒砂多く含む細粒砂 細縫を含み、炭化物・堆土を少量含む。しまりやや強。
4. 8. 7SY05.6 黄褐色細粒砂含む中粒砂 細縫を含み、明褐色細粒砂ブロック・中縫・炭化物を含む。しまり強。
5. T. SY05.5/6 明褐色中粒砂含む細粒砂 細縫・中縫を含み、堆土を含む。堆土片を少量含む。しまり弱。
6. T. SY05.5/6～4 にじみ褐色細粒砂～中粒砂含む細粒砂 細縫を含み、堆土を含む。明褐色細粒砂ブロック・中縫を含む。しまり弱。
7. T. SY05.5/6～4 にじみ褐色細粒砂～中粒砂含む細粒砂 細縫を含む。明褐色細粒砂ブロック・中縫を含む。堆土を含む。明褐色細粒砂ブロック・中縫を含む。しまり弱。
8. T. SY05.6 明褐色中粒砂多く含む細粒砂 細縫・堆土・遺物を含み、明褐色細粒砂小ブロック・細縫を含む。しまりやや強。
9. T. SY05.6～6 にじみ黄褐色中粒砂含む細粒砂 細縫を含み、明褐色細粒砂小ブロックを少量含む。しまりやや強。
10. T. SY05.6 明褐色中粒砂含む細粒砂～極細粒砂 明褐色細粒砂小ブロック・堆土・堆土を含む。しまりやや強。
11. T. SY05.6～3 岩中粒砂含む細粒砂 細縫を含み、明褐色細粒砂小ブロック・細縫を含む。灰土物を少量含む。しまりやや強。
12. T. SY05.6～6 にじみ褐色細粒砂多く含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロック・細縫を含む。灰土物を少量含む。しまりやや強。
13. SY05.6 明褐色細粒砂少々含む細粒砂 細縫を含み、明褐色細粒砂小ブロックを少量含む。しまりやや強。
14. 10YR7.4/6 明黄褐色（地山が被熱により黄色）
15. 2.5YR4/8 赤褐色（地山が被熱により変色）



SY01 C

1. T. SY05/6 明褐色中粒砂含む細粒砂 細縫・中縫を含み、堆土片を少量含む。しまり弱。
2. T. SY05/6 明褐色細粒砂～極細粒砂含む中粒砂 堆土片を多く、にじみ褐色細粒砂小ブロック・細縫・炭化物を含み、堆土・遺物を少量含む。しまりやや強。
3. SY05.6～8 明赤褐色細粒砂少々含む中粒砂 細縫・堆土を含み、明褐色細粒砂小ブロック・中縫・細縫・炭化物・堆土片を少量含む。やや弱。
4. T. SY05.6～8 黑褐色中粒砂含む細粒砂 遺物を多く、黒褐色細粒砂小ブロック・中縫・細縫・炭化物を含む。しまり弱。
5. 10YR4/3 にじみ黄褐色中粒砂非常に多く含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロック・細縫・中縫・炭化物を少量含む。しまりやや強。

図 12 SY01 焚口・前庭部 (2)

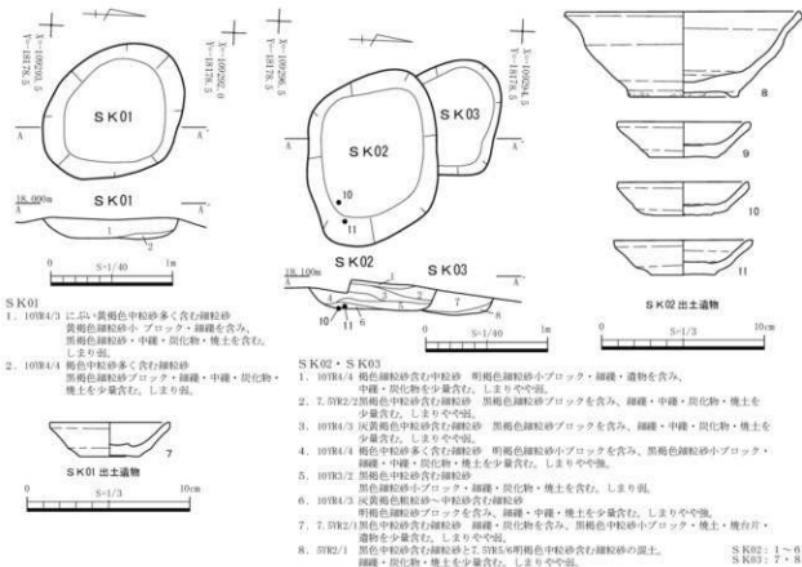


図 13 SK 01・02・03

SK 01 図 12 卷頭図版 3-4 図版 3-4・5、13

D 5 グリッドに位置する。平面は橢円形で、長径 1.29 m、短径 1.05 m を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.17 m を測る。

本土坑は、S Y 01 焼口の北東側で検出した。埋土は、1・2 層とも細粒砂主体で、炭化物・焼土・黒褐色細粒砂ブロックを含むことから、人為的な堆積と判断した。本土坑は、S Y 01 前庭部で窓の改築・修理に伴う排土と推定した層を切ることから、少なくとも 2 回目以降の操業時に掘削されたと推定した。

遺物は、碗・小皿（7）が出土した。

SK 02 図 12 卷頭図版 3-4 図版 3-4・5、13

D 6 グリッドに位置する。S K 03 を切る。平面は橢円形で、長径 1.51 m、短径 1.13 m を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.24 m を測る。

本土坑は、S Y 01 焼口の南東側で検出した。埋土は、ブロック土・焼土・炭化物を含むことから人為的な堆積と考える（3～8 層）。特に 3 層、8 層には、遺物が多く含まれていた。本土坑は、S Y 01 前庭部で窓の改築・修理に伴う排土と推定した層を切ることから、少なくとも 2 回目以降の操業時に掘削されたと推定した。

遺物は、碗（8）・小皿（9～11）が出土した。

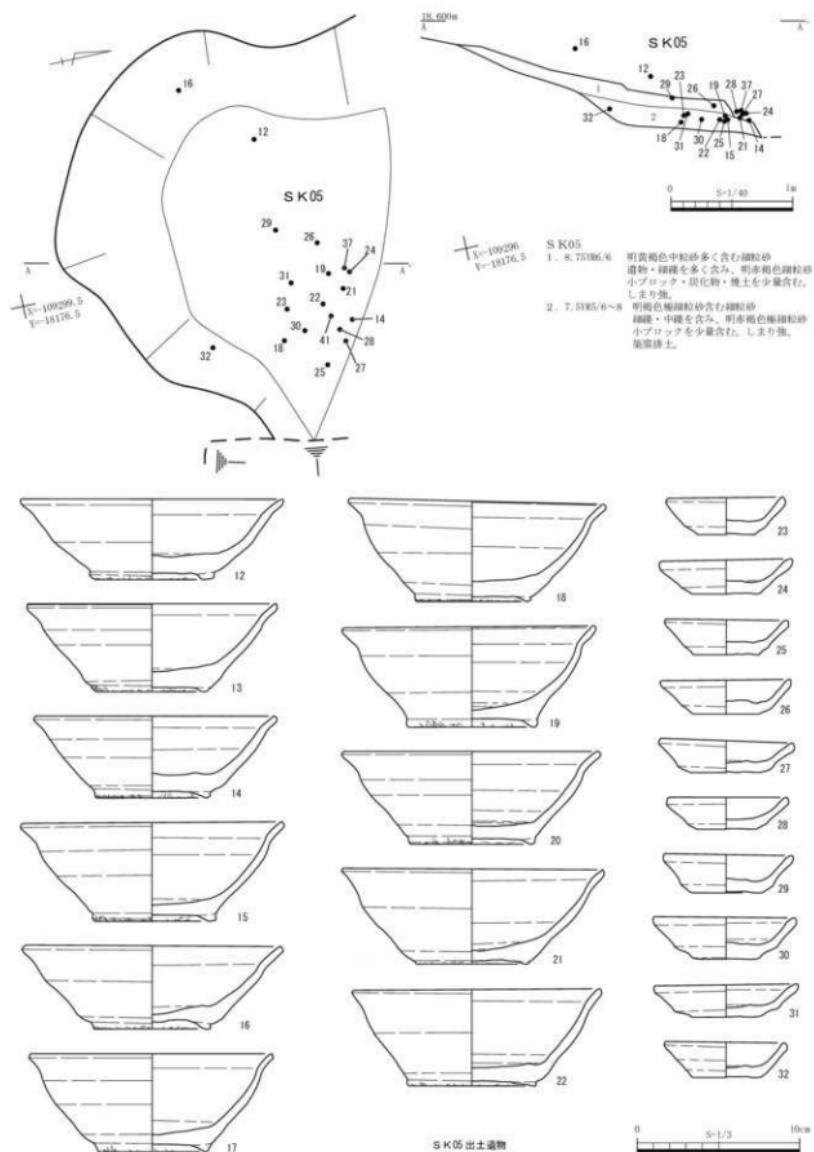


図 14 SK 05 (1)

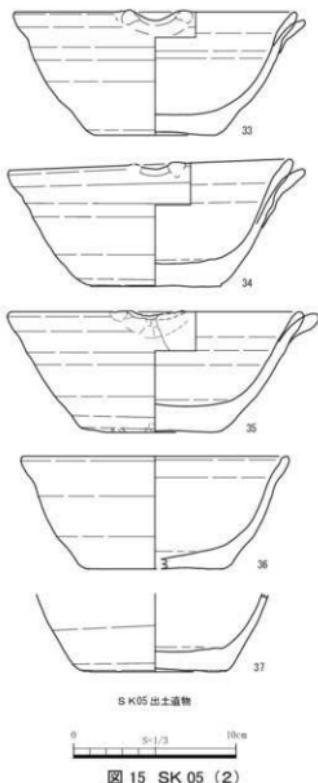


図 15 SK 05 (2)

SK 03 図 12 図版 4-3

D 6 グリッドに位置する。SK 02 に切られる。平面は、橢円形と推定し、長径 0.97 m、短径 0.73 m 以上を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.17 m を測る。

本土坑は、SY 01 焚口の南東側で検出した。埋土は、7・8 層とも細粒砂主体の黒色土層で、ブロック土・炭化物・焼土を含むことから、人為的な堆積と推定した。本土坑は、SY 01 前庭部で窯の改築・修理に伴う堆土と推定した層を切ることから、少なくとも 2 回目以降の操業時に掘削されたと推定した。

遺物は、碗・小皿の細片が出土した。

SK 05 図 13・14 卷頭図版 3-5 図版 4-4・5、13、14、15

D・E 5 グリッドに位置する。SY 01 の焚口の南東側、流入土直下で検出した。平面は不定形で、長径 3.31 m、短径 2.62 m 以上を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.29 m を測る。

埋土は、1 層が明黄褐色細粒砂主体で、遺物が集中的に堆積し、2 層は、明褐色で極細粒砂を含んだ細粒砂主体に、明赤褐色極細粒砂の地山ブロックを含む。2 層は、地山と酷似していることから、窯体を構築した際の堆土と推定した。また、1 層目の底面がほぼ水平に堆積していることから、築窯排土を使用して平坦面を形成し、作業場など窯に

関連する施設についていた可能性がある。形成された平坦面は、SY 01 前庭部と同じ高さで、平面的にも連なることから、同じ築窯排土を利用する SY 01 前庭部の一部と判断した。

遺物は、碗 (12 ~ 22)・小皿 (23 ~ 32)・片口鉢 (33 ~ 37) が出土した。片口鉢の底部内外面には、粗粒痕が明瞭に残っていた。

SY 02 図 15 ~ 18 卷頭図版 4-1・2、5-1~5、図版 5、6、15

E 6・E 7・D 7 グリッドに位置する。窯体は、焼成室・分炎柱・燃焼室の一部が遺存し、煙道部・焚口・前庭部は、造成により削平され消失していた。ただし焼成室の南東端に、窯の中心軸と直交する幅約 0.08 m の細長い平坦面を確認した。これは、窯体内部の空気の流れを調整するダンパー関連施設の可能性がある。このことから、この平坦面が焼成室と煙道部との境と推定し、これより上方は煙道部の可能性がある。本窯は、主軸方位 N 47° - E で南西斜面に開口し、残存長は 7.6 m、最大幅は 2.4 m を測る。標高は、最上位で 18.7 m、最下位で 15.9 m、比高差は 2.8 m である。天井は、C-C' でわずかに遺存し、そのほ

とんどが崩落していた。また床面についてはほぼ全面消失しており、製品を窯から出す際のものと考える長さ 3.30 m、深さ 0.12 m の落ち込みは見つかったが、伏せ碗や窯体に伴う排水施設などは見つからなかった。燃焼室において窯築時の掘削痕跡を確認した。

遺物は、碗（38～46）、小皿（47～52）、焼台（53）が出土した。碗（46）の底面内部には、ヘラ記号「十」が認められた。

焼成室 残存長は、6.68 m で、平面は、中心軸に対して左右にほぼ対称である。焼成室と燃焼室の境で幅 1.91 m、そこから緩やかに広がり分炎柱から上方 1.5 m 地点で、最大幅 2.4 m を測る。さらに上方へ向かうにつれて幅は徐々に狭まり、煙道部と焼成室の境で 1.24 m を測る。床面の傾斜角は、そのほとんどが流失しているため、窯体底面の傾斜角を示す。分炎柱を起点に上方 2.0 m 地点から、最大幅部分まで 20° で上昇する。分炎柱より 4.88 m 地点で 32° と急上昇し、36° で煙道部境に到達する。両側壁には、窯体掘削時のものと考えられる、横方向の工具痕が認められた（図版 5-3）。側壁の表面は、被熱により硬化し、ガラス化する部分も認められた。

埋土は、大部分が流入土と天井崩落土と薄い炭化物層で、2・6 層のように遺物を含む堆積もある。ただし、2 層は天井崩落土より後から堆積していることから、SY 02 操業時の遺物である可能性は低い。

燃焼室から焼成室下方にかけて、深さ 0.12 m の掘り込みを確認した。また、焼成室において底面から約 20 cm 壁面で、焼成時の床面と考えられる痕跡を確認した（図 19、図版 6-4・5）。焼成時、炎をしぼる必要がある分炎孔付近のため、製品を取り出す際には、この部分の床を掘削している可能性がある。

断ち割りの結果、被熱により赤褐色に変色した地山を確認したが、床面下の伏せ碗は見つからなかった。分炎柱・分炎孔 分炎柱は、基底部で長径 0.56 m、短径 0.49 m、残存している上端で長径 0.49 m、短径 0.36 m 以上を測る。平面は、楕円形で、残存高は、0.32 m 以上を測る。断ち割りの結果、分炎柱は、地山を掘削しきり抜いた構造で、スサ入り粘土の貼り付け等の痕跡は確認できなかつた。しかし、遺構外で、スサの痕跡が残った窯体の一部が見つかっており、部分的な改修の可能性はある。

分炎孔は、天井が崩落しているため、残存部分での計測で、南東側で最大幅 0.68 m、北西側で最大幅 0.73 m を測る。

燃焼室 分炎柱下端から、残存長 0.54 m、最大幅 1.74 m を測る。傾斜角 1° である。平面は、分炎柱から下方へ緩やかに狭まると推定する。燃焼室から焼成室下方にかけての掘り込みは、燃焼室から焼成室に向けて、底面が 23° で下降し 27° で上昇する。長さは 0.32 m を測る。床面は消失しており、側壁の一部が残存するのみである。分炎柱付近では、わずかな炭化物層を検出した。

埋土中、27 層がにぶい褐色の極細粒砂で遺物・焼台・炭化物の細片を含み、28 層については遺物が確認されているが、極少量であるため、27・28 層は、掘り方と考える。これらの埋土を除去後に、燃焼室において、掘削痕跡を検出した。この掘削痕跡は、床を割って製品を取り出すため、舟底ピット状に掘削した際の痕跡と考える。工具幅は約 0.12 m と推定した。

S K 04 図 19 図版 7、16

D・E 5 グリッドに位置し、SY 01 灰原直下で検出した。平面は不定形で、長径 3.16 m、短径 1.73 m 以上を測る。断面は皿形で、検出面からの深さは最深で 0.39 m を測る。底面標高は、北端 17.26 m、中

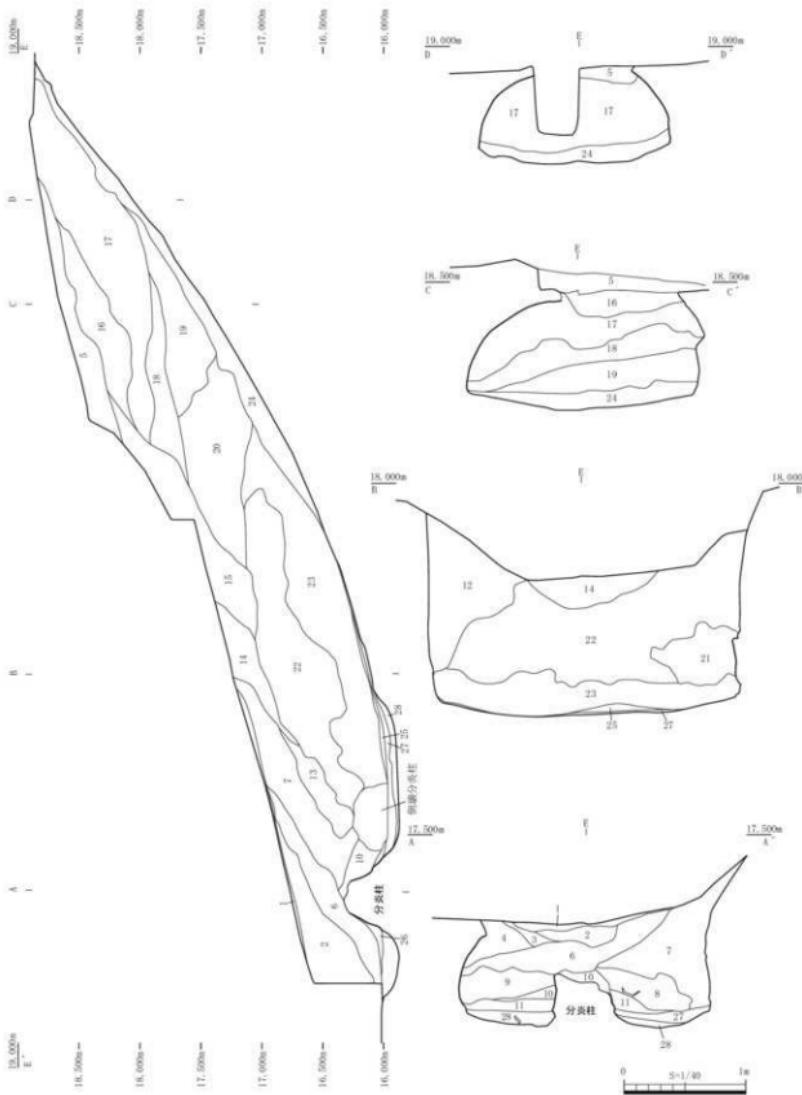


図 16 SY02 (1)

SY02 A-E

1. SYE5/8 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
に^{云々} 黄褐色細粒砂小ブロック・炭化物・堆土を少量含む。しまりや強。
2. SYE5/6 明赤褐色細粒砂少^量含む細粒砂
遺物を多く含み、明赤褐色細粒砂小ブロック・細縫・炭化物・堆土を少量含む。^上
3. SYE5/6 明赤褐色細粒砂含む細粒砂
明赤褐色細粒砂ブロックを含み、細縫を少量含む。しまりやや強。
4. SYE5/6-8 明赤褐色細粒砂含む細粒砂
明赤褐色細粒砂ブロックを含み、堆土片を少量含む。しまりやや強。
5. SYE4/6 黄褐色細粒砂多く含む細粒砂
細縫を多く、黄褐色細粒砂ブロック・遺物を含み、炭化物を少量含む。^上
6. 10YE5/6 黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
細縫・炭化物・堆土片を少量含む。しまりやや強。
7. SYE5/6 黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
黄褐色中粒砂ブロックを含み、堆土片を少量含む。
8. SYE5/6-8 明赤褐色細粒砂含む細粒砂
窓天井片を含み、暗色細粒砂ブロックを少量含む。天井崩落土。
9. SYE5/8 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
窓天井片・明赤褐色細粒砂少^量含む。
10. SYE5/6-8 に^{云々} 黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
に^{云々} 黄褐色・明赤褐色細粒砂小ブロック・炭化物・堆土を少量含む。
11. SYE5/6-8 黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
明赤褐色細粒砂小ブロックを含む。細縫の大きさを多く含む。
12. SYE5/6 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
(明赤褐色細粒砂大ブロックを多く含み、細縫・炭化物を少量含む) と
SYE5/8シルト含む細粒砂 (白色細粒砂ブロック・黃褐色細粒砂ブロック含む)
の混土。しまりやや強。
13. 2. SYE4/8 明赤褐色細粒砂含む細粒砂
天井崩落土。
14. SYE5/8 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
細縫を含み、明赤褐色細粒砂・遺物片を少量含む。
15. SYE5/6 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
明赤褐色細粒砂小ブロック・中粒・炭化物・堆土を少量含む。
16. 8. SYE5/6 黄褐色細粒砂中粒砂多く含む細粒砂
炭化物を多く含み、明赤褐色細粒砂小ブロック・堆土を含む。
17. SYE5/6 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
堆土・堆土片を含み、細縫・炭化物を少量含む。しまりやや強。
18. SYE4/6 暗赤褐色中粒砂少^量含む細粒砂
暗赤褐色細粒砂ブロックを含む。天井崩落土。
19. 6. 7. SYE5/6 明赤褐色中粒砂少^量含む細粒砂
明赤褐色細粒砂小ブロック・細縫・炭化物・堆土少量含む。天井崩落土。
20. 7. SYE5/6 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
白色細粒砂少^量含む細粒砂・中粒砂・炭化物を含む。細縫の大きさを多く含む。
21. SYE5/6-8 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
窓天井片を多く含み、明赤褐色細粒砂ブロックを少量含む。天井崩落土。
22. SYE5/6 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
明赤褐色細粒砂小ブロック・窓天井片を少量含む。
23. SYE5/6 暗赤褐色中粒砂少^量含む細粒砂
窓天井片を多く含み、暗色細粒砂ブロックを少量含む。天井崩落土。
24. 7. SYE4/6 に^{云々} 暗赤褐色中粒砂含む細粒砂
炭化物を少量含む。
25. 7. SYE5/6 に^{云々} 暗赤褐色中粒砂含む細粒砂
明赤褐色細粒砂小ブロック・炭化物・堆土を少量含む。
26. SYE5/6-8 に^{云々} 暗赤褐色中粒砂含む細粒砂
炭化物を多く含み、暗色細粒砂小ブロック・堆土・堆土片を含み。細縫を少量含む。
27. 7. SYE5/6 に^{云々} 暗赤褐色中粒砂含む細粒砂
明赤褐色細粒砂小ブロック・堆土・堆土片を含み。細縫を少^量含む。
28. 10YE5/4 に^{云々} 黄褐色中粒砂多く含む細粒砂
暗赤褐色細粒砂小ブロックを少量含む。

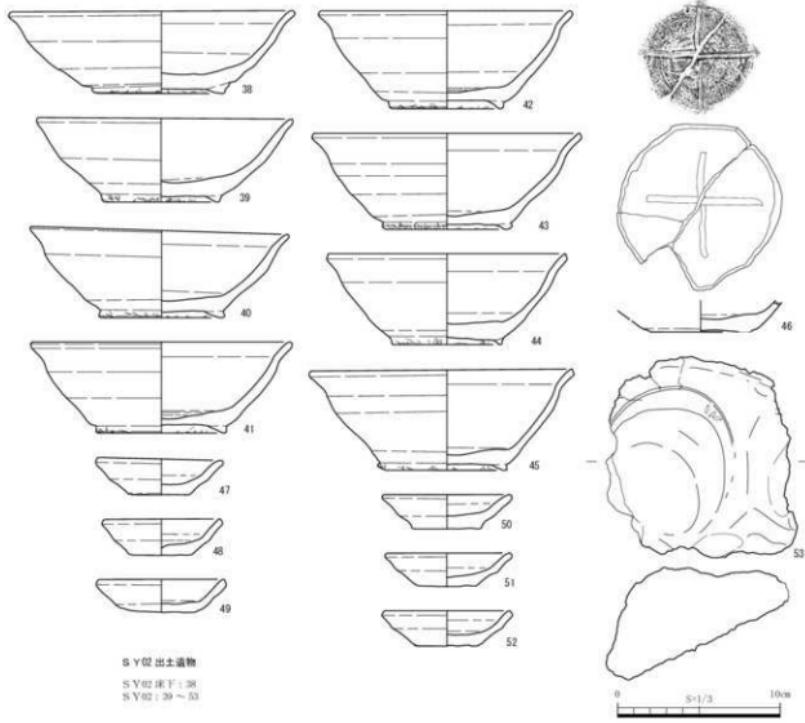


図 17 SY 02 (2)

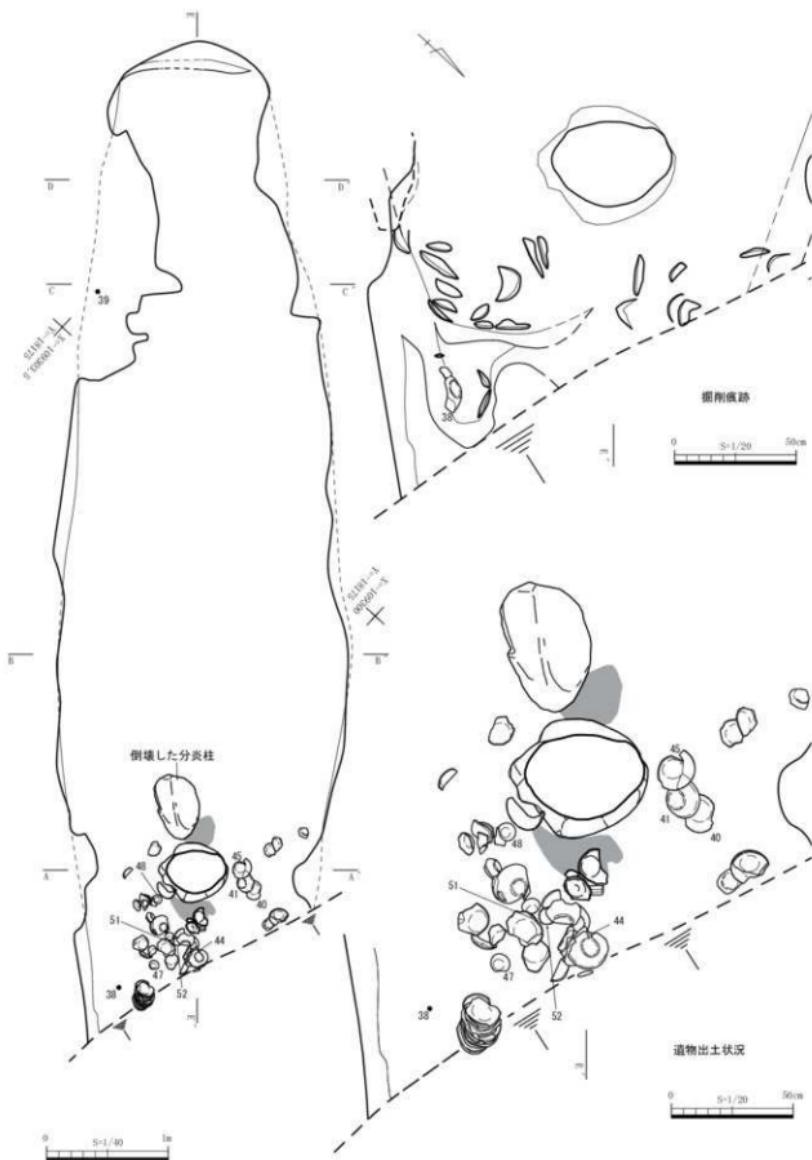
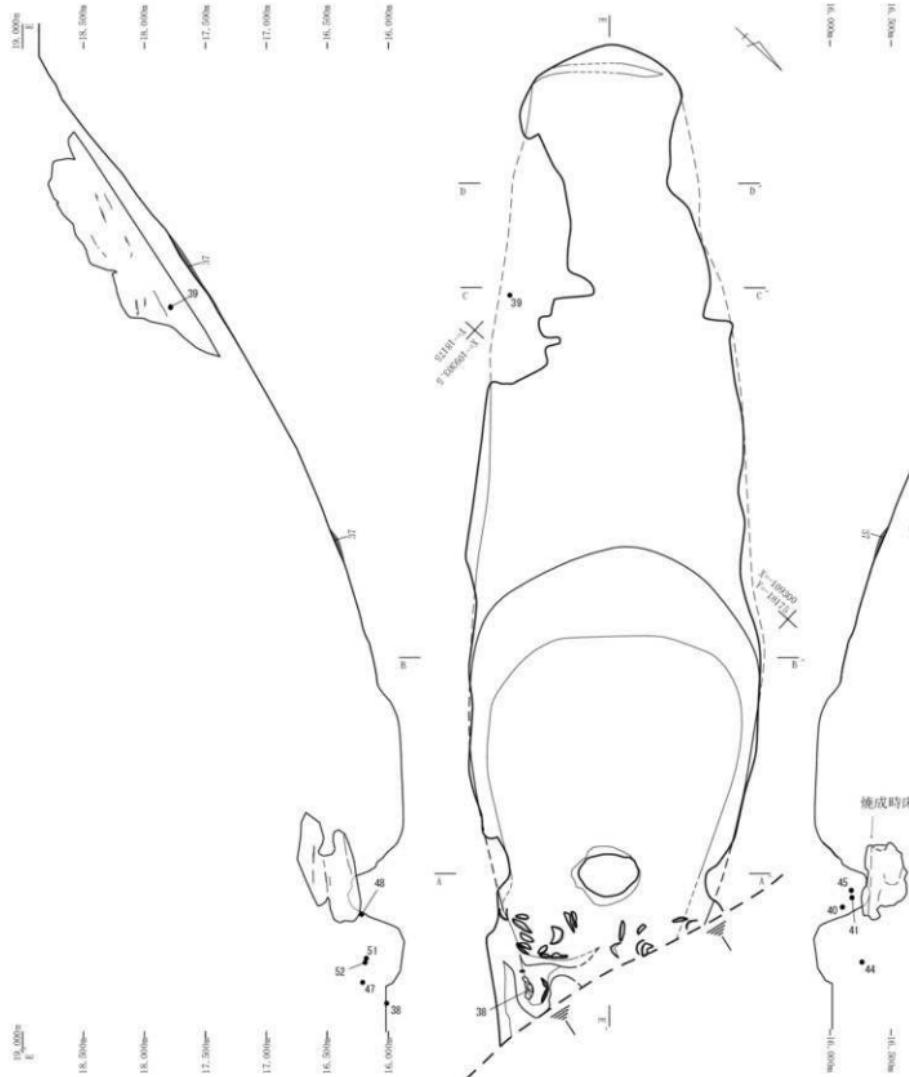


図 18 SY 02 (3)



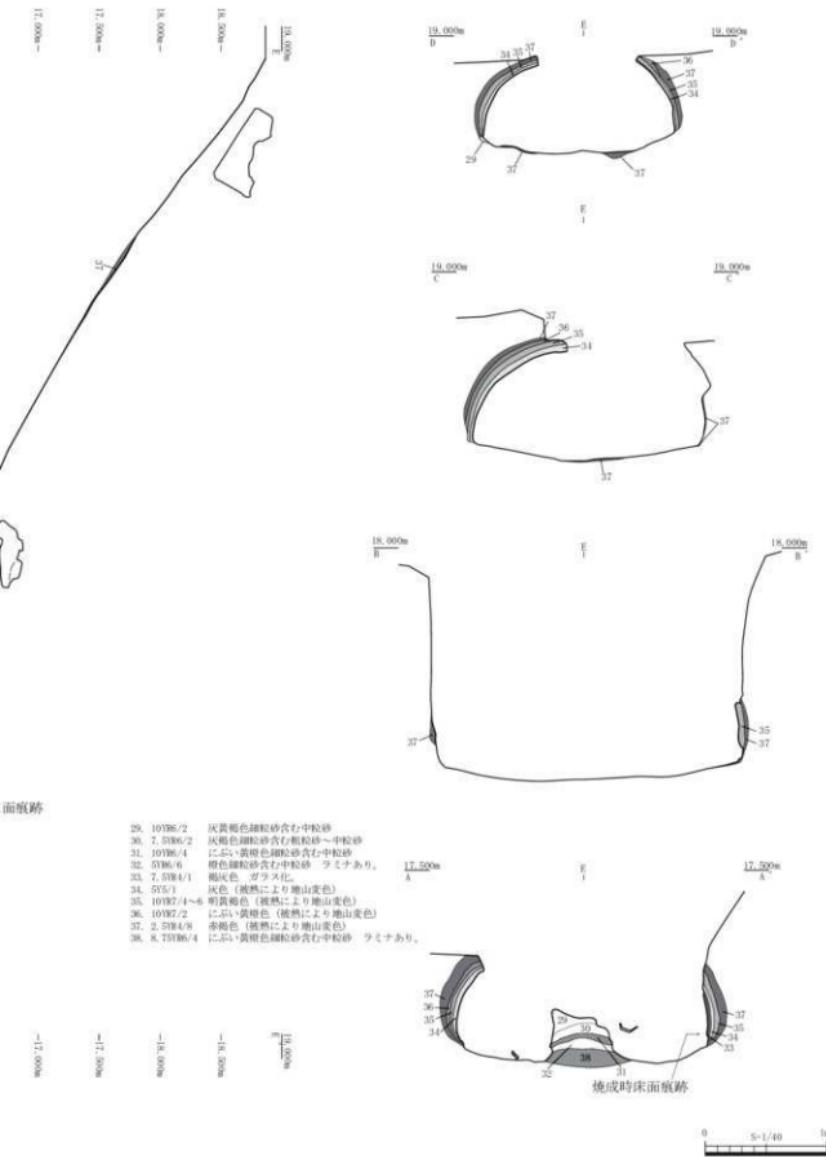


図 19 SY 02 (4)

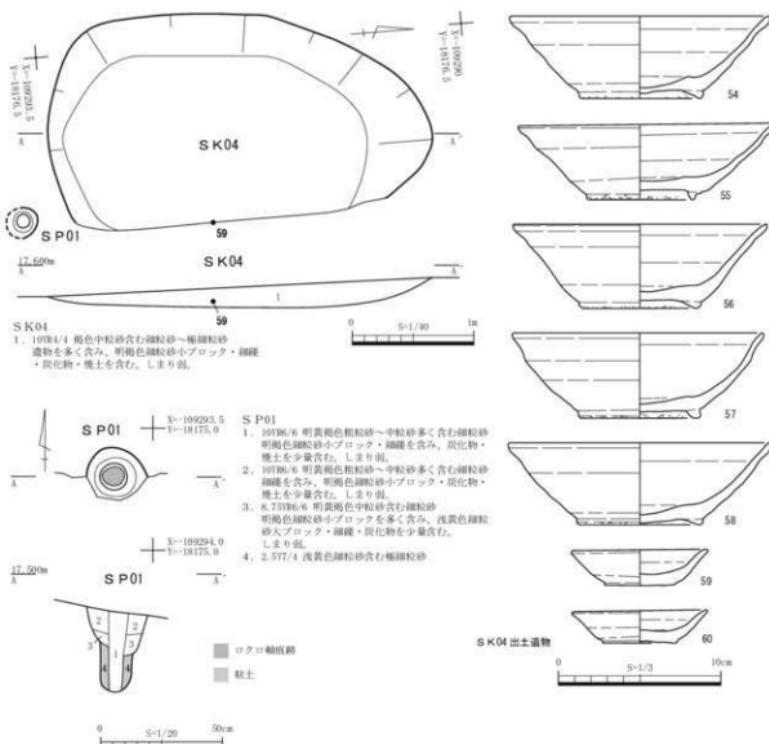


図 20 SK 04・SP 01

央 17.24 m、南端 17.24 m と平坦である。

本土坑は、SY 01 中心軸を、焚口から 3.05 m 地点の斜面を掘削し、平坦面を形成している。また、南側 0.23 m と極めて近い距離でロクロビット (SP 01) を検出したことから、作業場などの窯業生産に関わる施設の可能性がある。本土坑は、SY 01 の直下に位置するため、SY 01 の作業場と判断するのは難しく、より近い SY 02 に関連する土坑と推定した。

遺物は、碗 (54～58)、小皿 (59・60) が出土している。いずれも不良品であり、大量に廃棄された状態で出土したことから、作業場としての機能が失われた後の堆積と判断した。前述の位置関係から、SY 01 由来の遺物である可能性が高い。

SP 01 図 19 卷頭図版 5-6 図版 7-1、8

D 5 グリッドに位置し、SY 01 灰原直下で検出した。平面は円形で、長径 0.25 m、短径 0.21 m、軸部は、径 0.11 m を測る。断面は段を有する U 字形で、検出面からの深さは最深で 0.35 m を測る。埋土は、明黄

褐色の細粒砂を含む中粒砂が主体で、焼土・炭化物を含む（1～3層）。4層は、ロクロ心棒（軸）の周りを充填したと考えられる風化した粘土が堆積していた。S P 01は、SK 04から0.23mと非常に近い距離に位置していることから、SK 04を作業場とする工房の施設と推定した。SK 04と同様に、SY 01灰原に覆われているため、SY 01関連のロクロピットの可能性は低い。SY 02と距離が近いことから、SY 02で焼成する製品を製作するためのロクロピットと推定した。

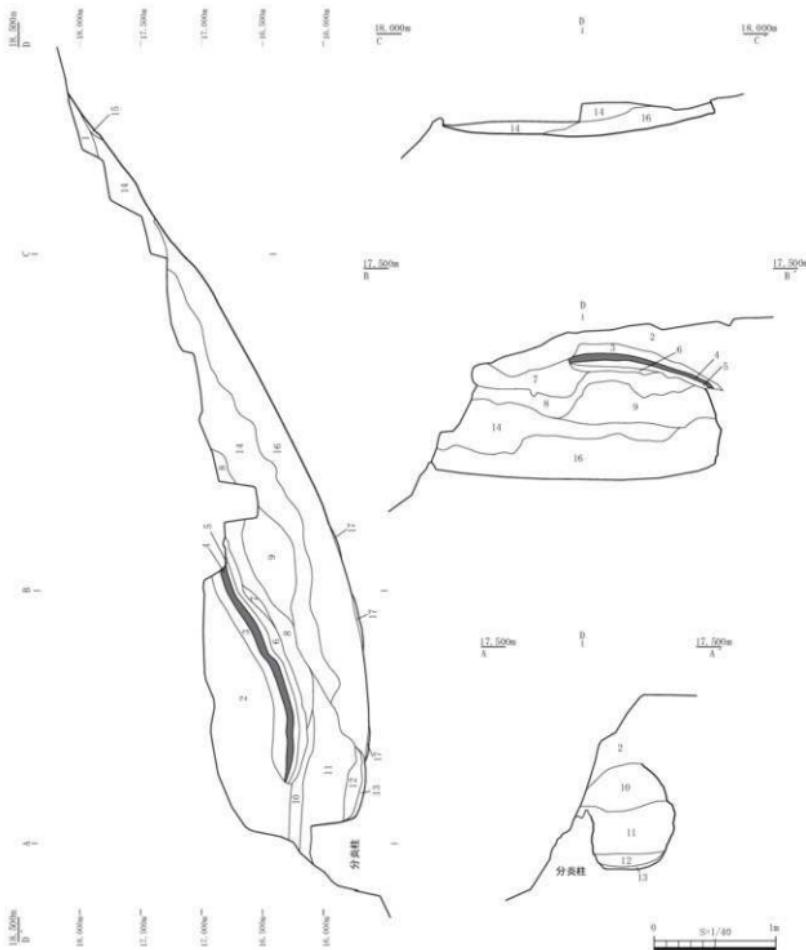


図 21 SY 03 (1)

S Y 03 図 21～23 卷頭図版 4-1・3、6-1～3 図版 1-3、5-1、9、10-1～3、16

E 7・E 8・F 7 グリッドに位置する。窯体は、焼成室と分炎柱・床面の一部が遺存し、煙道部・燃焼室・焚口・前庭部は、造成により削平され消失している。本窯は、主軸N-39°-E、南西で斜面に開口し、残存長は6.6m、最大幅は2.4mを測る。標高は、窯本体の最上位で18.3m、最下位で15.6m、比高差は2.6mである。天井はほとんどが崩落し、また床面については、分炎柱より上方へ4.46mより上は遺存していたが、床面の焼き締まりは悪い。床面直上に遺物・焼台、その痕跡は残存していなかった。床面下の伏せ碗や、窯体に伴う排水施設なども見つかなかった。

遺物は、碗(61・62)・小皿(63)が出土した。

焼成室 残存長6.33m、平面は、中心軸に対して左右にほぼ対称である。焼成室と燃焼室の境で幅0.94m以上、そこから緩やかに広がり分炎柱から上方2.20m地点で、最大幅2.41mを測る。さらに上方でもその幅は、ほぼ変わらず、煙道部側で残存している幅は2.22mを測る。床面のほとんどは流失し、残った床面も状態が悪く、明瞭な焼台痕も確認できなかった。底面の傾斜角は、分炎柱から上方2.4m地点の最大幅まで26°で上昇、分炎柱より4.88m地点から30°で急上昇し、35°で煙道部付近に到達する。両側壁には、窯体掘削時のものと考えられる掘削痕が認められた。

分炎孔から燃焼室下方にかけて、深さ0.04mの掘り込みを確認した。また、焼成室から分炎孔にかけて、底面から約20cm壁面で、焼成時の床面と考えられる痕跡を確認した(図22、卷頭図版6-2)。焼成時、炎をしぶる必要がある分炎孔付近のため、製品を取り出す際には、この部分の床を掘削している可能性がある。埋土は、大部分が流入土と天井崩落土である。

断ち割り後は、被熱により赤褐色に変色した地山を確認した。床面下の伏せ碗や、窯体に伴う排水施設などは見つかなかった。

分炎柱・分炎孔 分炎柱は、基底部で長径0.45m以上、短径0.33m以上、残存している上端で長径0.31m以上、短径0.28m以上を測る。平面は、隅丸方形と推定する。断ち割りの結果、分炎柱は、地山を掘り残した構造で、スサ入り粘土の貼り付等の改修痕跡はなかった。窯壁には、窯を掘削する際にできる工具痕跡が見つかった。分炎孔は、造成による削平で消失しており、残存部分での計測で、北西側最大幅0.68m、高さは推定で0.91mを測る。

S K 06 図版 10-4～5、16

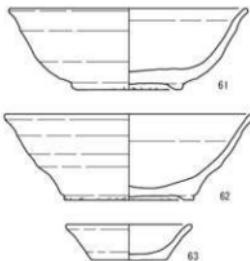
E 6 グリッドに位置し、S Y 01 灰原直下で検出した。北東部を擾乱に切られているが、残存部から平面は方形と推定した。長径は1.03m、短径は0.74m以上を測り、断面は北東側に段を持つ有段形で、検出面からの深さは最深で0.84mを測る。

埋土は、1・2層が中粒砂から細粒砂主体で、比較的粒径が粗く、ブロック土をほとんど含まない。これに対し、3～5層は細粒砂から極細粒砂と粒径が細く、ブロック土も多く含む。特に5層は、土質土色が地山に近似しており、築窯排土と考える。以上から、1・2層は流入による自然堆積、3～5層は、人為的な堆積と判断した。本土坑は、灰原2の除去後にS Y 02の西側で検出されていることから、S Y 02に関連する土坑で、S Y 01構築時にその排土によって埋められた可能性がある。遺物は、常滑陶器と推定する甕の体部(64)が出土した。内面で、指圧痕が認められた。細片のため詳細な時期は不明である。

第3章 調査の成果

SY03 A-D

1. 07R5/6 明赤褐色中粒砂含む細粒砂。細縫を含み、淡褐色細粒砂ブロック・焼土を少量含む。しまり強。
2. 07R4/9 明褐色シルト少量含む細粒砂。
3. 2.5R5/6 明赤褐色(淡然により堆山変色) 明色(被覆により堆山変色)
4. 07R6/8 淡黄色(被覆により堆山変色)
5. 10R5/8 明赤褐色(淡然により堆山変色)
6. 7.5R4/1 黄褐色(ガス化)
7. 2.5R4/6 明赤褐色シルト少量含む細粒砂
8. 7.5R4/6 明褐色中粒砂含む細粒砂 明褐色(淡然により堆山変色) 明褐色細粒砂小ブロックを非常に多く含み、炭化物を少量含む。しまり弱。
9. 7.5R5/6 明褐色中粒砂含む細粒砂 明赤褐色細粒砂小ブロック・褐色細粒砂ブロックを含み、細縫を少量含む。しまり弱。
10. 7.5R4/6 明褐色シルト含む細粒砂 明褐色シルトに混じる黄色細粒砂小ブロックを含み、細縫を少量含む。空洞あり。しまり弱。
11. 7.5R5/8 明褐色シルト少量含む細粒砂 細縫を含む。ラミナリ。しまり弱。
12. 8.7R4/4 明褐色シルト少量含む細粒砂 細縫・坑洞を少量含む。ラミナリ。しまり弱。
13. 10R4/3 淡黄色(被覆含む細粒砂)
14. 7.5R5/6 明褐色シルト少量含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロックを多く含み、細縫を少量含む。しまり弱。
15. 07R5/8 明褐色シルト中粒砂～細粒砂 明黄褐色シルト小ブロック・細縫・中粒・焼土・天井ブロックを含む。
16. 07R4/8 多褐色シルト少量含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロックを含み、褐色細粒砂小ブロックを含む。窓体天井ブロックを含む。しまりやや強。
17. 8.7R4/3 淡黄色中粒砂含む細粒砂 明褐色細粒砂小ブロック・炭化物を少量含む。



SY03 出土遺物

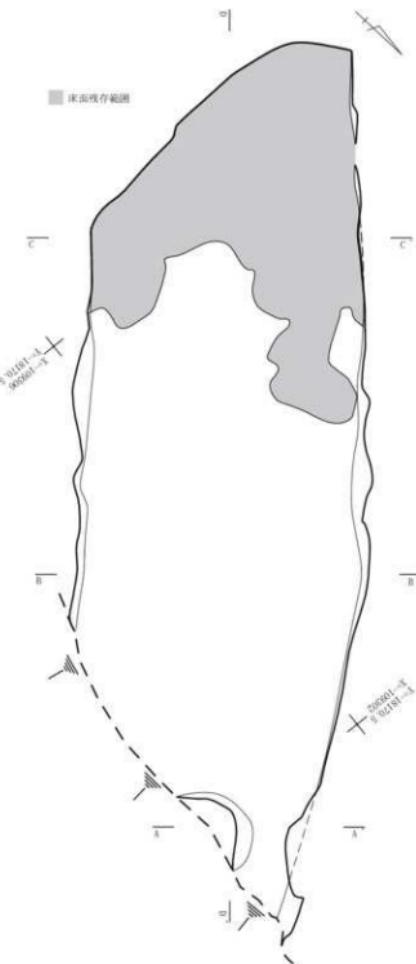
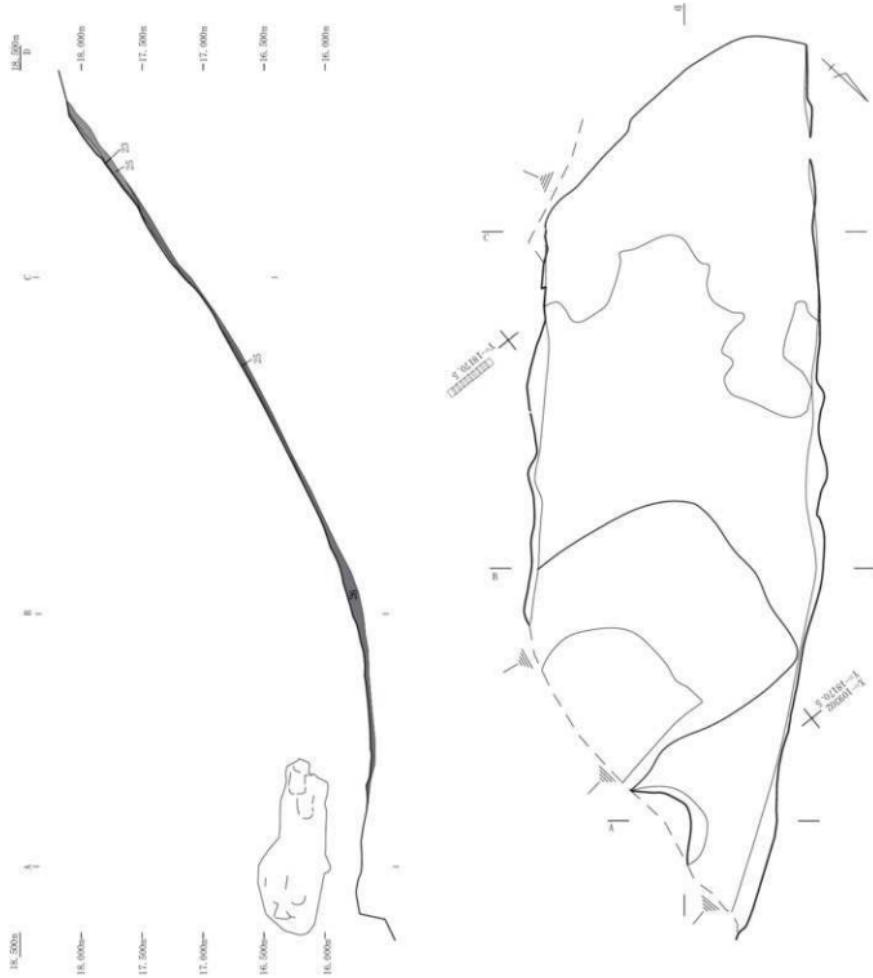


図 22 SY03 (2)



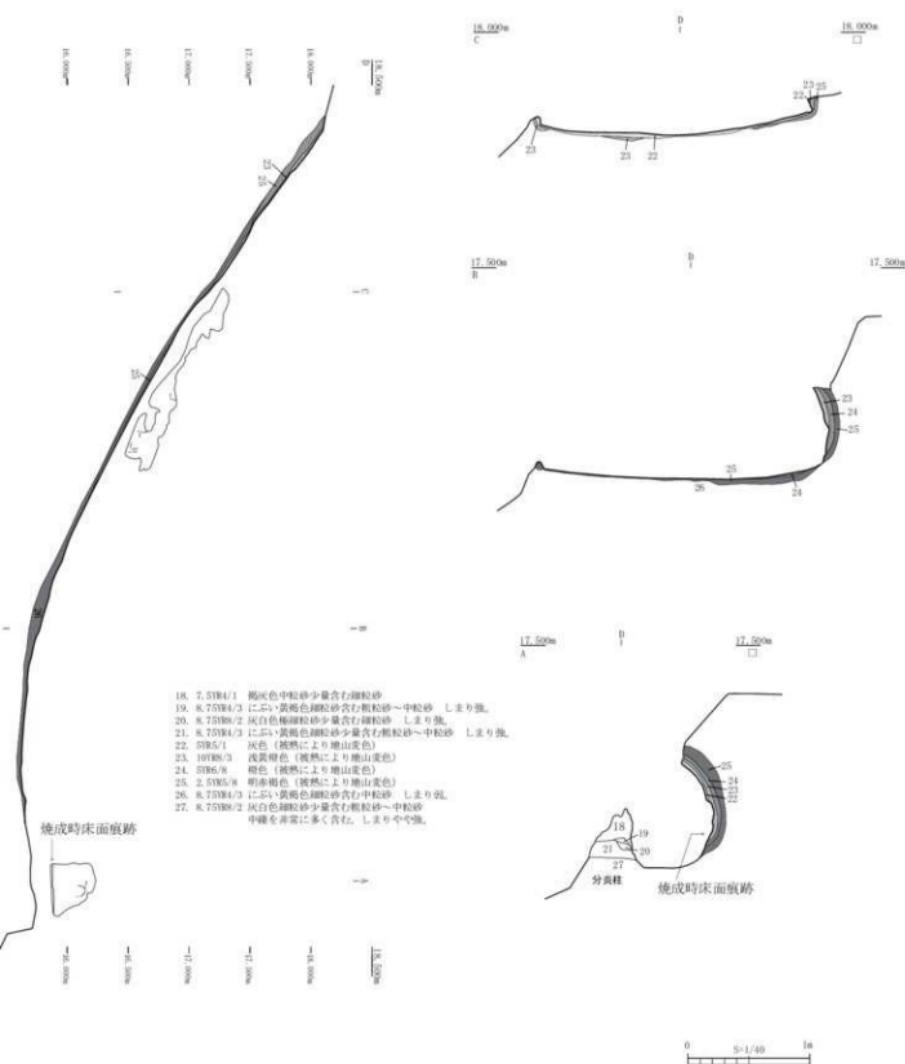
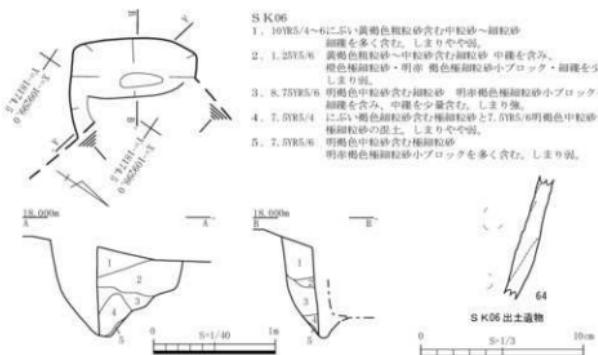


図 23 SY 03 (3)



3. 灰原

図25～30 卷頭図版6～4 図版1～2、11,12～1～5、16～19

灰原は、調査区の北半に堆積する。底面の傾斜角はSY01前庭部から傾斜角11°を測り、比較的緩やかに北東へ広がっている。土質・土色・含有物（遺物・炭化物・焼土・焼台）の量によって5層に分層し、層位順に上位から灰原1～5とした（表3）。遺物は、山茶碗の碗、小皿、片口鉢が出土地している。

灰原1 D6グリッドに位置する。堆積する層の厚さは、0.13～0.23mを測る。埋土は、明褐色極細粒砂が主体で、遺物・礫が多く含まれる。遺物は、碗（65～67）、小皿（68・69）、片口鉢の細片が出土している。

灰原2 E4・5、F4、D6に位置する。堆積する層の厚さは、0.05～0.16mを測る。埋土は、褐色極細粒砂が主体で含有物が少ない。遺物は、碗（70～72）、小皿（73・74）が出土している。

灰原3 F4グリッドに位置する。層の厚さは、0.12～0.22mを測る。埋土は、黒褐色細粒砂が主体で、焼台が多く含まれていた。遺物は、碗（75・76）が出土した。

灰原4 E4・F4・E5に位置する。層の厚さは、0.26～0.36mを測る。SY01の中心軸より北側に広がり、E4・F4で特に厚く堆積している。埋土は、褐色細粒砂主体で、遺物・ブロック土・焼土・焼台片が含まれていた。遺物は、碗（77～99）、小皿（100～108）、焼台（109・110）が出土をしている。焼台には、融着を防ぐための、軋轆痕跡が明瞭に残っていた。

灰原5 E5・6、D6に堆積する。層の厚さは0.05～0.16mを測る。褐色細粒砂が主体で、礫が多く含み、遺物も多く出土した。遺物は、碗（111～115）、小皿（116～121）が出土している。

今回の調査で、窯体3基と灰原1つが見つかっているが、近・現代から続く宅地造成等のため消失している部分も多く、決して良好な状態で遺存していなかった。しかし、残存している灰原の範囲がSY01前庭部から下方に広がっていること、SY02・03と灰原の位置関係やSY01の北側に窯体が確認されていないことから、SY01に伴うものと判断した。また、灰原1～4と灰原5の間には、地山に近似した堆積が認められる（図26 C-C' 2・7層、D-D' 4層）。これらは、遺物や炭化物等の操業中に排出され

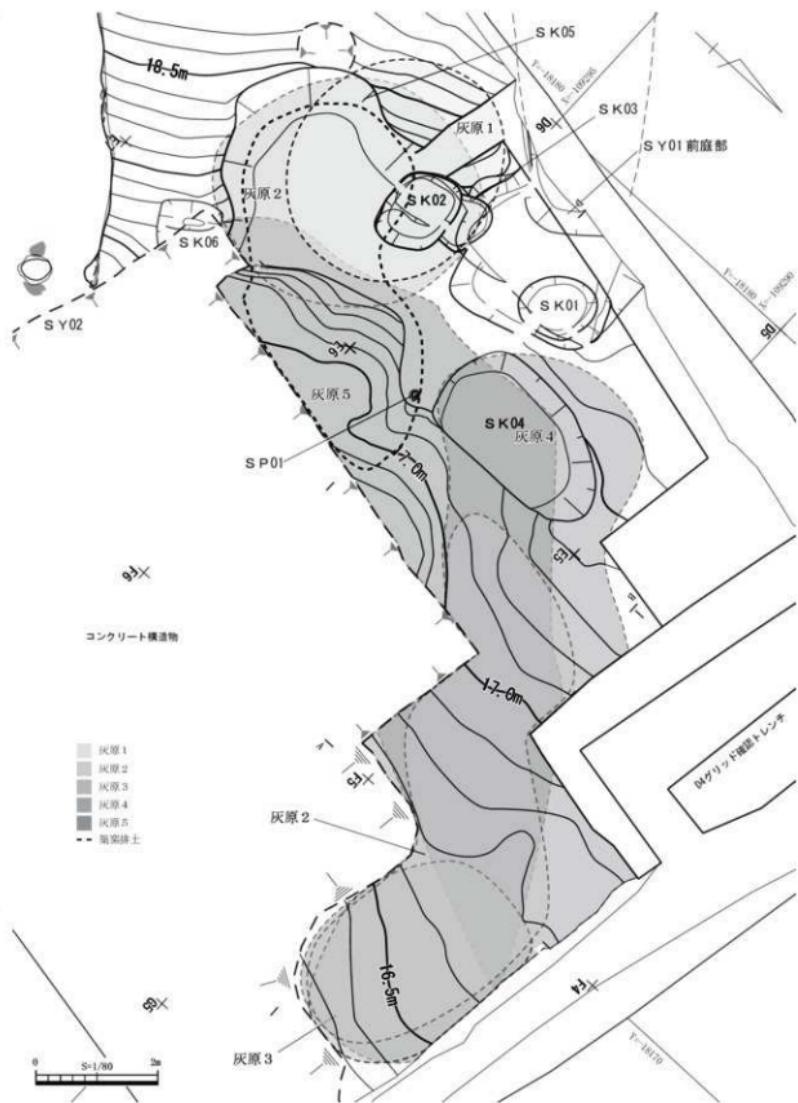


図 25 灰原 (1)

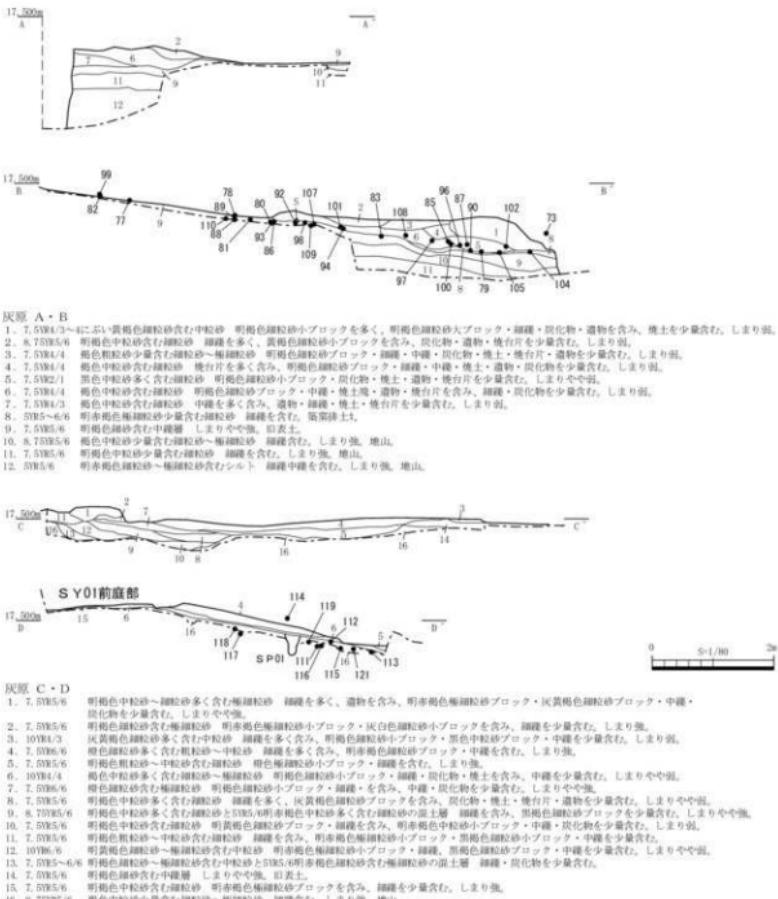


図 26 灰原 (2)

表 3 土層観察表

△	SP名	層番	上色	上質 (主)	含む物					層厚 (m)	
					ブロック	遺物	炭化物	堆土	堆土片		
灰原 1	C-C'	1	明褐色	細粒砂～ 細縫砂	少量	是	少量	-	-	多量	0.13~0.23m
灰原 2	A-4- B-5-	1~3	褐色	細粒砂～ 細縫砂	少量	少量	少量	少量	少量	少量	0.05~0.16m
灰原 3	B-6-	4~5	褐色～ 黒褐色	細粒砂	少量	少量	少量	少量	是	少量	0.12~0.22m
灰原 4	A-5- B-5-	6	褐色	細粒砂	少量	是	少量	是	是	是	0.26~0.36m
灰原 5	C-C'- D-D'	6	明褐色	細粒砂	是	少量	少量	少量	少量	少量	0.05~0.14m
				細粒砂～ 細縫砂	-	-	-	-	-	少量	0.05~0.07m

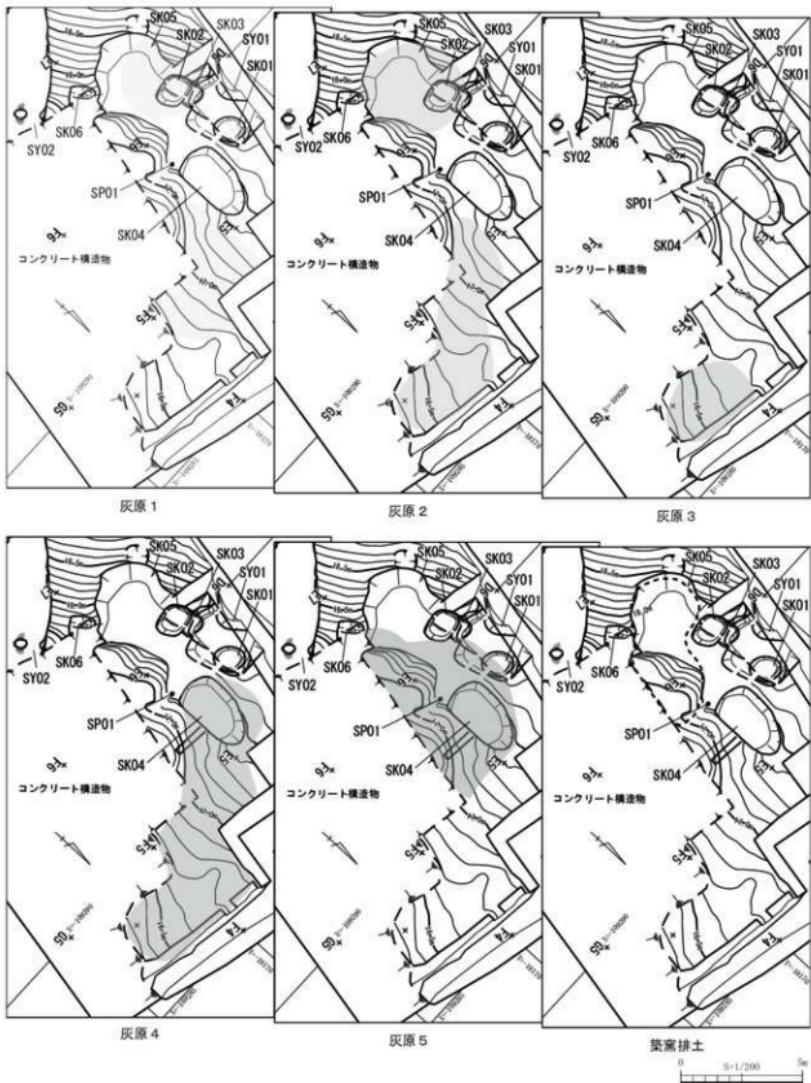
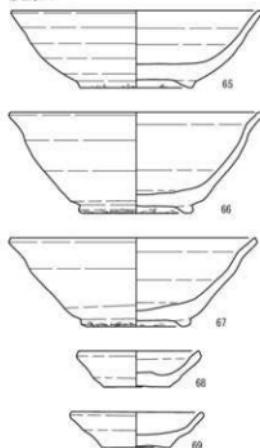
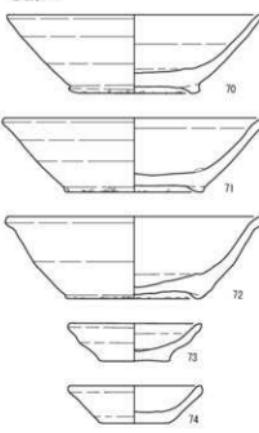


図 27 灰原・築窯排土範囲

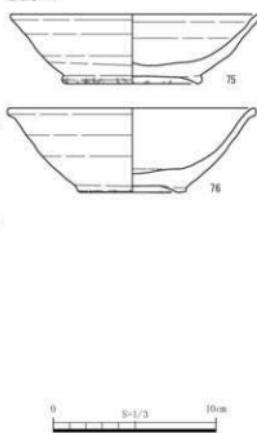
灰原 1



灰原 2



灰原 3



0 S:1/3 10cm

灰原 4

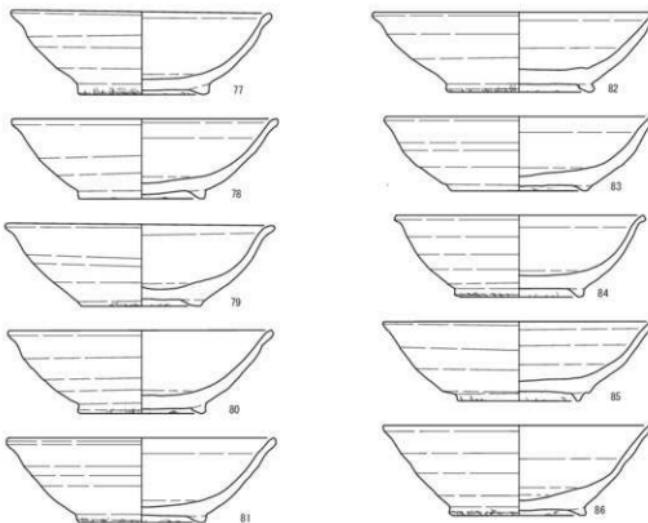


図 28 灰原出土遺物 (1)

灰原4

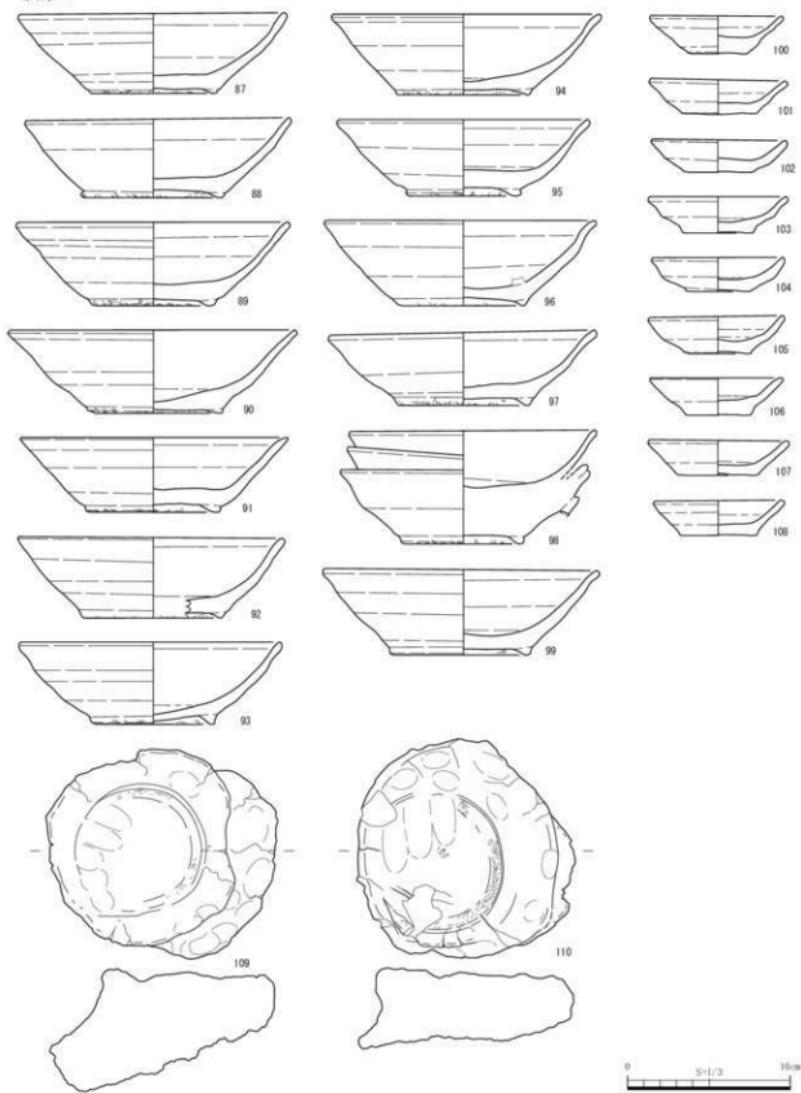


図 29 灰原出土遺物 (2)

灰原5

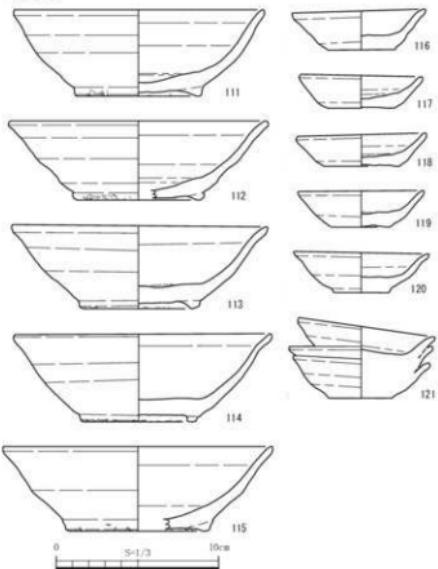


図30 灰原出土遺物（3）

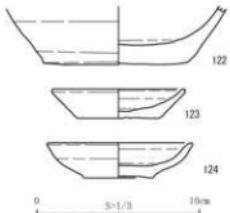
表土: 122
堆土: 123 ~ 125

図31 遺構外出土遺物

る物質を含まず、上下を灰層に挟まれることから、窯の改築や修理に伴う排土の可能性がある。よって、SY 01は最低でも2回の操業が考えられる。

4. 遺構外出土遺物

図31 図版19

調査区では、遺構外の遺物も多く見つかっている。122は、表土からの遺物で、無台の片口鉢である。底部の内面と外面には、板目状圧痕・稲穀痕が明瞭に残っていた。SK 05出土の片口鉢同様、無台で平底の器種と考える。123~125は、堆土からの遺物で、123・124は、山茶碗の小皿。125は、大正以降瀬戸美濃陶器の徳利で、体部には鉄袖で「大府」「舍吉野口（屋ヶ）」「一四十四」と描かれている。

第4章 川池西古窯出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

愛知県大府市の川池西古窯から出土した炭化材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる山茶碗の窯跡SY01 焚口上層から3点、焚口下層から2点、灰原から1点、焚口上層に対応するSK02から2点、焚口下層に対応するSK03から2点、ほぼ同時期と考えられる山茶碗の窯跡であるSY02から2点の、計12点の出土炭化材である。

残存率の良いものについて、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行った。復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、針葉樹であるマツ属複維管束亞属、広葉樹であるコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、單子葉であるタケ亜科の、計3分類群がみられた。マツ属複維管束亞属が最も多く8点で、クヌギ節が3点、タケ亜科は1点であった。

炭化材の復元直径等の計測では、No.0014のクヌギ節は残存半径1.1cm、残存年輪数4年、復元直径2.0cm、No.0015のクヌギ節は残存半径1.0cm、残存年輪数5年、復元直径3.0cm、No.0019のマツ属複維管束亞属は残存半径0.8cm、残存年輪数3年、復元直径4.0cmであった。樹種同定結果を表4に、一覧を表5に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亞属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科 図32 1a-1c (No.0020)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状

表4 川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果（1）

樹種	部位	12世紀後葉～13世紀初頭					合計
		SY01	SK02	SK03	SY02		
マツ属複維管束亞属	焚口上層	2	1	2	2	1	8
コナラ属クヌギ節	3					1	3
タケ亜科						1	1
同定不可						0	0
合計		3	2	1	2	2	12

表 5 川池西古窯出土炭化材の樹種同定の結果 (2)

No.	出土遺構	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存 年輪数	復元直径 (cm)	時期
0014	ST01焚口	上層	燃料材	コナラ属クヌギ節	1.1	4	2.0	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0015	ST01焚口	上層	燃料材	コナラ属クヌギ節	1.0	5	3.0	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0016	ST01焚口	上層	燃料材	コナラ属クヌギ節	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0017	ST01焚口	下層	燃料材	マツ属複維管束亞属	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0018	ST01焚口	下層	燃料材	マツ属複維管束亞属	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0019	SK02	(上層対応)	燃料材	マツ属複維管束亞属	0.8	3	4.0	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0020	SK02	(上層対応)	燃料材	マツ属複維管束亞属	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0021	SK03	(下層対応)	燃料材	マツ属複維管束亞属	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0022	SK03	(下層対応)	燃料材	マツ属複維管束亞属	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
0023	ST01灰原	灰層4	燃料材	マツ属複維管束亞属	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
1157	ST02	-	燃料材	マツ属複維管束亞属	-	-	-	12世紀後葉 ～13世紀初頭
1198	ST02	-	燃料材	タケ亜科	0.05	-	0.1	12世紀後葉 ～13世紀初頭

となる。

マツ属複維管束亞属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(2) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図 32 2a-2c (No. 0015)、3a (No. 0016)

年輪のはじめに大型の道管が 1～3 列並び、晚材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(3) タケ亜科 Subfam. *Bambusoideae* 図 32 4a (No. 1198)

向軸側の原生木部、その左右の 2 個の後生木部、背軸側の節部の 3 つで構成される維管束が散在する單子葉植物の構造である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部にわりなく厚くなる。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間で、日本には 12 属ある。

4. 考察

12世紀後葉から13世紀初頭に操業されていたと考えられるSY 01では、焚口上層でクヌギ節が、焚口上層に相当するSK 02でマツ属複維管束亜属がみられた。また、焚口下層および焚口下層に相当するSK 03、灰原では、マツ属複維管束亜属のみがみられた。ほぼ同じ時期に操業されていたと考えられるSY 02では、マツ属複維管束亜属とタケ亜科が産出した。タケ亜科は直径1mm程度の小径で、燃料材の焚き付けなどに利用されていた可能性がある。

これらの樹種を燃料材としてみると、マツ属複維管束亜属は油分が多くて高火力で燃焼するという材質を持ち、クヌギ節は高火力で燃焼はしないが、長時間燃焼し続けるという材質を持つ（伊東ほか2011）。共に燃料材に適した樹種であり、材質を考慮した選択利用がなされていたと考えられる。

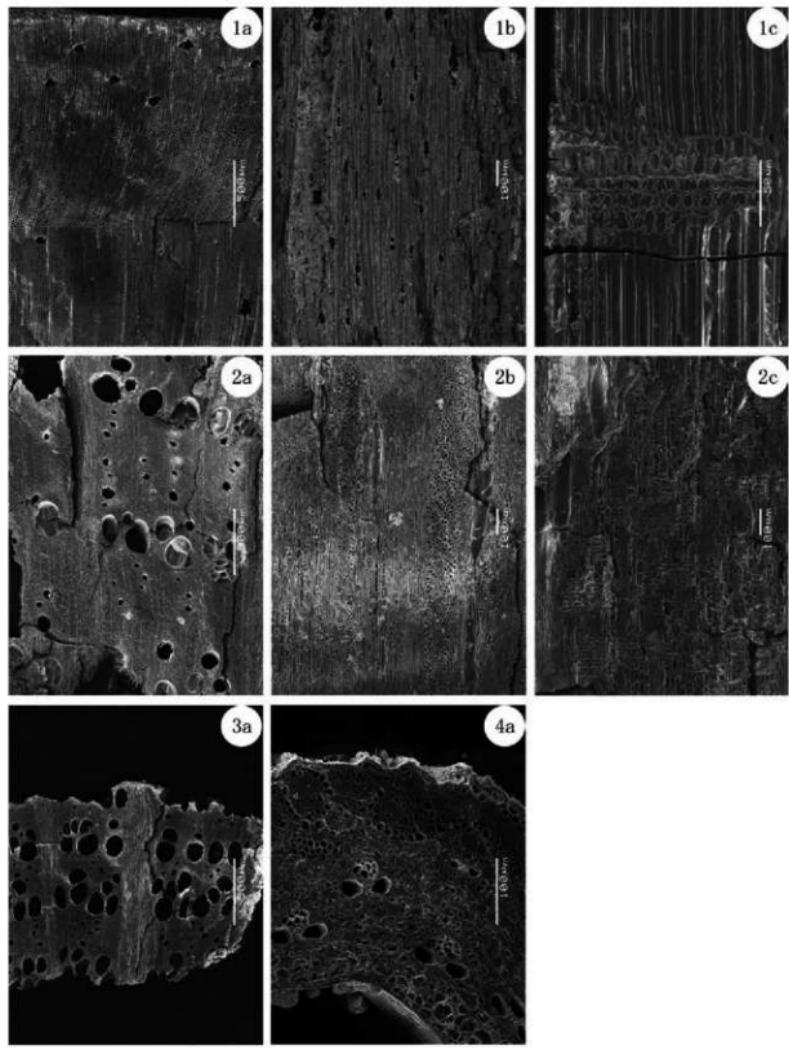
大府市域では、12～13世紀代の山茶碗窯跡の燃料材の樹種同定が多く行われている。全般的にはマツ属複維管束亜属やクリ、クヌギ節、コナラ節が主体であるが、深廻間A古窯跡群やガンジ山A古窯跡群ではクヌギ節やコナラ節が多く、羽根山古窯跡群や砂原古窯跡、森岡第1号窯跡群、深廻間B古窯跡群ではマツ属複維管束亜属が多い（黒沼2014）。今回のSY 01の燃料材も、周辺の山茶碗窯跡と同様の傾向を示している。

大府市からはやや離れるが、瀬戸市の上品野蟹川遺跡の中世（鎌倉・室町期）の層に対して行われた花粉分析では、周辺に針葉樹のマツ属複維管束亜属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、広葉樹のクヌギ節とコナラ節を含めたコナラ属コナラ亜属、アカガシ亜属、シノノキ属を主体とした森林が広がっていたと推測されている（新山・鈴木1998）。大府市域でも中世には同様の植生が広がっていた可能性があり、燃料材は窯跡周辺の植生から燃料材に適した樹種が選択的に伐採されていた可能性がある。

なおSY 01では、前半の操業時の堆積層である焚口下層ではマツ属複維管束亜属のみがみられ、後半の操業時の堆積層である焚口上層ではクヌギ節とマツ属複維管束亜属がみられた。対象試料数が少ないので確実ではないが、操業当初にはマツ属複維管束亜属が選択伐採され、操業後半には窯跡周辺のマツ属複維管束亜属が枯渇てきて、代替としてクヌギ節が利用され始めた可能性がある。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』238p, 海青社
 黒沼保子 2014「市内および周辺地域の古窯の燃料材に関する考察」『瀬戸C古窯群・久分古窯群』
 134-137 p, 大府市教育委員会
 新山雅広・鈴木 茂 1998「上品野蟹川遺跡の自然科学分析」『上品野蟹川遺跡』82-98 p,
 瀬戸市埋蔵文化財センター



1a-1c. マツ属複維管束亞属 (No. 0020)、2a-2c. コナラ属クヌギ節 (No. 0015)、3a. コナラ属クヌギ節 (No. 0016)、
4a. タケア科 (No. 1198)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

図 32 川池西古窯出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第5章 総括

第1節 遺物分類

1. 概要

今回の調査で出土した遺物は、遺構内・灰原 77 箱、遺構外 79 箱で、総コンテナ数 156 箱を数える。器種は、山茶碗の碗・小皿・片口鉢がその大半を占める。碗を蓋に転用して使用した可能性があるものについては、根拠性に乏しいため、碗とした。その他は、SK 06 から出土の常滑陶器甕と、排土から出土した近代の瀬戸美濃陶器利が見つかっている。

これら出土遺物中、山茶碗類の集計方法については、底部 6/12 以上を 1 個体とする基準を設定し、個体数の算出を行った。融着遺物は、最下部の遺物をカウントし、片口鉢は、接合後の個体数である。その他の遺物については、残存率に関係なく、器種・種別が判断できるものは 1 個体としてカウントした。

表6 遺構別遺物集計表

出土地点	山茶碗	小皿	片口鉢	常滑陶器	瀬戸美濃陶器	遺構別合計
SY01前庭部	12	4	0	0	0	16
SY02	165	12	0	0	0	177
SY03	21	0	0	0	0	21
SK01	2	1	0	0	0	3
SK02	3	4	0	0	0	7
SK03	1	0	0	0	0	1
SK04	91	3	0	0	0	94
SK05	354	67	5	0	0	426
SK06	6	1	0	1	0	1
灰原1	56	8	0	0	0	65
灰原2	24	6	0	0	0	30
灰原3	60	3	0	0	0	63
灰原4	307	43	0	0	0	350
灰原5	18	8	0	0	0	26
遺構外	30	2	1	0	1	34
器種別合計	1,144	162	6	1	1	1,314

その結果、碗 1,144 点、小皿 162 点、片口鉢 6 点、常滑陶器 1 点、瀬戸美濃陶器 1 点、総数は 1,314 点で、山茶碗類は、全体の 99.5% を占める（表 6）。

2. 分類

出土した山茶碗類の分類は、底部が 6/12 以上残存し、かつ口縁部が 1/12 以上残存しているものを抽出し、口縁端部から体部の断面形状を主とし、整形技法や調整を参考に分類を行った。法量・径高指数（器高 ÷ 口径 × 100）は、平均値を算出した。

口縁端部 口縁端部は、碗・小皿共通で a ~ e とし分類を行った。a 類は、先端が丸みを帯びているもの、b 類は、端部内面と外面の交点が 90 度以下で、外面にやや面をもつ。c 類は、端部内面と外面の交点が 90 度以下で、外面にやや膨らみをもつ。d 類は、端部内面と外面の交点がほぼ 90 度で、形状が方形状になっている。e 類は、先端が細くやや尖る。

碗 碗は、A ~ D 類に分類した。

A 類は、平均で口径 16.9 cm、器高 5.0 cm、底径 7.4 cm 前後、径高指数 31.3 である。体部は丸みをもって立ち上がり、器壁は比較的薄い。口縁部と端部に施されるナデによって S 字状に外反し、内面底部と体

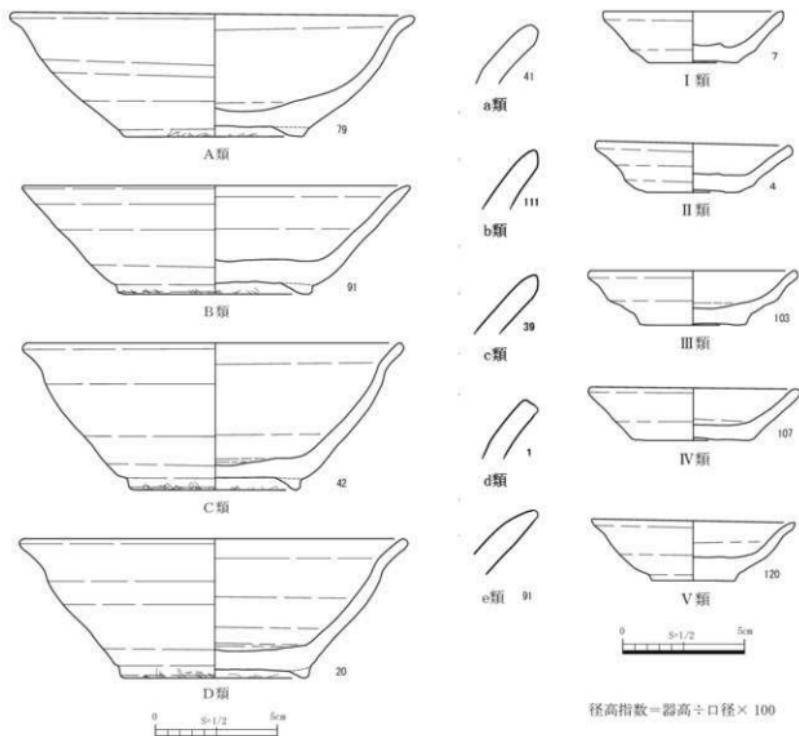


図33 分類 (1)

表7 分類別平均法量と形状 (碗・小皿)

器種	法量 (cm)			形状	器種	法量 (cm)			形状
	口径	器高	底径			口径	器高	底径	
椀A	16.9	5.0	7.4	丸みをもって立ち上がる 体部口縁の境に強いナデ S字状に外反	小皿 I	7.4	2.1	3.9	下部にナデ 体部直線的 逆ハの字状に開く
椀B	15.8	4.9	7.5	直線的に立ち上がる 逆ハの字状に開く	小皿 II	7.7	2.1	3.8	下部に丸み 上部は緩やかに外反
椀C	15.5	5.4	7.1	直線的に立ち上がる 体部口縁の境に強いナデ 口縁逆ハの字状に開く	小皿 III	8.0	2.2	3.9	下部にナデ強 上部にややナデ強
椀D	15.5	5.5	7.4	括れ・直線的に立ち上がる 体部と口縁の境にナデ 口縁逆ハの字状に開く	小皿 IV	7.8	2.2	3.7	直線的に立ち上がる 逆ハの字状に開く
					小皿 V	8.3	2.6	4.0	下部丸み 緩やかなS字状で外反

※法量は、平均値（復元値含む）

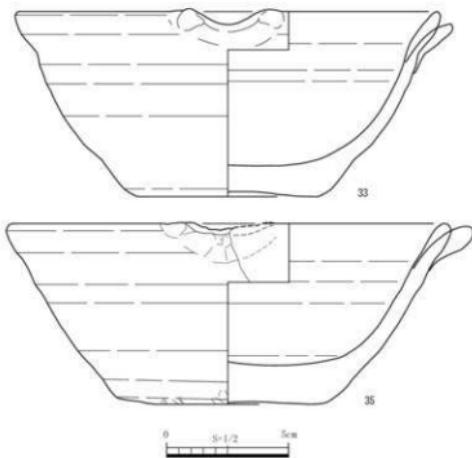


図34 分類(2)

表8 分類別平均法量と形状（片口鉢）

器種	法量(cm)			形状
	口径	器高	底径	
片口鉢1	16.9	5.0	7.4	丸みをもって立ち上がる 体部口縁の境に弱いナデ 高台なし
片口鉢2	15.8	4.9	7.5	直線的に立ち上がる 体部口縁の境に弱いナデ 高台なし

※法量は、平均値（復元値含む）

から口縁端部までは直線的かつ逆ハの字状に広がる。口縁端部は、端部内面と外側の交点がほぼ 90 度で、先端の形状がやや方形状の場合が多く、c・d 類で約 7 割を占める。内面底部と体部の境はナデによりわずかに凹み、中央は浅く窪む。高台は、潰れた逆三角形で、疊付きの枠殻痕は明瞭である。底部外側には、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

D 類は、平均で口径 15.4 cm、器高 5.5 cm、底径 7.4 cm 前後で、径高指数は、36.6 である。体部の下方は括れ、体部途中に丸みをもつ。器壁は比較的薄く、口縁部から端部にはナデが施され、直線的かつ逆ハの字状に広がる。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、内面と外側の交点が 90 度以下で、外側にやや膨らみをもっている場合が多い傾向があり、d・e 類で約 5 割を占める。内面底部と体部の境はナデによりわずかに凹み、中央は浅く窪む。高台は潰れた逆三角形で、疊付きの枠殻痕は明瞭である。底部外側には、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

小皿 小皿は、I～V 類に分類をした。

I 類は、平均で口径 7.4 cm、器高 2.1 cm、底径 3.9 cm 前後で、径高指数 28.4 である。下部にナデが施され、直線的に逆ハの字に開いている。内面底部と体部の境は、ナデによって凹み、口縁端部は、内面と外側の

部の境は緩やかな曲線で整形されている。口縁端部は丸い場合が多く、a・e 類で約 6 割を占める。高台は潰れた逆三角形で、疊付きの枠殻痕は明瞭である。底部外側には、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

B 類は、平均で口径 15.8 cm、器高 4.9 cm、底径 7.5 cm 前後、径高指数は、29.9 である。体部から口縁にかけて直線的に立ち上がり、器壁は比較的薄く、逆ハの字状に開く。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端がやや尖る傾向にある。内面底部と体部の境は、若干角張る。高台は潰れた逆三角形で、疊付きの枠殻痕は、明瞭である。底部外側には、糸切り痕・板目状圧痕が残る。

C 類は、平均で口径 15.5 cm、器高 5.4 cm、底径 7.1 cm 前後、径高指数は、34.6 である。体部は直線的に立ち上がり、器壁は比較的薄く、口縁部と口縁端部の間にナデが入る。それにより、体部と口縁との境が凹み、そこ

交点が90度以下で、外面にやや面をもっている場合が多く、b・c類で約8割を占める。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に指圧痕が残る。

II類は、平均で口径7.7cm、器高2.1cm、底径3.8cm前後で、径高指数は、27.0である。下方に丸みがあり、上方は緩やかに外反する。内面底部と体部の境は、ナデによってわずかに凹む。口縁端部は、内面と外面の交点が90度以下の場合が多く、b・c類で約8割を占める。先端は、やや丸みを帯びている。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に指圧痕が残る。

III類は、平均で口径8.0cm、器高2.2cm、底径3.9cm前後、径高指数は、27.0である。底部が下方向に突出している。また、体部外面の上方と下方には、やや強めのナデが施され、その部分が凹む。内面底部と体部の境は、緩やかな曲線で形成され、内面底部はやや窪む。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端がやや丸みを帯びる傾向にある。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に弱い指圧痕が残る。

IV類は、平均で口径7.8cm、器高2.2cm、底径3.7cm前後、径高指数は、28.3である。直線的に立ち上がり、逆ハの字状に開く。内面底部と体部の境は角張り、内面底部は平坦である。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端が丸みを帯びる傾向にある。底部外面には糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央には指圧痕が残る。

V類は、平均で口径8.0cm、器高2.6cm、底径4.0cm前後で、径高指数は、27.6である。底部が下方向に突出している。体部下方に丸みをもち、緩やかなS字状で外反する。内面底部と体部の境は、緩やかな曲線で形成され、内面底部はやや窪む。口縁端部は、各類型に大きな偏りはないが、先端がやや先に向かい細くなる傾向にある。底部外面には、糸切り痕・板目状圧痕が、底部内面中央に指圧痕が残る。

片口鉢 片口鉢は、極少量しか出土していないが、1・2類に分類した。

1類は、体部下方にナデがあり、丸みを帯びながら、口縁にやや強めのナデが入る。器壁・底部は、2類と比べて若干薄い。外面底部には、回転糸切り痕・板目状圧痕、内外面底部に明瞭に粗穂痕跡が残り、無台で平底状である。

2類は体部が直線的に立上がり、口縁部には弱いナデが入る。器壁・底部は、1類と比べて肥厚である。外面底部には、回転糸切り痕・板目状圧痕、内外面底部に明瞭に粗穂痕跡が残り、無台で平底状である。

今回出土した無台片口鉢は、類例が少なく、猿投窓のN N 302号窓跡から類似品が出土している。

3. 遺構・層位別分類

出土した遺物を遺構別（灰原は1～5）で分類を行った。（図42）

S Y 01の前庭部から出土した碗・小皿は、計8点である。分類別では、碗C類3点、D類1点、小皿

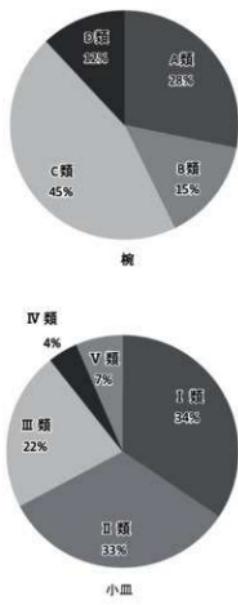


図35 分類別比率

形態分類	径高指数	平均値
碗A類	29.6~33.3	31.3
碗B類	29.1~31.3	29.9
碗C類	28.0~40.5	34.6
碗D類	31.7~39.3	36.6

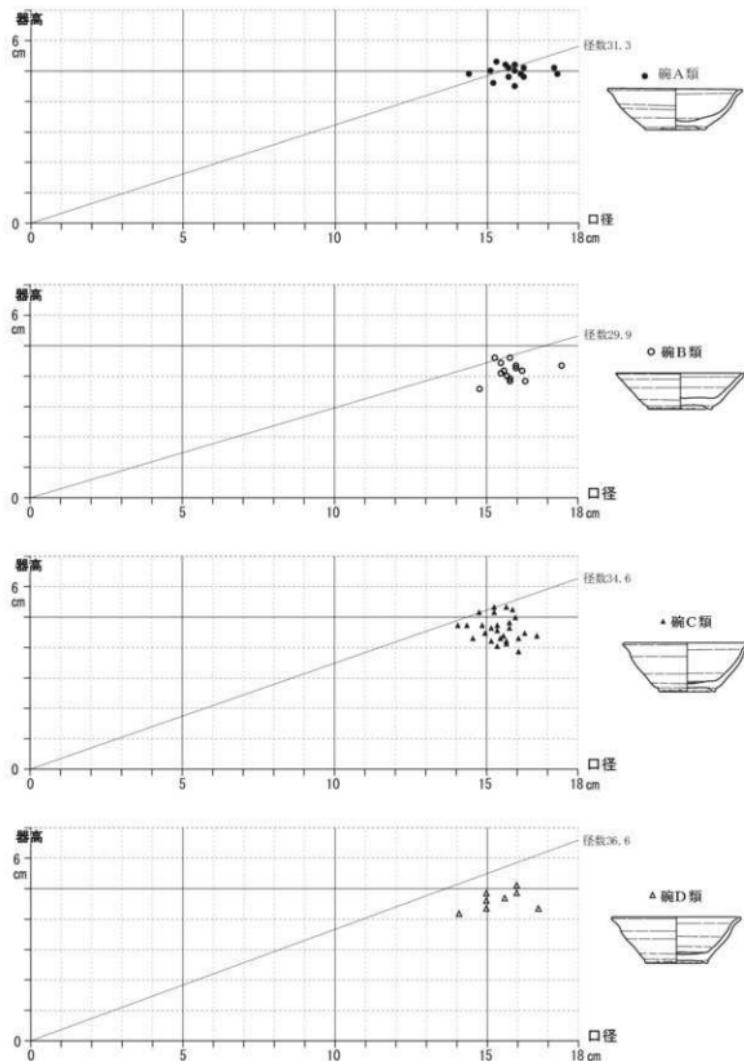


図 36 径高指数グラフ (1)

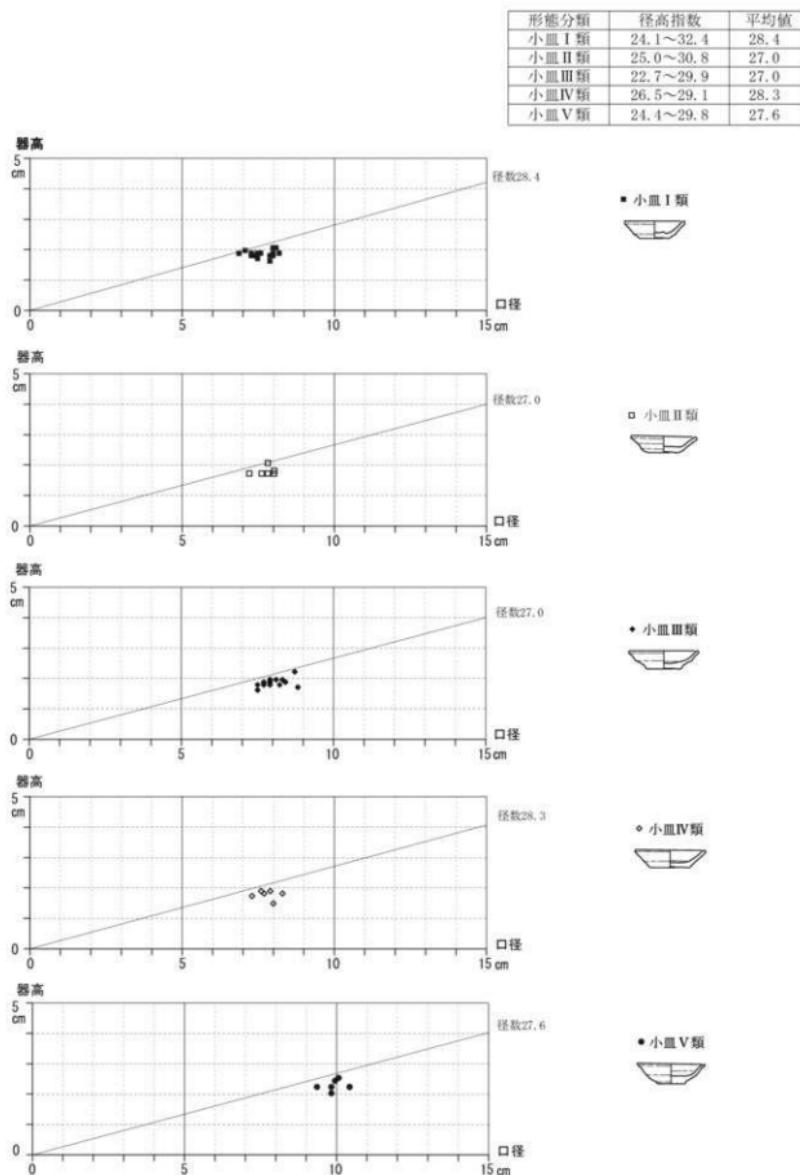


図 37 径高指数グラフ (2)

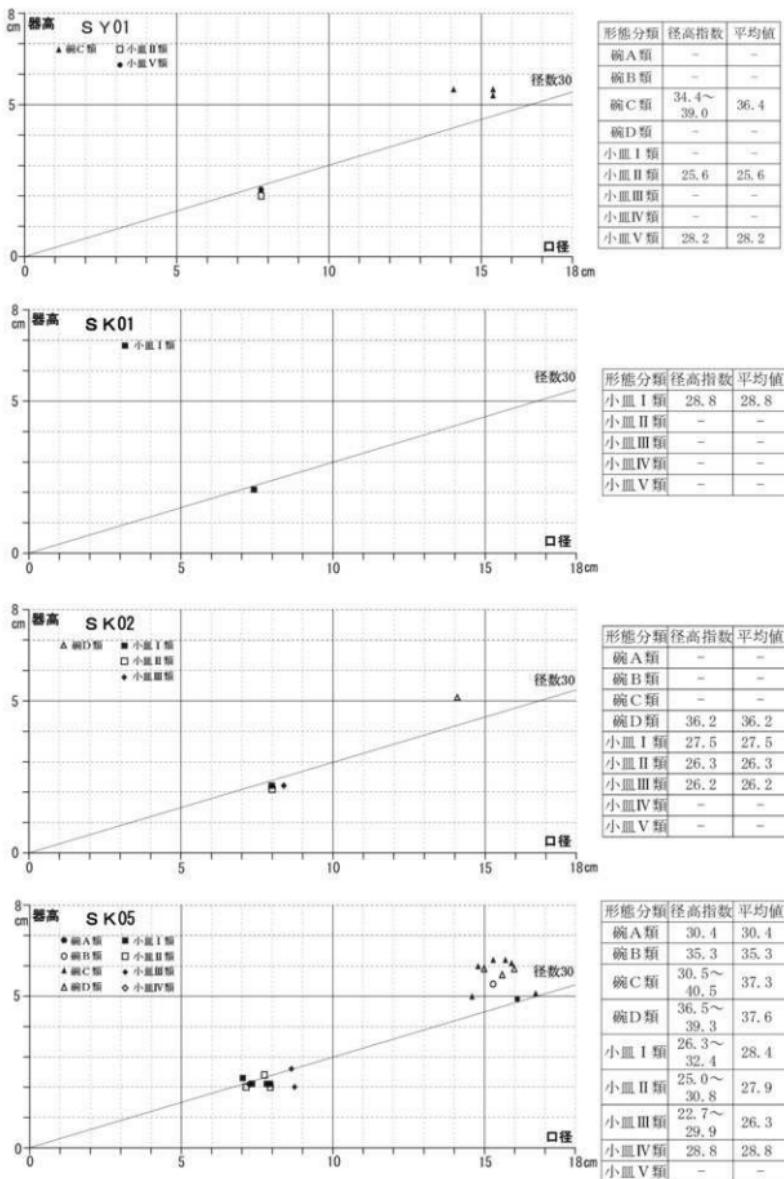


図38 遺構別径高指数グラフ（1）

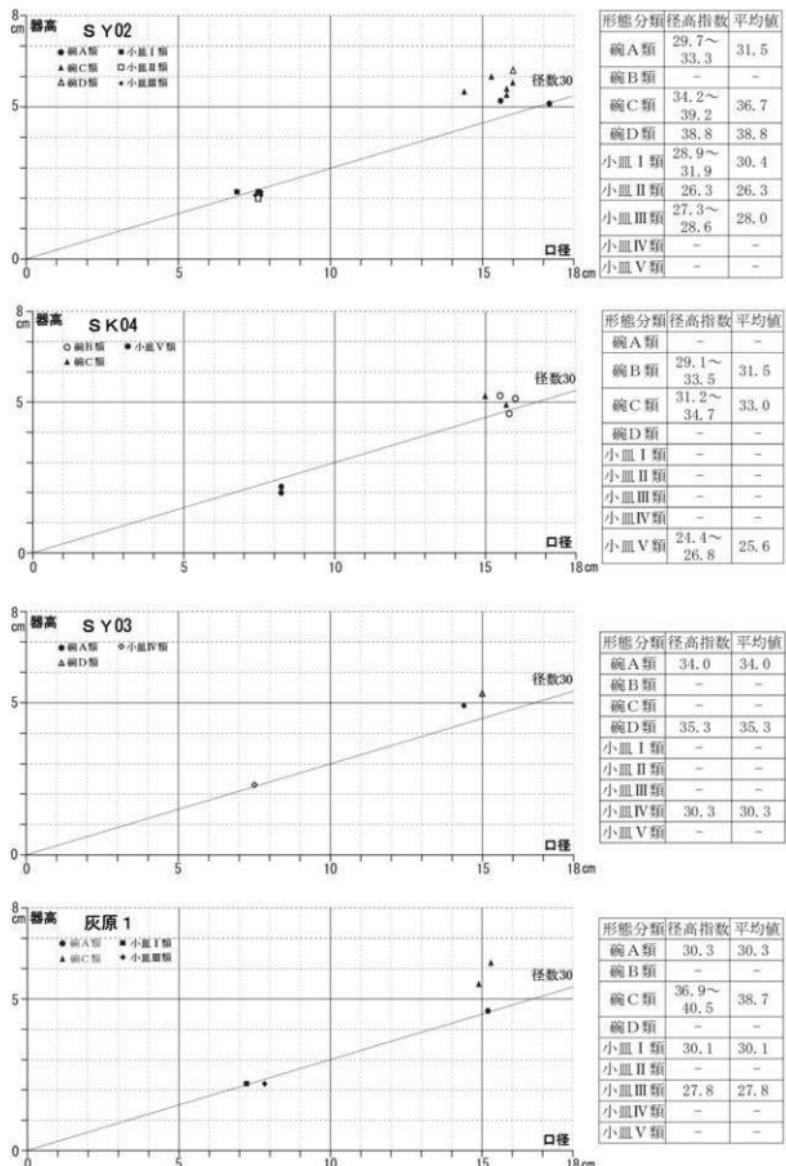


図39 造構別径高指数グラフ(2)

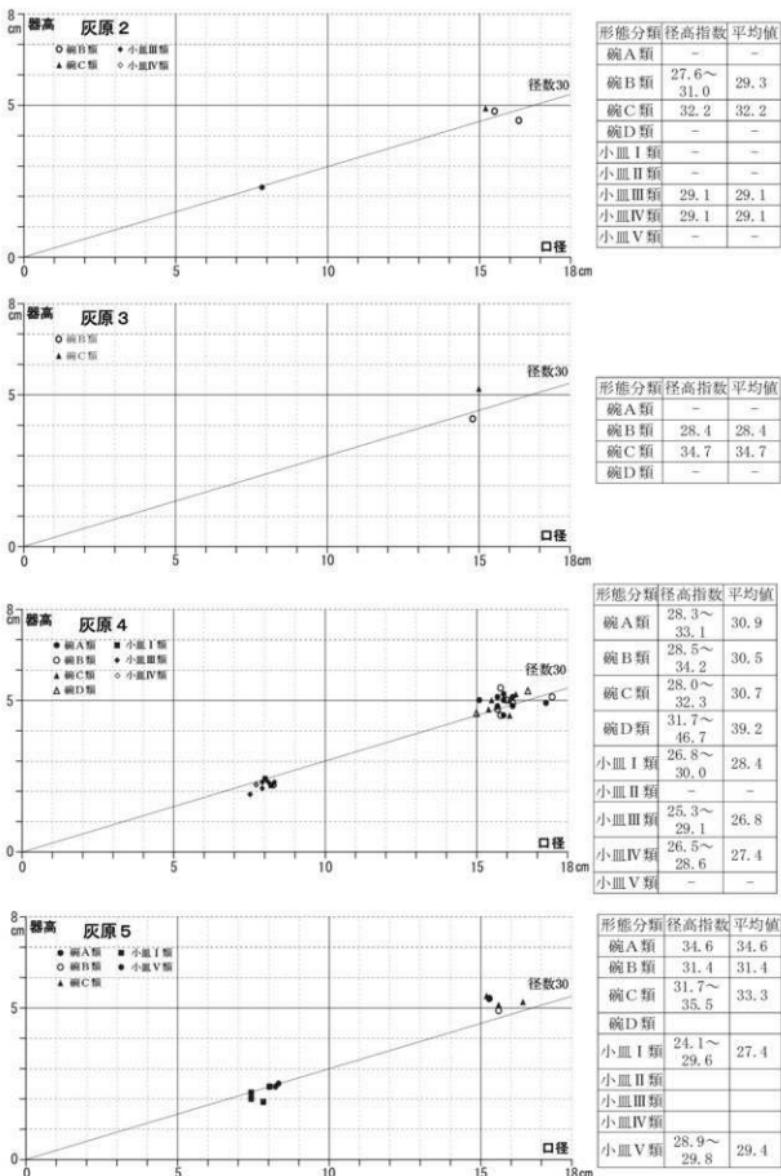


図 40 遺構別径高指数グラフ (3)

I類2点、II類1点、V類1点に分けられる。

S K 01 から出土した遺物は、小皿I類の1点である。

S K 02 から出土した碗・小皿は、計4点である。分類別では、碗D類1点、小皿I・II・III類が各1点に分けられる。

S K 03 から碗・小皿は出土しなかった。

S K 05 から出土した碗・小皿・片口鉢は、計118点である。分類別では、碗A類6点、B類3点、C類51点、D類9点、小皿I類17点、II類26点、III類3点、IV類1点、片口鉢1類2点、2類2点となる。

S K 04 から出土した碗・小皿は、計17点である。分類別では、碗A類6点、B類4点、C類3点、D類1点、小皿I類1点、V類2点に分けられる。

S Y 02 から出土した碗・小皿は、計46点である。分類別では、碗A類9点、B類4点、C類5点、D類8点、小皿I類4点、II類3点、III類3点に分けられる。

S Y 03 から出土した碗・小皿は、計5点である。分類別では、碗A類2点、B類1点、D類1点、小皿IV類1点に分けられる。

S K 06 から出土した遺物は、小皿II類1点である。

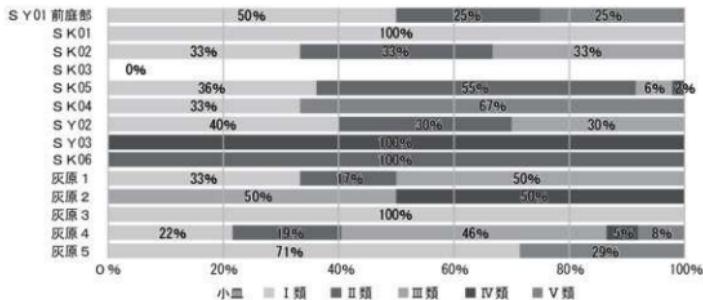
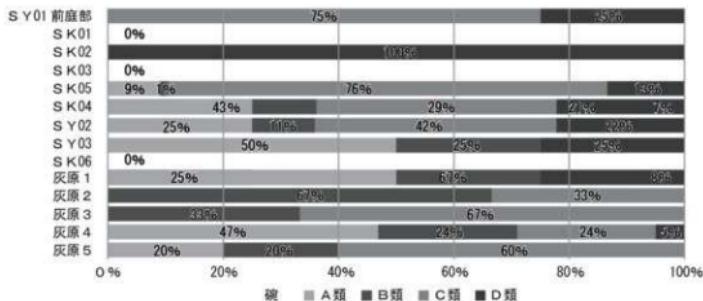


図41 遺構別器形分類

灰原1から出土した碗・小皿は、計17点である。分類別では、碗A類3点、C類8点、D類1点、小皿I類2点、II類1点、III類2点に分けられる。

灰原2から出土した碗・小皿は、計5点である。分類別は、碗B類2点、C類1点、小皿がIII類1点、IV類1点に分けられる。

灰原3から出土した碗・小皿は、計4点である。分類別では、B類1点、C類2点、小皿I類1点に分けられる。

灰原4から出土した碗・小皿は、計120点である。分類別では、碗A類39点、B類20点、C類20点、D類4点、小皿がI類8点、II類7点、III類17点、IV類2点、V類3点に分けられる。

灰原5から出土した碗・小皿は、計14点である。分類別では、碗A類1点、B類1点、C類3点、D類2点、小皿I類5点、V類2点に分けられる。

第2節 編年の位置付け

今回の調査で、出土した山茶碗（碗・小皿・片口鉢）の分類結果とともに、齊藤編年（猿投窯）を中心に、藤澤編年（瀬戸・藤岡窯）・中野編年（常滑窯）と対応させながら、川池西古窯の山茶碗を照合し、本窯の操業時期を考えてみたい。

小皿 まず、小皿について検討すると、川池西古窯から出土した小皿の特徴は、底部に突出がある小皿III・V類と、突出がないI・II・IV類に分けられることである。III・V類に特徴的な底部の突出器形を、各編年で照合してみると、齊藤編年では第VII期第2型式新段階から第VII期第3型式古段階、藤澤編年では第5型式古段階、中野編年では2・3型式に相当する。しかし、今回の調査では出土した山茶碗の中に小碗は含まれていないことから、小皿は齊藤編年第VII期第2型式新段階、中野編年2型式以前には相当しない。

したがって、川池西古窯から出土した小皿における時期幅の上限は、齊藤編年第VII期第3型式古段階、藤澤編年第5型式古段階、中野編年3型式とした。

碗 次に碗について検討すると、川池西古窯から出土した碗の特徴は、体部下方に丸みをもつA類と体部が直線的なB・C・D類に分けられ、その両方が同一遺構、同一層位から出土することである。これは、器形が変化する移行期の現象と考えられる。このような現象が認められるのは、齊藤編年第VII期第3型式古段階～第VII期第1型式、藤澤編年第5型式古段階～第6型式、中野編年2～5型式に限られる。ただし、齊藤編年第VII期第1型式、藤澤編年第6型式、中野編年5型式になると、器形的な傾向としては口径が狭く、器高が高くなる。また、内面の底部と体部の境にナデによる明瞭な凹みや穂が認められるようになり、口縁端部は玉縁状となるものが増加する。しかし、今回の調査で出土した碗には、口縁が玉縁状になるものではなく、内面の底部と体部の境に凹みが認められた個体は数点にとどまる。したがって、川池西古窯から出土した碗における時期幅の下限は、齊藤編年第VII期第3型式新段階、藤澤編年第5型式新段階、中野編年4型式とした。

以上のことから、川池西古窯における出土した遺物からみる窯の操業時期は、確実なところで、齊藤編年第VII期第3型式古・新段階、藤澤編年第5型式古・新段階、中野編年3・4型式、12世紀後葉から13世紀初頭（平安時代末～鎌倉時代初頭）と結論付けた。

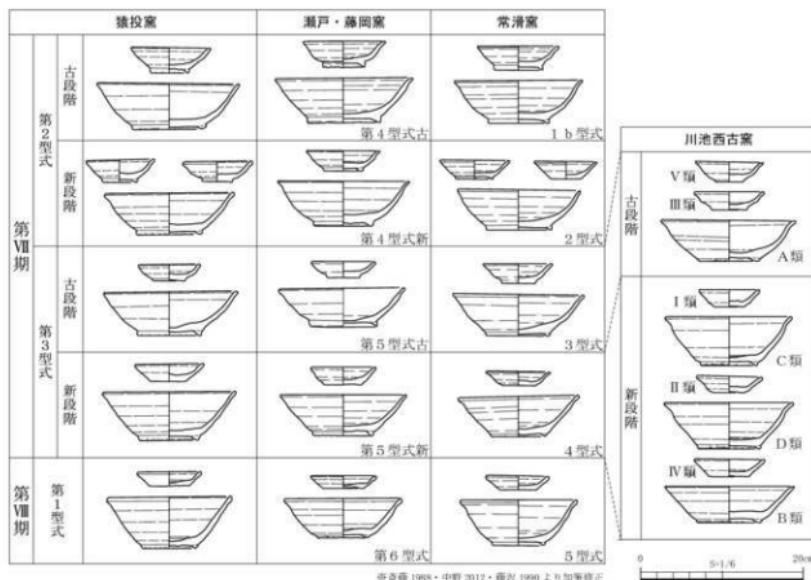


図 42 編年対応図

古・新段階の設定 前述のとおり、今回出土した山茶碗の器形的な特徴として、小皿は底部突出（III・V類）、碗については体部下方の丸み（A類）をあげた。小皿の底部突出は小皿高台部から型的に連なり、椀体部下方の丸みは初期山茶碗に連なる器形であり、古い要素といえる。残りの類型が持つ特徴、小皿の底部突出無し（I・II・IV類）と、碗の下方に丸みを持たない直線的な体部（B・C・D類）は、前述の川池西古窓の年代観以降に認められる新しい要素である。以上から、碗A類と小皿III・V類を古段階、碗B・C・D類と小皿I・II・IV類を新段階と仮定する。

各遺構・層位毎に両段階の碗と小皿を比較すると、出土量の少ない遺構・層位を除き、新段階と古段階の比率は碗と小皿で近似する（図43）。したがって、両段階の碗と小皿は、各々セットで製作されていた可能性が高い。

各遺構の内、SK 04はSY 01直下に位置し、SY 01機能時には作業場としての機能を失っていた可能性が高い。また、融着資料等の不良品が集中して堆積しており、その位置関係からSY 01の不良品を捨てる場として真っ先に利用されることが想定できる。さらに、この上にSY 01の灰原が直接堆積していること、SY 02等他の窯体焚口から標高が高く離れた位置にあることからも、SK 04の遺物は、SY 01初回もしくはごく初期の操業時の物である可能性が高い。

これに対しSK 05はSY 01の築窯排土で整地され、SY 01前庭部と底面・平面的が連なることから、SY 01前庭部の一部として機能していた可能性が高い。SK 05にも、融着資料等の不良品が集中して堆

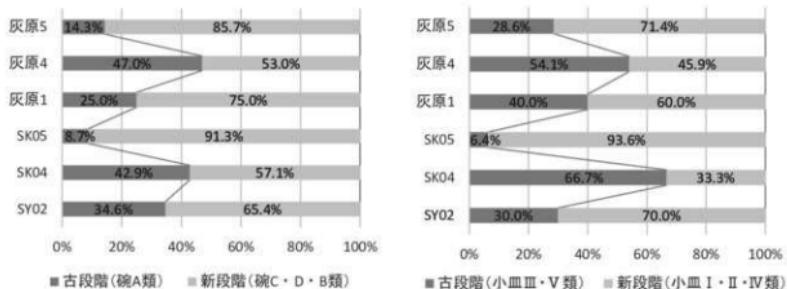


図43 遺構別古段階・新段階比率

積しており、その上には、厚い流入土が直接堆積していた。不良品がうず高く積まれれば、作業場やヤードとしての機能は果たし得ない。したがってこれらの遺物は、前部としての機能が喪失する最終操業時の物である可能性が高い。

この2遺構の遺物を比較すると、古段階の碗・小皿とともにSK04では約半数を占めるのに対し、SK05では6~8%と少ない。したがって、先に形式学的な方法により仮定した古・新段階の先後関係が、層位学的にも証明できる可能性は高い。以上から、碗A類と小皿III・V類を川池西古窯古段階（齊藤編年第VII期第3型式古段階、藤澤編年第5型式古段階、中野編年3型式併行）、碗B・C・D類と小皿I・II・IV類を川池西古窯新段階（齊藤編年第VII期第3型式新段階、藤澤編年第5型式新段階、中野編年4型式併行）として設定する。

第3節 遺構

本調査区では、窯体が3基（SY01~03）、作業場（SK04）、ロクロピット（SP01）、灰原1を検出した。過去の類例や遺構の位置関係などから当時の状況を復元したい。

工房と窯体 ロクロピットとは、ロクロを設置するための施設であり、本調査区で検出されたSP01は、

ロクロ軸痕跡が中央に認められ、掘り方下半には、ロクロ軸固定のためと考える粘土ブロックが充填されていた（図44）。このことから、「ロクロピット」と判断した。また、このロクロピット（SP01）と接しているSK04が存在する。斜面を掘削して平坦面が形成されていた。その形状とSP01と接することから、作業場と考えられる。両遺構が立地する斜面地の土地利用方法としては、山茶碗を生産する窯業関連に限られる。したがって、SP01とSK04は同時期に一体のものとして機能していた山茶碗製作工房と判断した。

東海地方の山茶窯では、窯1基につき一時期に稼働していたロクロピットは1基と考えられている（藤澤2008）。

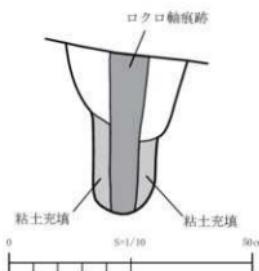


図44 ロクロピット模式図

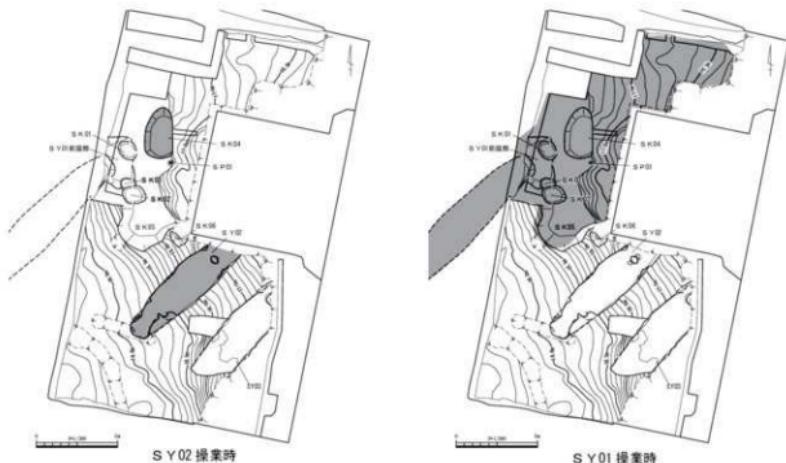


図 45 時期別遺構変遷

では、上記工房に付属するロクロピット（S P 01）は、いずれの窯体で焼成する製品を製作するための施設であろうか。工房の上には S Y 01 由來の灰原が堆積しているため、同時に機能していたとは考えにくい。また、東海地方の山茶碗窯では、標高の低い位置から高い位置へと順に構築されてゆく傾向が指摘されており（藤澤 2008）、S Y 01 の隣、S Y 02 とは反対の北西側に未知の窯があった可能性がある。しかし、S Y 01 の上には、直接厚い流入土（図 7）が堆積し、灰原が土壤化・表土化した様子も観察できなかった。このような堆積と、操業後半には燃料材が枯渇した可能性を指摘する自然科学分析（第 4 章）の結果から、S Y 01 操業開始時、周囲に森林が広がっており、燃料材を伐採・使用していたと考えられるが、操業終了時には、その森林からは樹木がなくなり、保水力を失った山肌から土砂が流入した可能性が高い。よって、燃料材となる森林が回復するまで、この地では窯業生産は困難だったと考えられる。したがって、S Y 01 以降の未知の窯の存在、またそれに付帯する工房である可能性も低い。残る S Y 02 と 03 では、工房との距離は S Y 02 の方がより近い。以上から、工房（S P 01・S K 04）が付帯する窯体は、S Y 02 の可能性が比較的高いと推定した（図 45）。

構築順 これまでの検討をもとに、当時の状況を時系列順に復元したい。上述したように S Y 01 よりも工房、また工房が付帯する S Y 02 も S Y 01 より古い。さらに出土遺物から見ても、S Y 02 出土の碗と小皿は川池西古窯古段階のものが 30 ~ 34% と約 3 割を占め、S Y 01 最終操業時の S K 05 よりは、初期操業時の S K 04 の比率に近い（図 43）。先に指摘したように S Y 02 出土遺物には、天井崩落後に流入した新しい遺物が含まれることを考慮すれば、S Y 02 の比率は S K 04 により近かったと想定できる。

S Y 03 に関しては、出土遺物量が少なく、その多くが流れ込みと判断している。したがって、遺物からは時期を類推することが困難である。ただし、窯体の規模・形状・主軸方向等が S Y 02 と酷似しており、同じ工人により連続して構築された可能性が極めて高い。同じ時期の窯が隣接して構築される場合、標高

表9 工房と窯体類例

No.	窯跡名	時期（出土遺物）	窯体の数	主な検出遺構	工房跡検出場所	類型	備考
a 広久手 12号	山茶碗第3型式	1	工房跡（クロロビット1）・土坑・ピット	窯体の左側 尾根付近	A	窯体の位置は推定。	
b 広久手 13・14号	山茶碗第6・7型式 古瀬戸前II期	2	工房跡？（平坦面・粘土盛り）	13号窯の前庭部左 (14号との間)	A		
c 細屋田A	山茶碗第5・6・8型式 古瀬戸前II期	5					
d 太子A	山茶碗第7型式	1	工房跡（クロロビット1・溝・粘土盛り）	窯体の右側	A		
e 埴草B	山茶碗第7・8型式	2	工房跡（クロロビット1・溝・粘土盛り）・ピット群	1号窯焚口左側約 5mの地点・尾根上	A	尾根上のピット群は工 房跡かどうか不明	
f 広久手 7・17号	山茶碗第7・8型式	2	工房跡（クロロビット1・建物跡）・土坑	17号窯の東側尾根 上約20mの地点	A		
g 鳳山C	山茶碗第7・8型式	2	工房跡？（クロロビット？）・ 土坑・溝・ピット	SY01前庭部・SY01 焚口～施成室の左側	A		
h 小田妻 4・5・ 7・8号	山茶碗第6～8型式 古瀬戸前Ib期	4	工房跡（クロロビット3・粘土 盛り・炭化物）	5・7・8号窯の 右側	A		
i 平木E	山茶碗第7・8型式	2	工房跡？（平坦面）	1・2号窯前庭部 左側	A	2号窯の平坦面には焼 土面がみられる。なん らかの工房跡か。	
j 下平田C	山茶碗第7・8型式	2	工房跡（クロロビット2・建物 跡・土坑・溝）	1・2号窯前庭部	A		
k 佐井田	山茶碗第7・8型式 古瀬戸中I・II期	1	工房跡（クロロビット2・柱 穴・焼土面）・土坑	窯体左上の尾根上	A	焼道部上方に焼台群。 別の窯体が存在する可 能性あり。	
l 中洞	山茶碗第8型式 古瀬戸中I期	1	工房跡？（クロロビット 2？）・土坑	窯体の左右	A	別の窯体が存在する可 能性あり。	
m 五葉	山茶碗第8型式 古瀬戸中I・II期	3	工房跡（クロロビット2・建物 跡・粘土盛り・焼土面）・改 造窯（粘土盛り・焼土面・炭 化物）・炭化物土坑	1号窯の左側	B		
n 西山路I	山茶碗第8・9型式 古瀬戸中II期	3	窯体改造施設		B		
o 曉 3～5号	山茶碗第8・9型式 古瀬戸中IV期	3	工房跡（クロロビット1）・乾 燥場遺構（焼土面・炭化物 ・溝）・ピット・土坑・改造窯 (焼土面)	3号窯前庭部の左 側	B		
p 巡回E	山茶碗第9型式 古瀬戸後I期	2	工房跡（クロロビット1）・乾 燥場遺構（焼土面・炭化物 ・溝）・土坑	SY01前庭部左 側	C	クロロビットは2号窯 に伴う。	
q 小長曾	古瀬戸後II期	1	工房跡（クロロビット3・焼土 面・粘土盛り・溝）・乾燥場 遺構3（焼土面・粘土盛り・炭 化物）	窯体の左右	C	焼道部上方に 焼台群。	
r 鶴	古瀬戸中IV期 ～後III期	1	工房跡（クロロビット1？）・ 乾燥場遺構（粘土盛り・焼土 面・炭化物）・作業場（粘土盛 り・焼土面・炭化物）	窯体の左側斜面	C		

の低い位置から高い位置へと順に構築される例が多いことから、SY 03はSY 02よりも古い可能性が高い。以上から、今回見つかった3基の窯体の構築順をSY 03→SY 02（工房付帯）→SY 01と推定する。

工房と窯体類例 山茶碗クロロビットを持つ工房の例は、本遺跡を内包する猿投窯（中野2012）では類例に乏しい。類例の豊富な瀬戸窯と比較すると（表9）、窯体・前庭部・灰原のほかに工房のみが付属するA類型（河合2012）と一致する。このA類型の時期は、藤澤編年第7・8型式までとされており、今回の調査で出土した遺物の年代観（藤澤編年第5型式）とも齟齬はない。これまで、山茶碗工人は藤澤・瀬戸・猿投といった窯業地の枠を超えて活動していたことが指摘されており（藤澤2008）、今回の調査で見つかった工房と窯体からも、同様の指摘ができる。

本調査では、中世猿投窯では初のクロロビットを伴う工房を確認できた。瀬戸窯との共通性から、猿

投窯・瀬戸窯における山茶碗工人の活動の一端を指摘できた。尾張丘陵に位置し、燃料の材料となる樹木、製品の胎土となる粘土の確保が可能であり、当時最大の物資運搬手段であったであろう河川による水運が容易にできる立地であるため、大府市域の丘陵地帯で、平安時代から鎌倉時代にかけて数多くの窯が構築されてきた。今回の川池西古窯の調査は、他の窯跡とともに窯業生産が活発だった時代に生き、窯業地の枠を超えて活躍した窯工人が、この地においても活躍したことを示す結果となった。

参考文献

- 河合君近 2008 「中世瀬戸窯の遺跡構造」『瀬戸窯 瀬戸市重要遺跡試掘調査報告』
財団法人瀬戸市文化振興財團
- 河合君近 2012 「瀬戸窯における工房の事例と検討」『考古学フォーラム 21』
- 斎藤孝正 1988 「中世猿投窯の研究 - 編年に関する一考察 -」『研究論集C I 史学 34』 名古屋大学文学部
- 中野晴久 2012 「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系 愛知県史編さん委員会
- 中野晴久 2016 「知多半島北部の山茶碗窯」『鴨池東古窯 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
ナカシャクリエイティブ株式会社
- 藤澤良祐 1990 「山茶碗と中世集落」『尾呂』 瀬戸市教育委員会
- 藤澤良祐 2007 「総論」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系愛知県史編さん委員会
- 藤澤良祐 2008 「山茶碗の生産体制」『中世瀬戸窯の研究』高志書院

表 10 遺物観察表 (1)

遺物 番号	グリッド	遺構	遺構内 出土 地図	解説	詳細	分類	状態(%)				成形・調理・特徴			出土 (台数)	備考
							硬度	表面	近理	遠理	保存率	表面	内面		
1	00-6	0301	横台 基盤層	例	C	d	(14.1)	3.5	6.5	6.9	0.3/12	×	×	河口魚 2.3% 底泥	船頭直立 底泥
2	00-	3301	横台 基盤層	例	C	d	(13.4)	3.3	6.8	7.5	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	0.01kg 船頭直立 底泥
3	00-	3301	横台 基盤層	例	C	d	(13.0)	3.5	6.5	6.9	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥
4	00-	3301	横台 基盤層	小頭	B	b	7.9	2.9	3.6	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥
5	00-	3301	横台 基盤層	小頭	V	b	7.8	2.2	3.2	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥
6	00-	3301	横台 基盤層	頭部	-	-	最高頭 12.1	最高頭 12.0	最高頭 5.6	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船上に船頭直立 底泥
7	00-	5801	小頭	I	b	7.3	2.1	3.6	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
8	00-	5802	例	D	d	14.2	3.1	6.6	6.9	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
9	00-	5802	小頭	I	a	8.9	2.2	4.1	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
10	00-	5802	小頭	B	b	8.9	2.1	3.9	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
11	00-	5802	小頭	B	c	8.4	2.2	4.0	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
12	00-	3805	例	A	v	(16.1)	4.9	7.0	7.6	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
13	00-	3805	例	B	b	(15.2)	5.1	6.8	7.4	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
14	00-	3805	例	C	c	14.6	5.0	6.7	7.3	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
15	00-	3805	例	C	d	15.9	6.1	7.0	7.8	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
16	00-	3805	例	C	d	16.7	5.1	7.2	7.3	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
17	00	調査区(荷物 トレーラー T8005)	例	C	d	(14.8)	6.0	(6.6)	7.7	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
18	00-	5805	例	C	v	15.7	6.2	6.9	7.1	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
19	00-	5805	例	C	v	15.3	6.2	7.7	8.0	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
20	00-	5805	例	D	a	(15.6)	5.7	7.2	7.9	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
21	00-	5805	例	D	a	16.0	5.9	6.8	7.2	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
22	00-	5805	例	D	a	15.0	5.9	7.6	7.8	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
23	00-	3805	小頭	I	b	7.1	2.3	3.5	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
24	00-	3805	小頭	I	v	8.0	2.1	4.2	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
25	00-	5805	小頭	I	v	7.4	2.1	4.1	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
26	00-	5805	小頭	I	v	7.9	2.1	4.1	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
27	00-	5805	小頭	B	b	8.0	2.0	4.5	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
28	00-	5805	小頭	C	v	7.2	2.0	3.8	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
29	00-	3805	小頭	B	v	7.8	2.4	4.4	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
30	00-	3805	小頭	B	a	8.7	2.6	3.4	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
31	00-	3805	小頭	B	c	8.8	2.0	4.2	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
32	00-	3805	小頭	B	v	7.9	2.1	4.2	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
33	00-	3805	例	I	v	(17.2)	7.6	7.6	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
34	00-	3805	例	I	v	17.6	7.6	7.8	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
35	00-	3805	例	I	v	17.7	7.4	6.7	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
36	00-	3805	例	I	v	17.7	7.4	6.7	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
37	00-	3805	例	I	v	18.2	6.9	6.4	-	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
38	00-	3805	例	I	v	18.7	6.7	6.9	-	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
39	00-	3805	例	I	v	18.6	5.2	6.9	7.4	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
40	00-	3805	例	I	v	18.8	5.4	7.4	7.6	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	
41	00-	3805	例	I	v	18.8	5.6	7.8	8.0	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
42	00-	3805	例	I	v	18.8	5.6	7.8	8.0	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
43	00-	3805	例	I	v	18.9	5.6	7.7	7.8	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
44	00-	3805	例	I	v	18.9	5.6	7.0	7.0	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
45	00-	3805	例	I	v	18.9	6.2	7.3	7.8	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
46	00-	3805	例	I	v	18.9	6.2	7.3	7.8	0.3/12	×	×	ICD魚 2.1%	船頭直立 底泥	
47	00-	3805	例	I	v	18.9	6.2	7.3	7.8	0.3/12	×	×	ICD魚 0.08%	船頭直立 底泥	

表 11 遺物觀察表 (2)

編 號	グリッド	遺構	遺構 内 地 上 部 位 置	層位	部類	分類	目録 番 号	測量 (cm)			成形・調整・施用			地 上 (色調)	備考	
								直 理	高 度	理 程	高 台理	理 程	直 理			
48	II	3902	堆	小黑	I	a	6.9	0.2	3.3	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
49	II	3902	堆	小黑	II	b	7.6	2.0	2.6	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	内輪輪底
50	III + 7	3902	堆	小黑	III	a	7.7	2.1	2.6	-	0.16/12 直理	0.66/12 直理	0.73/12 直理	0.20/12	灰灰	灰灰 地板底
51	II	3902	堆	小黑	IV	a	12.35	2.1	2.6	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
52	II	3902	堆	小黑	IV	a	(7.7)	2.2	2.6	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黑灰
53	III + 7	3902	堆	鐵件	-	-	堆存量 (11.21)	最大幅 (12.6)	最大厚 (6.0)	-	堆存量	堆存量	堆存量	-	鐵件	-
54	II	3904	堆	B	b	(16.67)	5.1	7.4	7.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
55	II	3904	堆	B	c	(16.67)	5.0	6.6	6.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	灰灰 地板底	
56	II	3904	堆	B	c	(16.67)	5.2	7.4	7.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	灰灰 地板底	
57	II	3904	堆	C	a	(16.67)	5.2	7.4	7.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	灰灰 地板底	
58	II	3904	堆	C	b	(16.67)	4.9	7.2	7.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	灰灰 地板底	
59	II	3904	堆	V	c	8.2	2.2	6.1	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
60	II	3904	堆	V	c	8.2	2.0	6.6	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
61	F7	3905	杏	A	a	(14.47)	4.9	6.4	6.9	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
62	F7	3905	杏	B	a	(16.45)	5.3	6.6	6.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
63	F7	3905	杏	小黑	IV	a	(17.45)	2.3	15.40	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
64	II	3906	蜜漬菜	-	-	(2.42)	-	-	-	蜜漬菜	蜜漬菜	蜜漬菜	-	蜜漬菜	蜜漬菜	
65	F1	沉屋 1	II	A	a	(16.40)	4.6	6.9	7.4	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
66	II	沉屋 1	II	C	a	(15.30)	6.2	10.57	9.9	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
67	II	沉屋 1	II	C	a	(14.90)	5.5	6.9	6.7	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
68	II	沉屋 1	II	小黑	I	b	(7.31)	2.2	6.1	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
69	F1	沉屋 1	II	小黑	II	a	7.9	2.2	4.2	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
70	F1	沉屋 2	II	II	B	a	(16.30)	4.8	6.8	7.8	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
71	II	沉屋 2	II	II	B	a	(16.30)	4.3	6.6	6.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
72	II	沉屋 2	II	II	C	a	(15.25)	4.9	6.9	9.3	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
73	F1	沉屋 2	II	小黑	II	c	7.8	2.3	6.6	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
74	II	沉屋 2	II	小黑	IV	b	7.9	2.2	3.8	-	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
75	F1	沉屋 3	II	II	B	a	(14.80)	4.2	7.9	9.4	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
76	F1	沉屋 3	II	II	C	a	(15.40)	5.2	6.4	6.4	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰
77	II	沉屋 4	II	A	a	15.7	5.1	7.6	8.1	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
78	II	沉屋 4	II	A	a	(16.7)	4.8	7.4	7.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
79	F1	沉屋 4	II	A	a	16.2	5.1	7.2	5.8	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
80	F1	沉屋 4	II	A	b	16.8	5.8	7.4	7.4	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
81	F1	沉屋 4	II	A	a	(15.90)	5.2	7.4	7.4	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
82	F1	沉屋 4	II	A	b	(15.30)	5.8	6.8	9.0	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
83	F1	沉屋 4	II	A	a	(16.90)	4.5	6.6	6.6	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
84	F1	沉屋 4	II	A	a	(15.3)	5.0	7.3	8.0	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
85	F1	沉屋 4	II	A	a	16.7	4.8	7.2	7.9	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
86	F1	沉屋 4	II	B	a	(16.80)	5.1	7.8	6.0	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
87	F1	沉屋 4	II	B	a	16.2	4.9	7.0	7.9	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
88	F1	沉屋 4	II	B	b	15.7	4.7	8.2	8.4	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
89	F1	沉屋 4	II	B	a	16.9	5.0	6.8	8.8	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
90	F1	沉屋 4	II	B	a	17.1	5.1	7.6	8.3	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
91	F1	沉屋 4	II	B	c	(15.3)	4.5	7.6	8.1	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
92	F1	沉屋 4	II	C	b	(16.1)	5.0	6.3	9.1	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
93	F1	沉屋 4	II	C	a	(16.50)	5.0	7.6	7.7	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	
94	F1	沉屋 4	II	C	a	(15.7)	4.8	7.8	8.7	0.17/12 直理	0.67/12 直理	0.74/12 直理	0.20/12	灰灰	0.023 黒灰	

表 12 遺物観察表(3)

遺物 番号	グリッド	遺構	室内・屋外 区分	部位	分類	口縁 端面	直量(cm)				弧量(cm)				船上 (合調) 内面	備考
							直径	高さ	幅	高さ	直徑	高さ	幅	高さ		
95	E1	底面	底面	桶	C	x	(13.0)	4.7	6.6	2.0	(11.1)/12	4.7±0.7	6.6±0.6	2.0±0.2	底面	船底面
96	E1	底面	底面	桶	C	x	(16.2)	5.7	7.3	8.4	(11.1)/12	5.7±0.7	7.3±0.6	8.4±0.2	底面	船底面
97	F1	底面	底面	桶	C	x	(16.1)	4.5	8.0	8.7	(11.1)/12	4.5±0.7	8.0±0.6	8.7±0.2	底面	船底面
98	F1	底面	底面	桶	D	x	(15.0)	7.0	7.0	2.0	(11.1)/12	7.0±0.7	7.0±0.6	2.0±0.2	底面	船底面
99	F1	底面	底面	桶	D	x	(16.7)	5.3	8.2	8.8	(11.1)/12	5.3±0.7	8.2±0.6	8.8±0.2	底面	船底面
100	F1	底面	底面	桶	I	x	8.0	2.4	3.3	—	(11.1)/12	2.4±0.7	3.3±0.6	—	底面	船底面
101	F1	底面	底面	桶	I	x	8.2	2.2	4.9	—	(11.1)/12	2.2±0.7	4.9±0.6	—	底面	船底面
102	F1	底面	底面	桶	III	x	7.5	1.9	3.6	—	(11.1)/12	1.9±0.7	3.6±0.6	—	底面	船底面
103	F1	底面	底面	桶	III	a	(9.3)	2.3	(4.0)	—	(11.1)/12	2.3±0.7	(4.0)±0.6	—	底面	船底面
104	F1	底面	底面	桶	III	b	7.9	2.1	3.7	—	(11.1)/12	2.1±0.7	3.7±0.6	—	底面	船底面
105	F1	底面	底面	桶	III	b	8.1	2.3	3.7	—	(11.1)/12	2.3±0.7	3.7±0.6	—	底面	船底面
106	F1	底面	底面	桶	V	x	(7.0)	2.2	3.9	—	(11.1)/12	2.2±0.7	3.9±0.6	—	底面	船底面
107	F1	底面	底面	桶	IV	a	8.3	2.2	3.6	—	(11.1)/12	2.2±0.7	3.6±0.6	—	底面	船底面
108	F1	底面	底面	桶	IV	d	7.7	2.2	3.7	—	(11.1)/12	2.2±0.7	3.7±0.6	—	底面	船底面
109	E1	底面	底面	桶	—	—	最高部 (5.3)	最高部 (2.0)	最高部 (3.0)	—	—	—	—	—	上面に斜面有	
110	E1	底面	底面	桶	—	—	最高部 (5.2)	最高部 (2.0)	最高部 (3.0)	—	—	—	—	—	底面	
111	E1	底面	底面	桶	A	x	(15.3)	5.3	(7.4)	(0.6)	(11.1)/12	5.3±0.7	(7.4)±0.6	(0.6)±0.2	底面	船底面
112	E1	底面	底面	桶	B	d	(15.6)	4.9	(7.6)	(0.6)	(11.1)/12	4.9±0.7	(7.6)±0.6	(0.6)±0.2	底面	船底面
113	E1	底面	底面	桶	C	b	(15.6)	3.1	6.6	7.4	(11.1)/12	3.1±0.7	6.6±0.6	7.4±0.2	底面	船底面
114	E1	底面	底面	桶	C	x	(15.2)	5.1	6.8	7.3	(11.1)/12	5.1±0.7	6.8±0.6	7.3±0.2	底面	船底面
115	E1	底面	底面	桶	C	x	(16.4)	3.2	(8.4)	(0.2)	(11.1)/12	3.2±0.7	(8.4)±0.6	(0.2)±0.2	底面	船底面
116	E1	底面	底面	桶	I	b	8.1	2.4	6.2	—	(11.1)/12	2.4±0.7	6.2±0.6	—	底面	船底面
117	E1	底面	底面	桶	I	x	7.5	2.0	6.2	—	(11.1)/12	2.0±0.7	6.2±0.6	—	底面	船底面
118	E1	底面	底面	桶	I	x	7.9	1.9	6.6	—	(11.1)/12	1.9±0.7	6.6±0.6	—	底面	船底面
119	E1	底面	底面	桶	I	x	7.5	2.2	3.6	—	(11.1)/12	2.2±0.7	3.6±0.6	—	底面	船底面
120	E1	底面	底面	桶	V	x	8.4	2.5	3.4	—	(11.1)/12	2.5±0.7	3.4±0.6	—	底面	船底面
121	E1	底面	底面	桶	V	x	8.3	4.4	5.0	—	(11.1)/12	4.4±0.7	5.0±0.6	—	底面	船底面
122	E1	底面	底面	桶	V	x	—	(15.6)	6.9	—	(11.1)/12	—	—	—	内面に斜壁有	底面
123	耕土	—	—	—	IV	x	(8.0)	1.8	(5.0)	—	(11.1)/12	1.8±0.7	(5.0)±0.6	—	底面	底面
124	耕土	—	—	—	V	x	(8.7)	2.2	4.2	—	(11.1)/12	2.2±0.7	4.2±0.6	—	底面	底面
125	耕土	—	—	—	耕作	—	2.6	22.7	(8.6)	—	(11.1)/12	22.7±0.7	(8.6)±0.6	—	底面	底面

表 13 遺構観察表

遺構名	グリッド	窓全体				縦口	燃焼室				分煙柱		燃成室		煙道	
		全長	最大幅	主軸方位	標高上		標高下	幅	高さ	幅	床面傾斜角	高さ	幅	高さ	幅	
S YW1	E1	—	—	—	17.8	17.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S YW2	E1	BB+BT	(7.4)	9-47-E	18.7	13.9	—	(0.8)	1.6	0.6	—	—	0.6	2.4	29.6	—
S YW3	E1	BT+PT	(6.6)	9-29-E	18.3	13.6	—	(0.9)	(0.8)	—	計画不適	—	0.3	2.4	30.0	—
遺構名	グリッド	窓状				縦口	切り合い				法量(cm)				備考	
		平面	断面	に切られる	を切る		異様	矩形	矩形	深さ	—	—	—	—	—	
S K01	E1	楕円形	透形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S K02	E1	楕円形	透形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S K03	E1	(楕円形)	透形	SK02	—	—	—	—	0.972	-0.734	0.171	—	—	—	—	—
S K04	E1-E5	不定形	楕円形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	工房内作業場
S K05	E1	不定形	透形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S K06	E1	方形	透形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S P01	E1	円形	透形	透有するU字形	—	—	—	—	—	—	—	0.254	-0.212	0.351	ロクロビット	—

図版1 調査前・検出・調査区壁面



1.調査前 南西から



2.調査前灰原露出状況(F4) 東から



3.調査前SY03露出状況(F7・8) 北東から



4.調査区北半検出状況 南西から



5.調査区北壁 南東から



6.調査区西壁北半 南東から



7.調査区西壁南半 南東から



8.調査区南壁 北西から

図版2 遺構



1.調査区北半完掘 南西から



2.調査区南半完掘 西から

図版3 遺構



1.SY01前庭部完掘 東から



2.SY01前庭部断面 南東から



3.SY01焚口完掘 東から



4.SK01完掘 北東から



5.SK01断面 北東から

図版4 遺構



1.SK02完掘 北東から



2.SK02断面 東から



3.SK03断面 東から

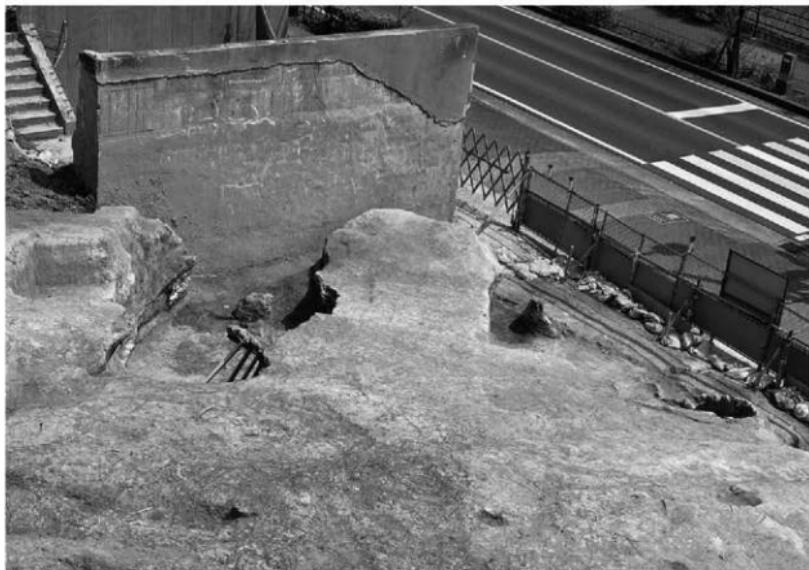


4.SK05断面 北東から



5.SK05遺物出土状況 北東から

図版5 遺構



1.SY02(左)・SY03(右)完掘 南西から



2.SY02完掘 南西から



3.SY02(窓体グリッドⅠ)天井検出 北から



4.SY02(窓体グリッドⅡ)天井検出 北東から

図版6 遺構



1.SY02分炎柱周辺遺物出土状況 東から



2.SY02(Aライン東半・Eライン)断面 南から



3.SY02(Aライン西半)断面 北東から



4.SY02分炎柱出土状況 南から



5.SY02掘削痕検出 北西から

図版7 遺構



1.SK04・SP01完掘 南東から



2.SK04遺物出土状況 北西から

図版8 遺構



1.SP01完掘 南西から



2.SP01断面 南から



3.SP01段下げ状況 南西から



4.SP01粘土出土状況 南西から



5.SP01断ち割り断面 南から

図版9 遺構



1.SY03完掘 南西から



2.SY03(Aライン西半・Bライン東半)断面 北東から



3.SY03(Bライン西半)断面 南から



4.SY03(Cライン西半・Dライン)断面 北から



5.SY03(窓体グリッドIII・V)壁検出 北から



6.SY03(窓体グリッドII・IV)壁検出 東から

図版10 遺構



1.SY03分炎柱出土状況 南西から



2.SY03断ち割り断面 東から



3.SY03(Cライン東半)断ち割り断面 北から



4.SK06完掘 北から



5.SK06断面 北から

図版11 遺構



1.灰原(C・Dライン)断面 南東から



2.灰原(Aライン北半)断面 北東から



3.灰原(Aライン南半)断面 東から



4.灰原(Bライン西半)断面 南西から



5.灰原(Bライン東半)断面 南東から

図版12 遺構



1.灰原(Cライン北半)断面 北東から



2.灰原(Cライン南半)断面 北東から



3.灰原(Dライン東半)断面 南から



4.灰原4遺物出土状況 南東から



6.灰原4遺物出土状況 南東から



5.灰原4遺物出土状況 西から



7.コンクリート基礎試掘断面 北東から

図版13 遺物 SY01前庭部、SK01・02・05



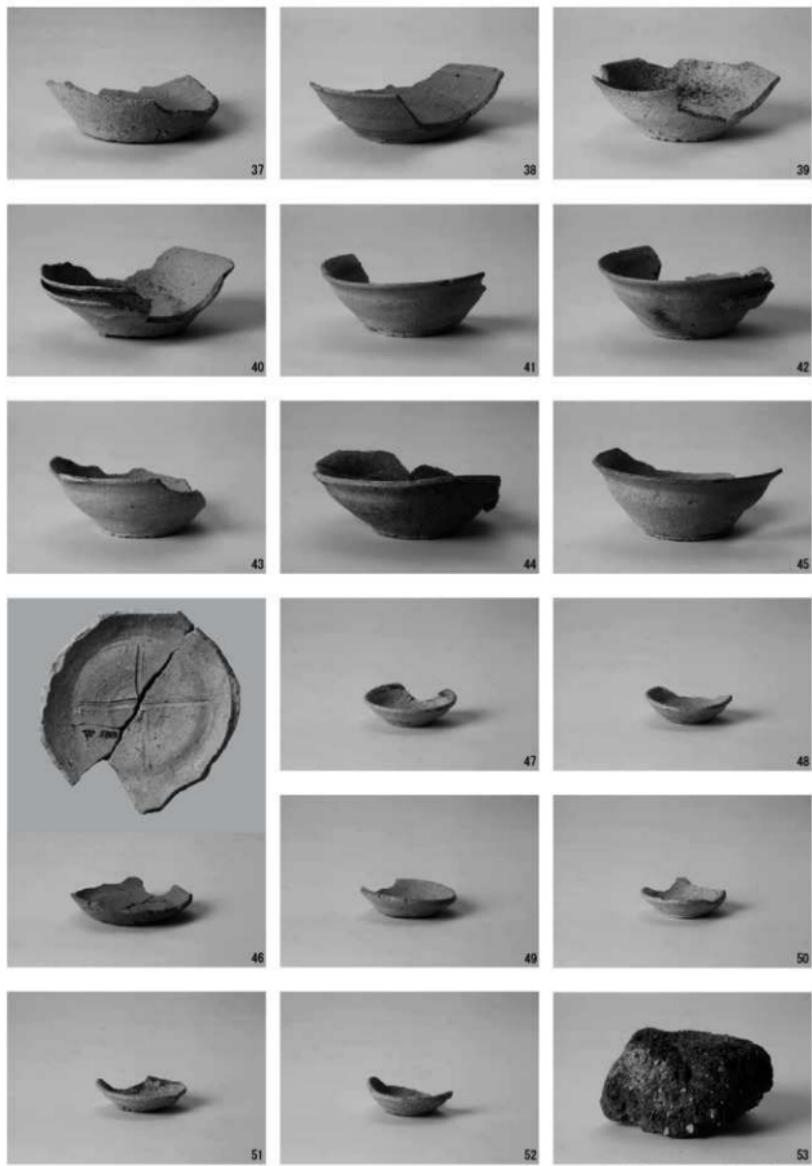
S Y01前庭部 : 1~6、SK01 : 7、SK02 : 8~11、SK05 : 12~18

図版14 遺物 SK05



SK05 : 19~36

図版15 遺物 SK05、SY02



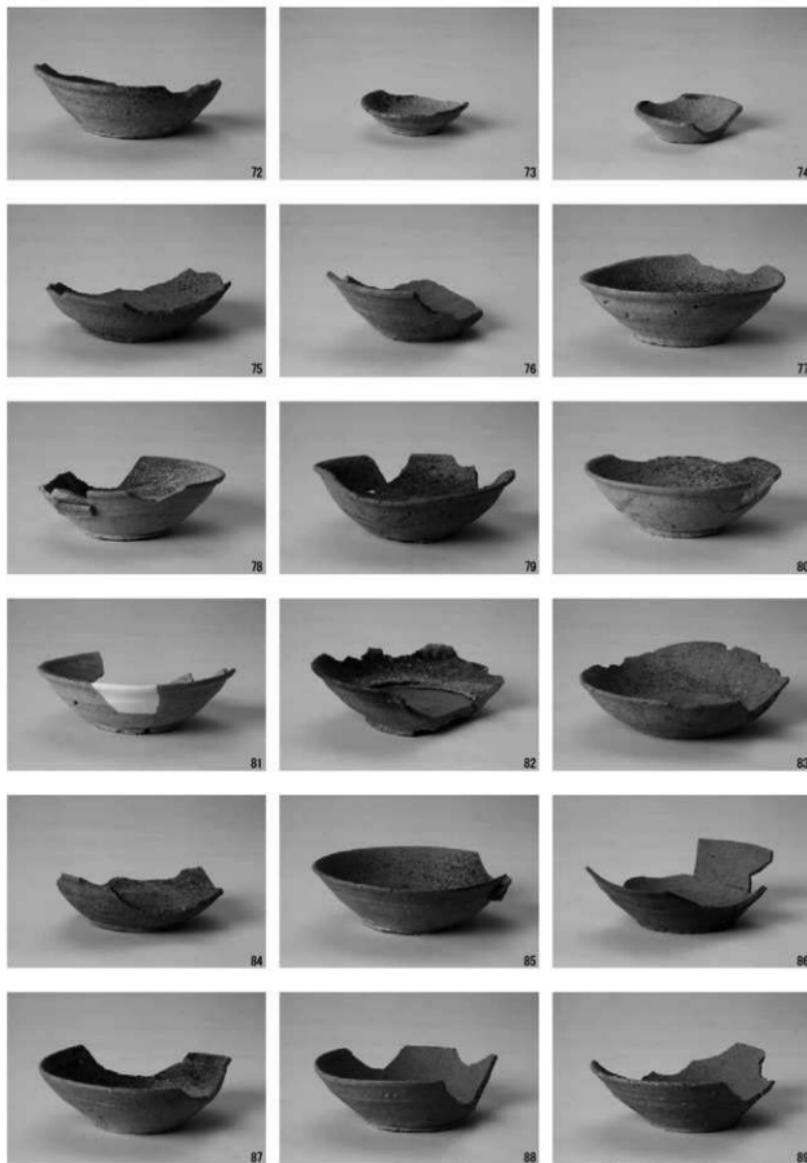
S K05 : 37、S Y02 : 38~53

図版16 遺物 SK04、SY03、SK06、灰原1・2



SK04 : 54~60、SY03 : 61~63、SK06 : 64、灰原1 : 65~69、灰原2 : 70~71

図版17 遺物 灰原2~4



灰原2：72~74、灰原3：75・76、灰原4：77~89

図版18 遺物 灰原4



灰原4：90～107

図版19 遺物 灰原4・5、遺構外



灰原4：108～110、灰原5：111～121、遺構外：122～125

報告書抄録

ふりがな	かわいにしこよう
書名	川池西古窯
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高橋理恵(編)・杉山敬亮・湯川善一・小林克也・田中城久
編集機関	株式会社二友組
所在地	愛知県名古屋市名東区龜の井3丁目177番地
発行年月日	平成29年12月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
かわいにしこよ 川池西古窯	おおぶし 大府市 ももやまちょう 桃山町 よんちょうめちない 四丁目地内	232238	4400075	35° 00' 53"	136° 58' 03"	20170213 20170421	333 m ²	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川池西古窯	窯跡	平安時代末 ～ 鎌倉時代初頭	窯体3基 土坑6基 ピット1基 灰原1	山茶碗の碗 山茶碗の小皿 山茶碗の片口鉢	窯体3基の検出 大府市域で初めての ロクロピットを伴う 工房を検出

要約

12世紀後葉～13世紀初頭に操業していた窯体3基、それに伴う前部、作業場、灰原を検出した。猿投窯で類例が少なく、大府市域では初めてのロクロピットを伴う工房を確認。出土遺物の割合は、山茶碗・小皿が大半を占め、片口鉢が少量であった。

平成29年12月25日発行

川 池 西 古 窯

-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

編集・発行 株式会社二友組
愛知県名古屋市名東区亀の井3丁目177番地

監修 大府市教育委員会
愛知県大府市中央町五丁目70番地

印刷 竹田印刷株式会社
愛知県名古屋市昭和区白金1丁目11番10号